

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

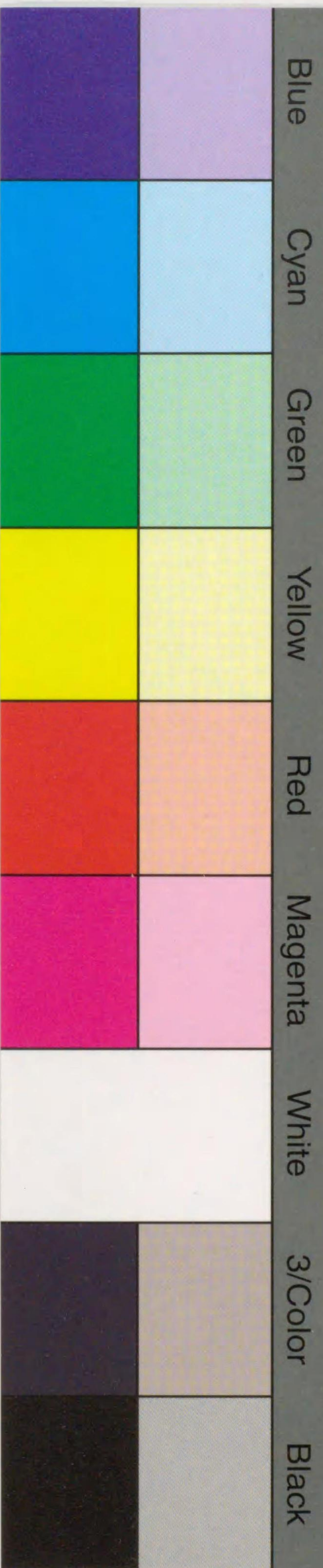
A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

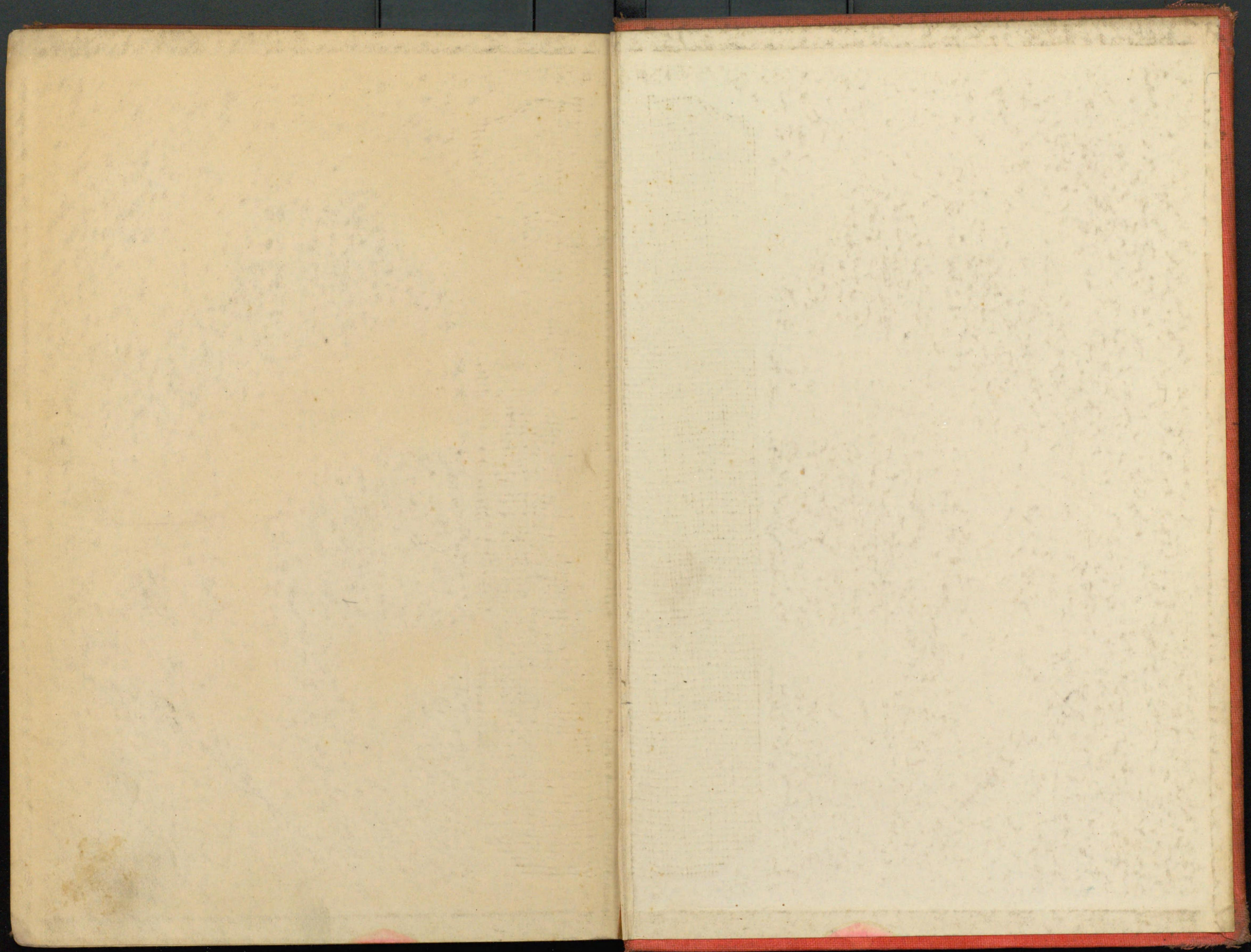


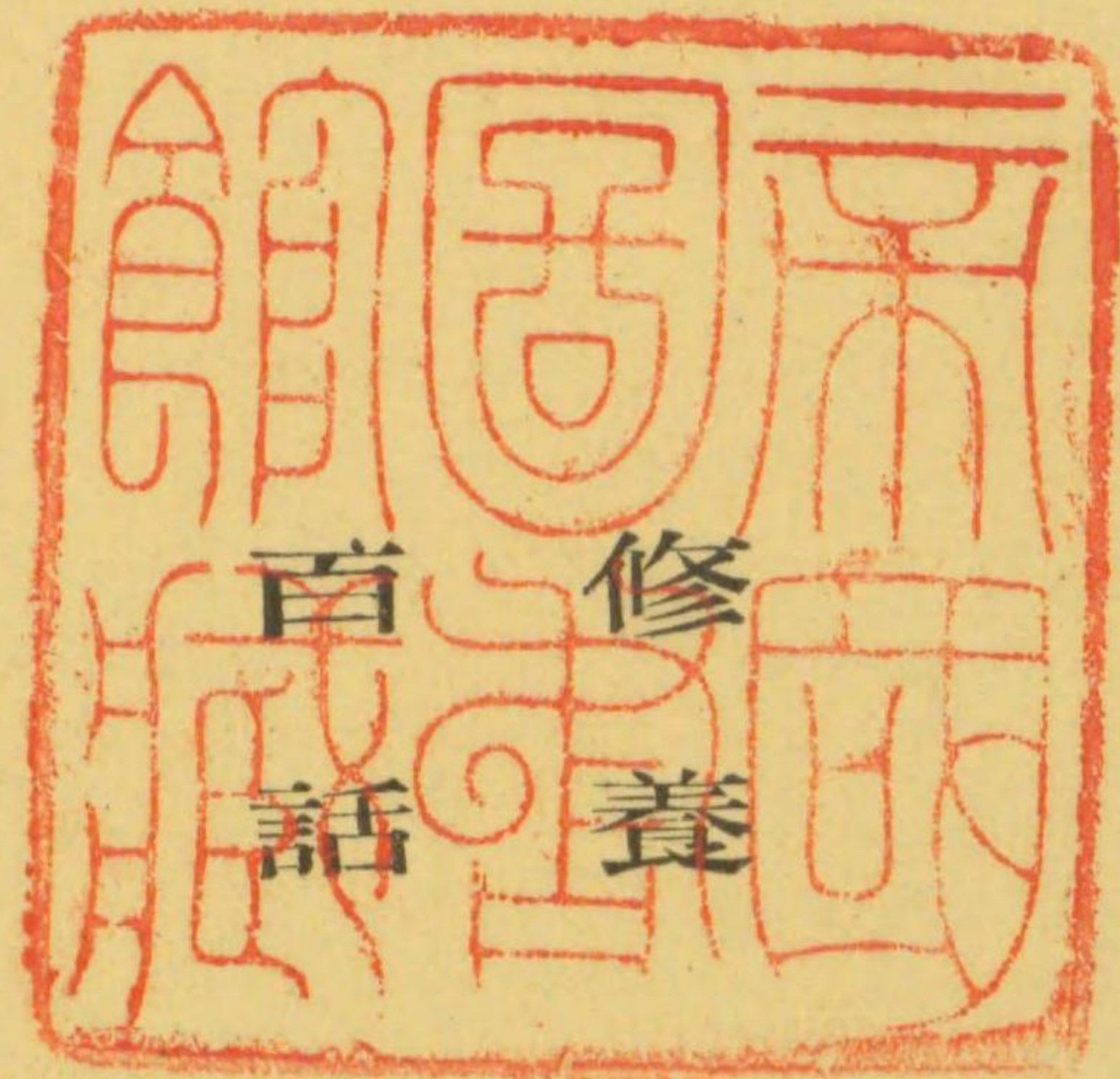
558-40



1200501511371







趣味讀本



序

此の書物は、私が、最も面白くて、さうして、有益であると思ふ話、即ち、趣味と修養とを兼ねた話、百篇だけを、古今東西の書物から選んで、これを自分の文章に書き改めたものであります。

此の書物にあつめた話は、ひろくいろいろの書物から採りました。さうして、それを書き改めるときに、或るものは、つとめてもとの書物の文章の味はひを残さうとしました。

此の書物は、私が、今日、はじめて書いたものでありません。四年ほど前に、「青年新修身」として、他の書店から出版したもののの中から抜いたものであります。

此の書物が世の中へ出るに當つて、一言を申添へておきます。

昭和二年二月

三 浦 藤 作

修養
百話 趣味讀本

目次

一	正直な樵夫……………	一
二	北風と太陽……………	四
三	町の鼠と田舎の鼠……………	五
四	たつた一つの奥の手……………	四
五	蛙の王様……………	八
六	川を呑み干さんとする犬……………	九
七	屋根の上の小山羊……………	二
八	阿呆鴉……………	三
九	馬と燕蓄……………	一四
一〇	のらくら者と燕……………	一六

一一 ソレ狼が来たぞ……………二七

一二 鹿と葡萄……………一九

一三 驢馬と狎……………二〇

一四 しつべい返し……………二二

一五 笛を吹く漁夫……………二三

一六 狼とその影……………二四

一七 植ゑかへた老木……………二五

一八 自業自得……………二六

一九 狐と鴉……………二七

二〇 蟻と蝨……………二九

二一 たのみにならぬ友だち……………三〇

二二 百姓と林檎の木……………三三

二三 愚かなる男の話……………三三

二四 松山鏡……………三六

二五 正直正吉……………三九

二六 歸つてくれたか……………四二

二七 たゞ一つのお願ひ……………四四

二八 夜の雪……………四九

二九 守銭奴……………五〇

三〇 肥大將軍……………五一

三一 二人の店員……………五二

三二 雪の夜道……………五四

三三 轉ばぬ先の杖……………五六

三四 小話二篇……………五九

三五 あはれにも勇しき物語……………六一

三六 勳章か金か……………六四

三七 好きこそ物の上手なれ……………六五

三八 一度も戸締をしたことはない……………七〇

三九	大統領よりのおくり物	七二
四〇	そんなものなら家にもあつた	七三
四一	あはれな富豪	七四
四二	身から出た錆	七五
四三	慾張男と嫉妬深い男	七六
四四	有馬の薬師	七七
四五	不幸な四人の話	七八
四六	義心に富める醫師	七九
四七	盡せぬ縁	八〇
四八	ベニスの商人	八一
四九	裸體行列	八二
五〇	鹿のなく音	八三
五一	苔の弓	八四
五二	安宅の關	八五

五三	有難與一兵衛	八六
五四	神のたまもの	八七
五五	公明正大	八八
五六	アシシのフランス	八九
五七	カーライルの忍耐	九〇
五八	カーネギー	九一
五九	ミリエル僧正	九二
六〇	リンコーン	九三
六一	奴隸解放	九四
六二	お前の生きて居る間は	九五
六三	僕はナポレオンより偉い	九六
六四	小話五篇	九七
六五	二宮尊徳	九八
六六	法を犯して法を教ふ	九九

六七	面白い知慧くらべ	一五三
六八	吉田松陰	一五六
六九	或る夜の藤綱	一五七
七〇	ワットの苦心	一五九
七一	曲亭馬琴	一六一
七二	はるばると母を慕ひて	一六五
七三	一人の武士に二百石	一六九
七四	張良と韓信	一七〇
七五	人知れぬ苦心	一七三
七六	新井白石	一七五
七七	周防が通る	一七六
七八	苜蓿餅の献上	一八〇
七九	武士の情	一八二
八〇	牛蒡狩の獲物	一八四

八一	海舟の逸話	一八七
八二	中江藤樹	一八九
八三	學者の清貧	一九六
八四	加賀の千代	一九八
八五	學問を好む青年	二〇〇
八六	あづま下り	二〇三
八七	馬齡薯王	二〇六
八八	鬼界が島	二一一
八九	雪のやどり	二一六
九〇	大西郷の逸話	二二四
九一	葛飾北齋	二二六
九二	小松原の法難	二三九
九三	俳人一茶	二三三
九四	錢屋五兵衛	二三六

九五 君平と蘆庵……………三九

九六 將軍と伍長……………二四一

九七 セシル・ローツ……………二四三

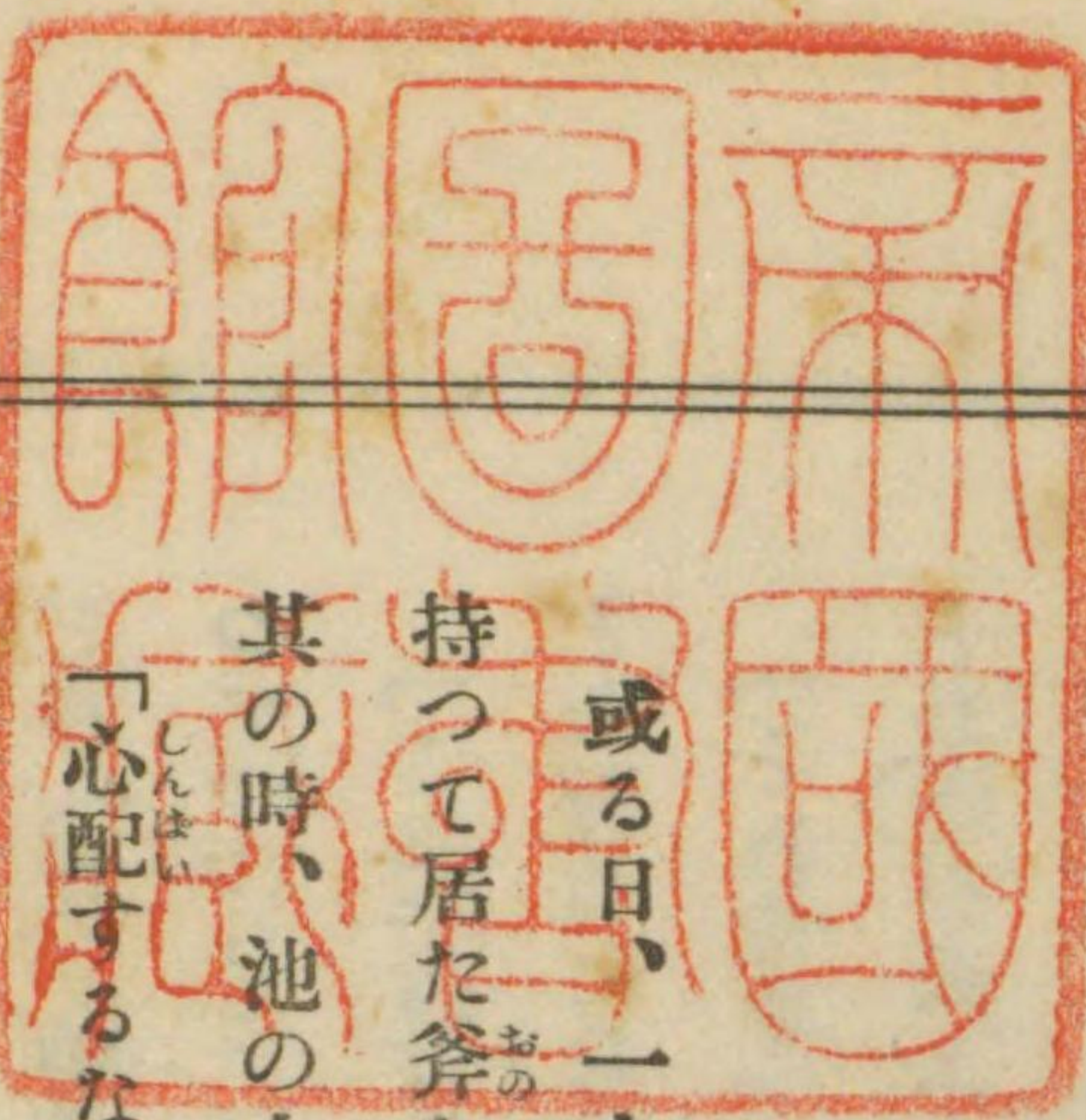
九八 よるべなき狐兒の爲めに……………二四五

九九 甲の浦哀話……………二五〇

一〇〇 イエスキリスト……………二五三

修養
百話
趣味讀本

一 正直な樵夫



或る日、一人の正直な樵夫が、山で木の枝を拂うてゐた。ところが、どうしたはずみにか、持つて居た斧を側の池の中へ落してしまつたので、樵夫は、ひとり思案に暮れて居た。すると、其の時、池の上に水けむりが立ちのぼつて、中から神様が現はれ、

「心配するな。お前の斧は拾つて來てやつた。これだらう。」

と言つて、立派な黄金の斧をお見せになつたので、正直な樵夫は驚いて、

「いゝえ、私のはそんなよい斧ではございません。」

と言つた。そこで、神様は、

「ぬうか。」

と言つて、水の中へお隠れになつたが、暫くして現はれ、

「お前の斧はこれだらう。」

と言つて、銀の斧をお見せになつた。樵夫は、

「いゝえ。」

と答へた。神様はまた水の中へ這入り、今度は樵夫の落したほんたうの斧をもつておいでになつて、

「これではないか。」

とお尋ねになつたので、樵夫は喜んで、

「それです。ありがとうございます。」

とお禮を云ふと、神様は、

「お前はなかなか正直だ。」

と其の樵夫の心がけのよいことをお賞めになり、樵夫の落した鐵の斧と一しよに、黄金の斧も、銀の斧も、みな下さつた。

樵夫は喜んで家に歸つた。其のことが近所の評判になつて、黄金の斧や、銀の斧を見に来

る人が澤山あつた。

隣の慾深爺さんは、これを見て其の斧が欲しくなり、自分も神様にこんなよい斧をもらいたいものだと思つて、樵夫が斧を落した池のある所をたづね、ひとりで其の山へ出かけて行つた。間もなく、其の池のほとりに着くと、慾深爺さんは、わざわざ自分のもつて居た斧を池の中へ投げ込み、

「早く神様が出て来て斧を下さればいゝに……」

とつぶやきながら、待つて居た。やがて、神様は、水の中から、立派な黄金の斧を持つて来て、

「お前の落した斧はこれではないか。」

とお尋ねになるや否や、慾深爺さんは喜んで、

「それです、それです。たしかにそれが私の斧です。」

と言つて、黄金の斧を受取らうとすると、神様は、

「お前のやうな不正直な者にはやれない。歸れ。」

と其のまゝ姿を消しておしまひになつた。

慾深爺さんは呆氣にとられて、しばらく水の上を見つめて居たが、神さまはもうどうしても

姿をお見せにならなかつた。慾深爺さんはとうとう黄金の斧がもらへなかつたばかりでなく、自分の斧も失くしてしまつて、すごすごと家に歸つた。

二 北風と太陽

ある時太陽と北風とがお互に力自慢をして居る時に、一人の旅人が彼方からやつて来るのを見て、太陽は北風に向ひ、

「お、いゝことがある。あそこへ一人旅人が来るでせう。あの旅人の着て居る外套を早く脱がせた方を勝としたらどうです。」

と相談した。氣の早い北風は、

「それは妙案だ、ちや、先づ私からはじめませう。」

と直に旅人を目掛けてヒューヒューと吹きはじめた。驚いたのは旅人であつた。急に寒い北風の襲撃を受けて、

「これは大變だ。うつかりすると風邪をひいてしまふ。」

とぶるぶる慄へながら、外套の中へくるまるやうにして歩いた。

北風は益々はげしく吹いた。北風の勢が烈しくなればなるほど、旅人は一層しつかりと外套の襟を押へて放さなかつたので、北風もそれには全く弱りきつてしまつた。

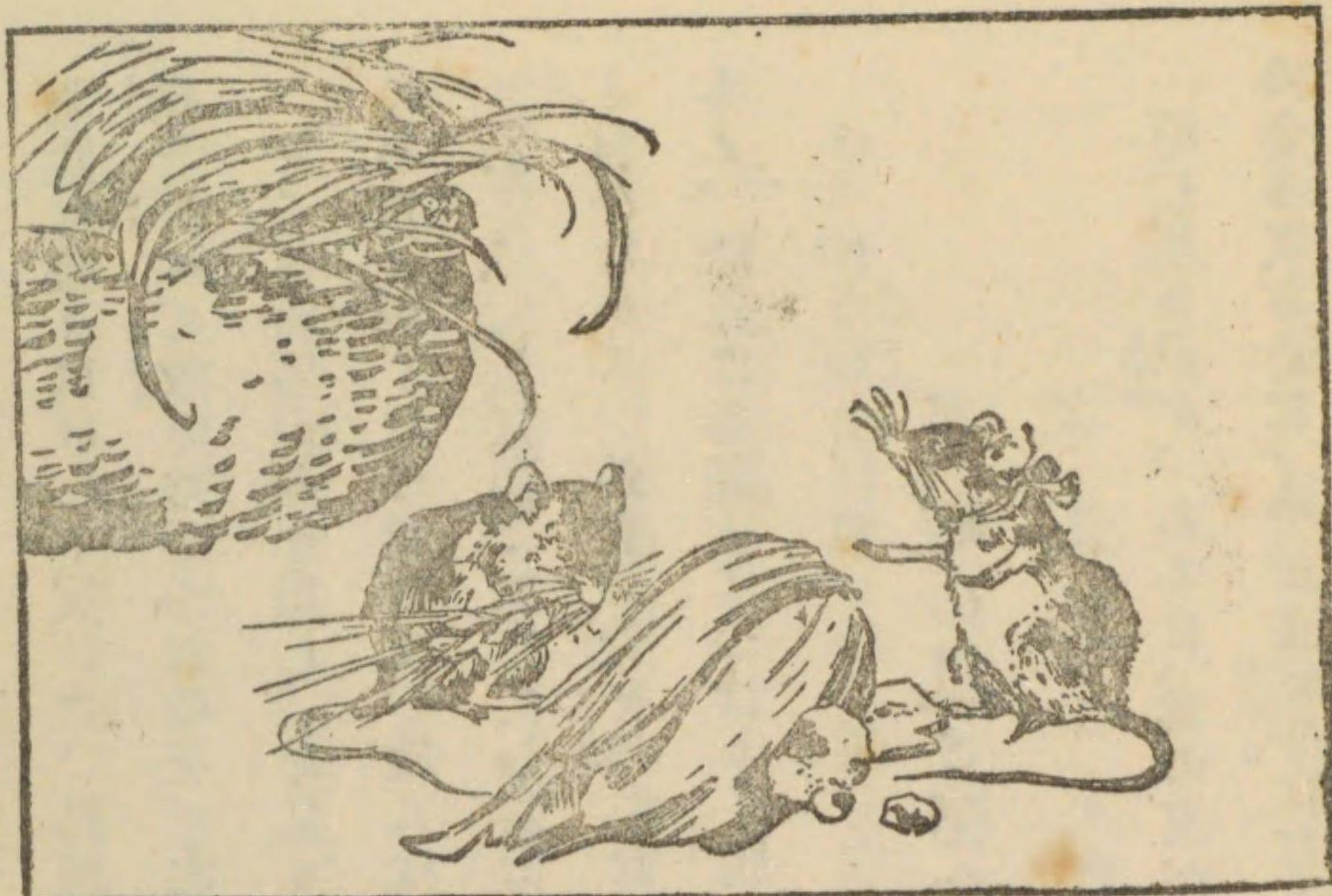
そこへ太陽が顔を出し、あたゝかい光を旅人に投げかけた。今までの寒さに引きかへて、急にあたゝかくなつたので、旅人は、

「お、いつの間にかよい天氣になつた。」

と言ひながら、外套の鈴を外した。その中に太陽がありつたけの力を出して、カッと照りつけると、旅人は外套をすつぽりと脱いでしまつた。

三 町の鼠と田舎の鼠

町に居る鼠が、ある日、其の友だちの田舎の鼠を訪れると、田舎の鼠は大變に喜んで、いろいろもてなした。やがて正午になると、麥殻だの、草の根だのを、澤山並べてご馳走をしたが、常にうまいものばかり食べて居る町のお客さまの口には合はなかつた。町の鼠は遠慮なく、



「こんな田舎に居る君はほんとに氣の毒だね。一度僕の所へ遊びに来てくれたまへ。それはそれはうまいものをご馳走してあげるよ。」と云つた。

それから数日の後であつた。田舎の鼠は町の鼠を訪れた。町の鼠は得意になつてパン粉だの、無花果だの、棗だの、いろいろな食物のはいつて居る貯藏室を見せた。田舎の鼠はただもう呆れて目ばかりパチパチさせて居るのみであつた。

やがて二ひきはご馳走の箸を取らうとすると、急に扉があいて人が這入つて來た。二ひきはびつくりして、食べかけのご馳走も放つておいて、狭くらしい穴の中へかくれ、息をころして居た。

間もなく、外が静かになつたので、二頭は穴を這ひ出して、再び食事をはじめた。途端にまた扉の外へ誰か近よる音がした。田舎の鼠は懲々して、

「僕はもうお暇するよ。いくら贅澤三昧にくらして居ても、かう四方八方呑ではとてもやりきれない。麥殻や草の根のやうなまづい食物でも田舎で氣樂に食べて居る方がどれ位よいかも知れない。」

とそこそこに別れを告げて立ち歸つた。

四 たつた一つの奥の手

森の中で猫と狐がばつたり出會つた。いろいろと話の末、狐は猫に向ひ、

「僕はどんな災難がふつてわいても少しも驚かないよ。いつでも臨機應變の計略をめぐらして、きつと脱れて見せるから……」

と自慢をした。これを聞いて居た猫は、さも感心したやうに、

「さうかね、それでは安心だらう。僕は奥の手がたつた一つしかないんだから、萬一それが外れると、もうそれきりだよ。」

と言つた。此の言葉が終るか終らぬ頃に、向ふから獵犬が七八頭揃つて飛んで來た。早くもこれを見てとつた猫は、今の今狐に話したたつた一つの奥の手を出し、すばやく側の樹の上に駆

けあがつて枝の間から下を覗いて居た。
 さあ大變なことになつたと、今までの自慢もどこへやら、樹の下の狐は、あちらへ逃げ、こちらへ走り、臨機應變の計略をつくしたが、獵犬の追撃をのがれることが出来ず、遂に非業の最後を遂げた。

五 蛙の王様

ある時澤山の蛙が集つて、がやがやと蛙會議を開き、

「われわれ蛙どもも、人間と同じやうに、王さまを立てることにしたい。」

と云ふ決議をして、萬物の主たる大神の許へ参り、王さまを授けて下さるやうにと願つた。神さまは蛙にも似合ぬ愚かな望みを心の中で笑はれたが、あまり蛙どもが強ひて願ふので、

「それではこれをお前たちの王さまにせよ。」

と一本の大きな丸太を池の上へ投げ落された。蛙どもは其の丸太が池の中へ落ちた水音に驚いて、一たん水底深くへかくれたが、やがて一びき二ひきと浮び上つて、水の上に首を出し、ど

のやうな王様であらうと様子を見た。ところが、丸太は、水の上に浮んだまゝ少しも動かないので、蛙どもはその王さまを馬鹿にし出し、さんざんふざけ廻つた末に、また大神の許へ出て、「あんな薄のろの王さまでは、蛙仲間の顔にかゝはりますから、もつとよい王さまをよこして下さい。」

と申し出た。神さまは、蛙どもの願ひをいさゝか不快に思はれ、

「それでは立派な王さまを下げてやるぞ。」

と言つて鶴を送られた。

鶴の王さまは池に下るが早いか、蛙を片つ端から食べはじめたので、蛙は非常に怖れを抱いたが、今更どうすることも出来なかつた。

六 川を呑み干さんとする犬

餓ゑた五六頭の犬が、凹んだ眼を光らせながら、あちらこちらと食物を探して歩く中、ある小川の水の中に、獸の皮が漬けてあるのを見出した。それを見つけた一頭の犬が、

「おいおい、犬も歩けば棒にあたるだ。うまいものがあるぞ。」
と云ふと、外の犬も大喜びで、

「ほんとによいものだ、さあ早くご馳走にならうではないか。」

一同ザブザブと川の中へ這入り、その獸の皮を食べようとしたが、水が多いのでどうしても口が届かない。一同は困つた顔をして、

「折角よい物を見つけたのに残念だなあ。何とかよい法はないだろうか。」
と考へて居たが、其の中の一頭が、

「よいことを思ひついた。みんなで此の川の水を飲み干して淺くすれば、皮を取るのにわけはないだらう。」

と言ひ出した。

「それは妙案だ。」

と外の犬は大に賛成して、水の中へ首を突つ込み、がぶがぶと飲み始めたが、遂に腹が水ぶくれになつて死んでしまつた。

七 屋根の上の小山羊

ある日のこと、一ぴきの小山羊が、納屋の屋根へ上つて、茅草の間に生えて居る草や芥を食べて居た。

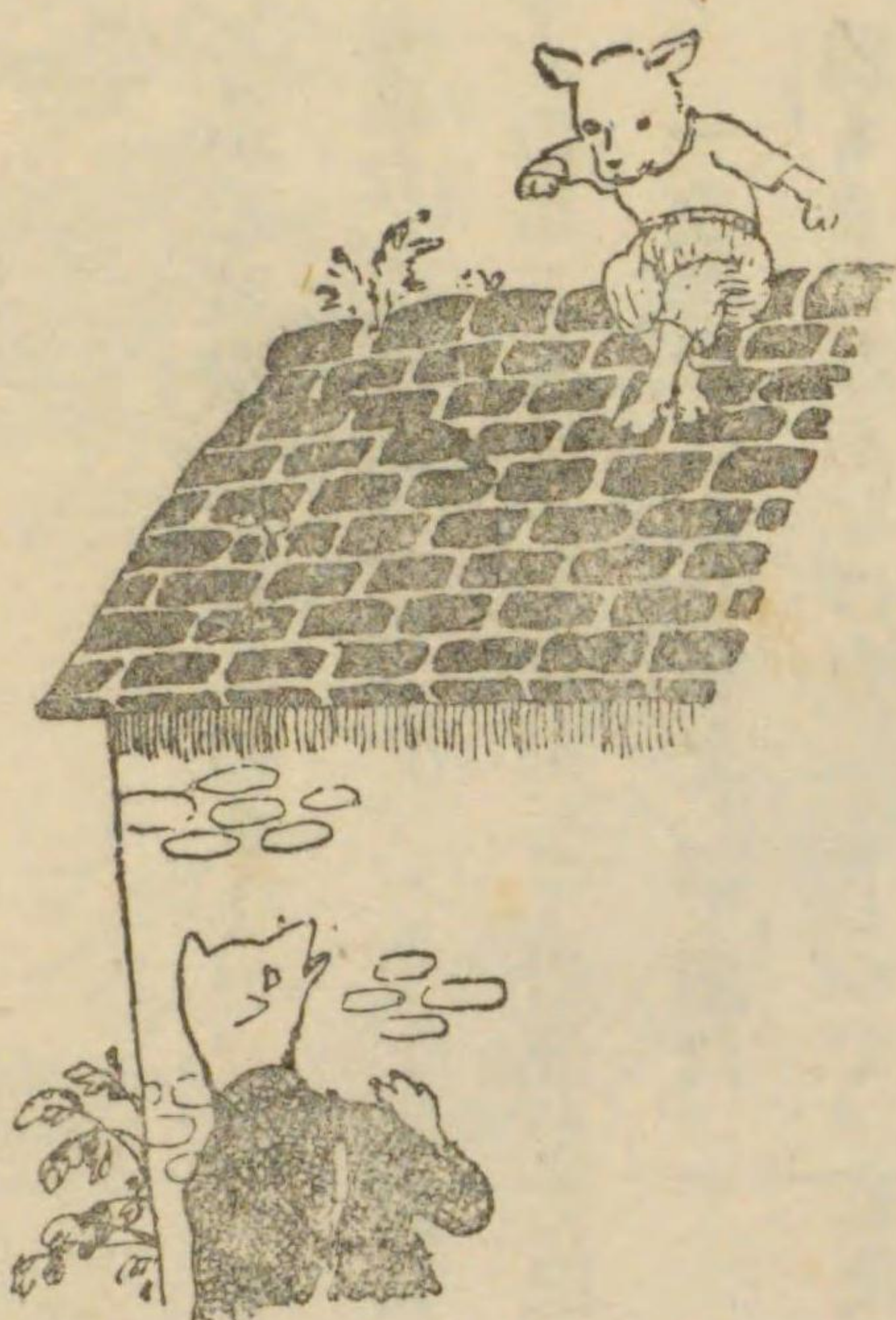
ちやうど其の時に屋根の下を狼が通りかゝつた。小山羊はこれを見て、

「いくら狼でもこゝまでは上つてこられまい。」
と思つて、たかを括り、いゝ氣になつて、

「やあい、やあい、やあい。」
と大きな聲でからかつた。

狼はこれをきいて、

「おい、小山羊、そこで此のおれを馬鹿にして
と言つて通りすぎた。」



八阿呆鴉

むかし萬物の主たる神さまが、鳥どもに向ひ、

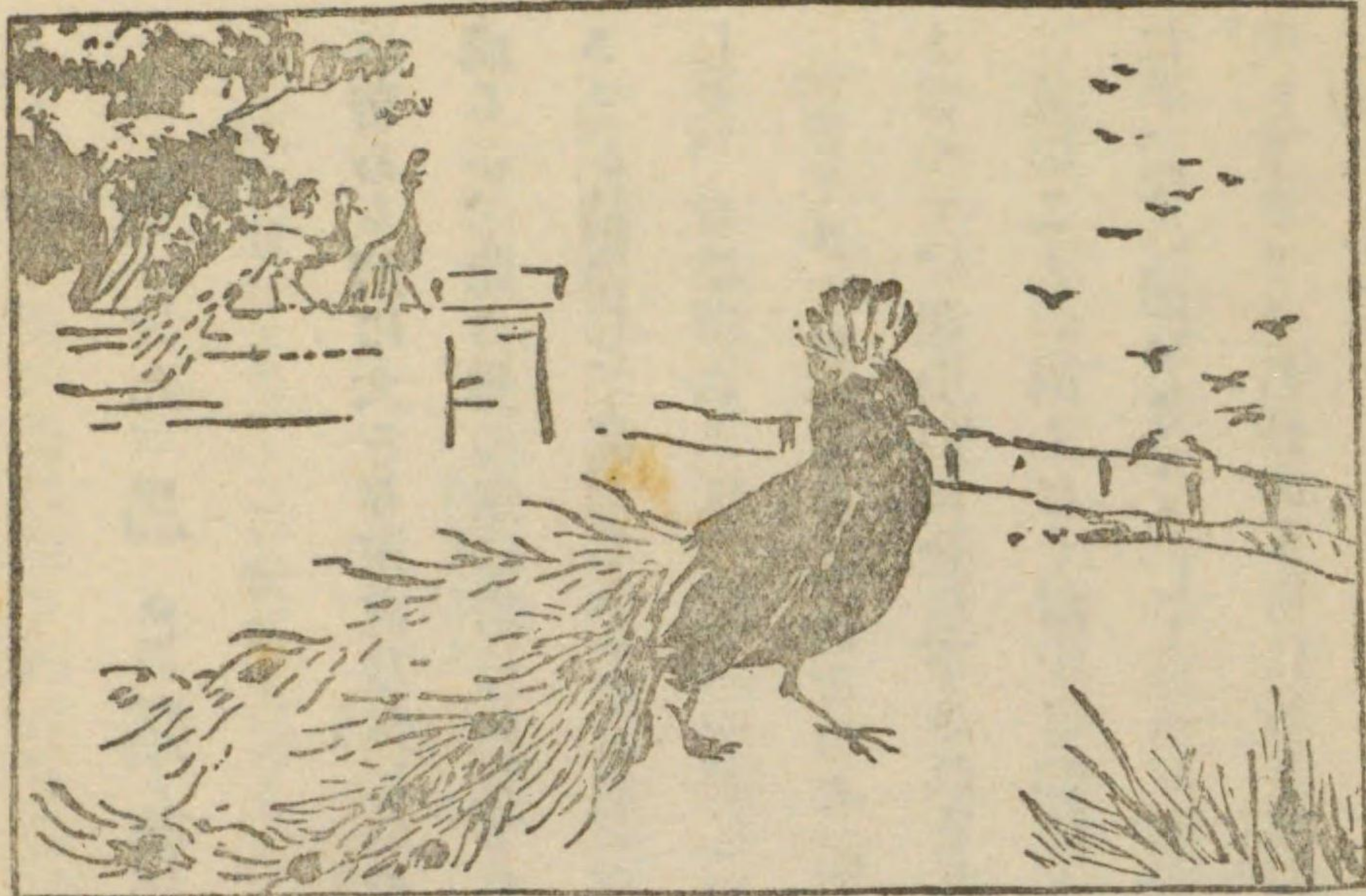
「お前たちの中で一番美しいものを、鳥類の支配者にしてやる」と云ふお布告をお出しになつた。多くの鳥どもは、どうかして自分が支配者になりたいものだ、毎日朝から泉のほとりに集まり、一生懸命にお化粧をして居た。

鴉もまたみんなの中にまじつて、お化粧をはじめたが、いくら洗つても黒いばかりで、少しも美しくならなかつた。鴉は、すつかり力を落し、

「これではとても検査に合格する筈がない、何とかして一ばん美しい羽根の鳥になれる工夫はないものかな。」

と考へたが、やがてふと思ひついて、

「さうだ。他の鳥が落した美しい羽根を拾つて、自分の身體につけるがよからう。」と、それから他の鳥どもが化粧して居つた所へ行き、そこに落ちて居る綺麗な羽根を拾ひ集め、



それを自分の身體につけて見ると、今まではまことに醜かつた鴉も、見ちがへるほど美しい姿となつた。そこで鴉は、得々として、

「占めたぞ。これならきつとおれが鳥類の支配者に選ばれる。うまい。うまい。」と其の日の來るのを待つて居た。

定めの日になると、澤山の鳥どもは、神さまの玉座の前に畏まり、静かに控へて、神さまの命を待つて居た。

神さまは一同を見渡した後、鴉の羽根の如何にも美しいのにお目を止められ、あはや彼を鳥類の王に撰び出さうとなされた。前から鴉の卓劣な振舞をひそかに憎んで居た多くの鳥どもは、此のありさまを見て大に憤慨し、他の鳥の羽根を借りあつめて美しく見せかけて居るあの横着者に王様の位を奪はれてたままるものか、面の皮を剥いでやれと、此の鴉を取り圍み、借りもの、羽根を一つ一つ抜き取つてしまつ

たので、鴉はもとのまゝのみにくい姿となり、みんなの前で赤恥をかいてしまった。

九馬ご蕪菁

昔ある所に大そう正直な貧しい農夫がありました。平素から家業に精出して居りましたが、或る年、此の男の畑に珍しい大きな蕪菁が一つ出来ました。農夫はこれを見て、いつもお地頭さまが精出してはたらくことをお喜びになるのを思ひ出し、わざわざ此の蕪菁を献上いたしました。お地頭さまは、農夫の美しい心がけをお賞めになり、

「さてさて見ごとなものである。」

と言つて、澤山のお金を下されました。

此のことが間もなく村中に知れました。其の村には、一人の大層慾の深い金持の男がいましたが、此の話をきゝまして、「お地頭さまはたつた一つの蕪菁でさへも、あのやうに澤山の御褒美を下さる。自分のうちに居る立派な馬を一匹き献上したら、どのやうなお賞めにあづかるかも知れぬ。」と、とんでもない慾心を起しまして、厩から馬を牽き出し、それをつれてお城に赴

き、やがてお地頭さまに差上げたいと申し出でました。お地頭さまは常から此の男の慾の深いことを聞いて居られるので、馬をくると云ふことをきいて、不審に思はれましたが、やがて、其のわけを察し、「ハ、アなるほど。」と合點し、其の男に向つて、

「折角のおくりものであるが、馬はいらないから、すぐに牽いて歸れ。」

と申されました。其の男はこゝぞと思つて、一生懸命に、

「お地頭さま、さうおつしやらずと、どうかお納め下さい。まことに粗末なものでございませうけれども。」

と強ひて懇願しましたので、お地頭さまは、漸く承知して、其の贈物を收められました。慾の深い男は、大そう喜んで、今にどのやうなよい御褒美を下さるであらうかと待つて居りますと、お地頭さまはけらいに向ひ、

「此の者はまことに世にも珍らしいよい品物をくれたから、其の返禮として容易に手に入れ難い品物を與へたい。あれをとらせよ。」

と言つて、彼の男に渡されたものは、先に農夫が献上した所の大蕪菁でありました。

一〇のらくら者ご燕

あるところに、一人の若者があつた。此の若者は、大變なのらくら者で、先祖から傳はつて居た身代もすつかりつかひはたし、今では着のみ着のまゝの無一物となつてしまつた。天氣のよい春の初めのある日、燕がひらひらと楽しさうに軒を飛びまはつて居るのを見たのらくら者は、

「もう燕がとぶ所を見ると、夏の時候になつたのだらうから、上着の必要もなくなつた。」と云ふので、早速上着を古着屋へ賣り飛ばし、若干のお金として、酒を飲んでしまつた。

ところがまだほんたうの夏ではなかつたので、急にまた天候が變つて、寒い日が續いた。かはいさうに燕はそれが爲めに死んでしまつた。

上着を賣つたのらくら者は、寒さにふるへて居たが、燕の死んだのを見て、

「此の畜生め！ほうたうに貴様のおかげで、おれまでがひどい目にあつたぞ。」と不足を云つた。

一一ソレ狼が來たぞ

ある村に羊飼の子どもがあつた。此の子どもは、毎日野原へ出て澤山の羊の番をして居た。ある日、此の子どもは、何とかして村の者をおどかしてやらうと、よくないことを考へ、突然大きな聲をあげて、

「狼が來た。狼が來た。」

と叫び出した。これをきいた村の人は、

「それ狼が來たぞ。羊をとられてはならぬ。はやく行つてなぐり倒してしまへ！」

と各自に棒や竹ざれを振り上げて、野原に駆けつけて見たが、狼らしい獣は一ぴきも居ない。羊はいつもの通り、楽しさうに草を食つて居るので、村の人たちは不思議に思つて、

「一體どこに狼が居るんだ。」

と子どもにきいた。子どもは、

「大きにご苦勞さま…あははは。」

と大きな聲で笑つて居たが、村の人は子どもに一ぱい喰はされたとは氣が付かず、
「もう逃げてしまつたのか、惜しいことをした。」

と云ひながら、引返して行つた。子どもは計略がうまく當つたので、面白くてたまらない。それから二度も三度も同じやうな手で村の人を欺いた。村の人たちも、しまひには、

「こりや小僧にだまされた居たんだぞ。」

と氣がついて、いまいましがつて居た。

それから間もなく、今度は本物の狼が出て來たので、子どもは大いに驚き、一生懸命に、

「狼だ。狼だ。」

と怒鳴り立てたが、村の者は、

「またいつもの悪戯者の仕業だ。いつまでも其の手に乗るもんかい。」

と耳にも止めなかつたので、狼は片つ端から羊を食ひ殺して舌鼓を打ちながら、悠々と其の場を
引き上げた。

一二 鹿と葡萄

ある時一頭の鹿が獵人に追はれて逃げる途中、都合よく其處にあつた葡萄の樹の葉かげに身をかくした。

鹿を見失つた獵人は、あちらこちらを眺めたが、此の葡萄の葉の中に鹿がかくれたとは少しも氣がつかず、急いで其の場を立ち去つた。

鹿は危険がなくなつたので、ほつと安心して、あたりを見まはすと、葡萄の實が澤山熟して居るのが目についた。そこで、のそのそと首をあげて、その實を喰へはじめた。すると、それにつれて、葉のがさがさと揺れる音がしたので、此の物音を聞きつけた獵人は、ふりかへりながら、
「あんなに葉が揺れて居る所を見ると、あの中にはきつと何かかくれて居るにちがひない。」
と思つて、動いて居る葉を目標に、一本の矢を放つと、その矢は見事に鹿に命中して、どつと地上へ横に倒れた。痛手に堪へかねた鹿は、

「こんな情ないことになるのも、親切に自分をかくまってくれた葡萄の恩を忘れた報いだ。」

と嘆いたが間もなく息は絶えた。

一三 驢馬と狎

ある家に驢馬と狎とが飼はれて居た。

驢馬は厩の中に住み、毎日澤山の燕麥と乾草とをあてがはれ、穀物を車に積んで運んだり、臼に入れて搗いたり、いろいろの仕事させられて居た。

それに引き換へて、狎は定まつた仕事もなく、たゞ主人の膝にじやれついたり、前掛の中に寝たりするのみであるのに、大變主人から可愛がられて、驢馬よりもずっとおいしいものを與へられて居た。

驢馬は狎を羨しがり、自分もどうかして今のやうな烈しい労働をやめ、狎のやうに氣樂な生活をしたと思ひ、ある日つながれて居る繩を引き切り、食事をして居る主人の所へ飛び込み、狎の眞似をして、主人にじやれついた。ところが、生れつき不器用な驢馬は、狎の様に巧みにふざけることが出来ないで、どたんばたん滅茶苦茶にそこら中を跳ね廻はり、卓をひ

つくり返すやら、皿や小鉢を打ちこはすやら、大變な騒ぎをはじめた。それだけにして置けばまだよかつたのに、驢馬は圖々しく、いつも狎がするやうに、いきなり主人の膝に這ひ上らうとした。これを見た召使の者どもは、

「此の驢馬め、氣が狂つたに相違ない。」

と各自に棒切だのステッキだのを持つて來て、驢馬を所かまはず叩き伏せ、やつと厩の中へ追ひ込んだ。

半死半生になつた驢馬は、ため息をついて、

「これもみな自業自得だ。おれはおれだけの地位に満足して居ればよかつたのに、あんな小犬などの眞似をして、つまらないことをした。」

と後悔した。

一四 しつぺい返し

紅い總の手綱の黄金の鞍を置いた立派な馬が、自分より偉いものはないと云ふやうに、大威

張りて往來を走つてゆく途中で、重い荷物を背負つて、苦しうに喘ぎながら、あちらからやつて来るよぼよぼした驢馬に出會つた。驢馬が通路を避けようとする時、馬は肝癪を起して、

「やい。此の間拔けめ。ぐつぐつして居ると蹴飛ばすぞ。」

と怒鳴りけた。驢馬はむつとしたが、じつと腹の虫を抑へて、おとなしく側を通り過ぎた。

間もなく其の馬はふとしたことから脚を痛め、乗馬の役に立たなくなつたので、早速百姓の手に賣られてしまひ、朝から晩まで野良仕事の手傳をして、汗みどろになつて働かねばならぬことになつた。



ある日、例の通り肥車をひいて行くと、むかふから来た一びきの驢馬にばつたりと出會つた。驢馬は通りすがりに、其の馬の顔をしばらく眺めて居たが、
「これはこれは、誰かと思つたら君でしたか。あの時の綺麗な手綱やびかびか光る鞍はどうしましたかね。」
と嘲笑して通り過ぎた。驢馬はハツと赤面して冷たい汗を流した。

一五 笛を吹く漁夫

ある濱邊に笛を吹くことの上手な漁夫が住んで居た。
一日笛と網とを持つて濱邊に出かけたが、網は打たうとせず、巖の上に腰をかけてゆるゆると笛を吹きはじめ、心の中で思ふやう、
「かうして上手に笛を吹いて居れば、今にも海の魚どもが、此の笛の音をきいて、きつと浮れて波の上に躍り出して来るにちがひない。」
としきりに吹きつゞけ、

「今に海の魚どもが躍り出すぞ。」

と思ひ思ひ、海を見て居たが、一尾の小魚さへも姿を見せない。

流石の漁夫もすつかり失望し、笛を吹くことをやめて、直ぐさま網を打ち、これを引き上げて見ると、澤山の魚は網と一しよに濱邊へあげられ、砂の上でびよんびよんと踊り出した。これを見て漁夫はいまいますが、大きな聲をあげて叫んだ。

「折角笛を吹いてやつても踊らうとはせず。笛をやめてから踊るのか。此のろくでなしめ。」

一六 狼ごその影

一頭の狼が夕方廣い野原を通りかゝると、沈みかけた太陽の光りを受けて、廣くとした砂の上にながながと自分のかげが射した。

狼は自分ながらそのかげの大きいのにびつくりして、

「まあ、何といふ大きな影だらう。おれは、今日まで、こんな大きな獣だとは自分にも知らなかつた。これほど大きなおれがなせあの獅子などを恐しがつて居たんだらう。馬鹿々々し

いことだつた。これでは獣の王になるのは、獅子でなくておれに違ひない。」

と獨言を云ひながら、反り身になつて、大股に威張りかへつて歩いて行くと、横合から突然一頭の獅子がそこへ現はれ、たゞ一口に噛みつかうとしたので、狼は今までの元氣もどこへやら、蒼白になつて、ぶるぶるふるへながら、漸く其の場を逃げ出し、やつと難をのがれ、汗をふきながらつぶやいた。

「あ、あ、危いこと。おれはすみみす空想にだまされて、自分を買ひかぶり、すんでのことで命を失くするところだつた。」

一七 植ゑかへた老木

ある農家の裏庭に、一本の古い林檎の木があつて、毎年美しい實を澤山結んだ。其の家の主人は喜んで、大に此の木をいたはり、實が熟すると、必ず地主の所へも持つて行つた。

地主は林檎が大好きであつたから、淺はかにもふと慾心をおこし、

「いつそ、あの木を、自分の庭へ植ゑかへさせてやらう。さうすれば、林檎はみな自分のもの

になるわけだ。」

と考へて、その百姓に命じ、その林檎の木を自分の庭へ植ゑかへさせた。

しかるに、其の林檎の木はもう大ぶん老木であつたから、場所を變へた爲めに、急に元氣がなくなり、間もなく枯れてしまつた。地主はがっかりして

「あゝ、自分は何といふおろかなことをしたであらう。人の持つて來て呉れるだけで満足して居ればよかつたのに、つまらぬ慾心を出した爲めに、大事な木まで枯らしてしまつた。もう來年からあのおいしい林檎を食べる楽しみもなくなつた。」
とつぶやいた。

一八 自業自得

ある日、一人の樵夫が、森の中へ這入つて、竝んで居る樹に向ひ、

「まことに濟みませんが、斧の柄を作るのですから、どうか一本伐らせて下さい。」
と頼むと、そこに居た老木たちは、

「至つてお易い御用です。ご遠慮なく伐りなされるがよい。」

と言つて、秦皮樹の若樹を一本樵夫に與へた。

樵夫は。早速それで斧の柄を作つた。柄が出来上ると、

「これで斧も役に立つやうになつた。どれ、早く木を伐つてお金を儲けませう。」

と森の中の一ばん立派な樹からどんと伐りはじめた。

驚いたのは森の中の老木たちである。

「これはとんでもないことになつてしまつた。もうおれたちも駄目だ。今となつては誰を責めることも出来ないが、若しあの時に若樹を助けておいたならば、こんなことにはならず、おれたちも千年萬年と生きながらへることが出来たであらうに……」

一九 狐と鴉

一羽の鴉が一片の肉を拾つて來て、木の枝の上でこれから食べようと思つて居ると、其の下を一びきの狐が通りかゝつた。狐は鴉の口にくはへて居る肉のほひを嗅いで、急にそれが食

べたくなり、鴉に向つて、

「これは鴉さん。今日はよいお天気でございますね。」

とにこにこしながら、

「お前さんはまあ何といふ美しい鳥でせう。お前の羽は黒いびらうどのやうに輝いて、ほんといつ見ても見事です。お前さんは森の女王さまだよ。どうです、女王様、その羽根の色と同じやうに、美しいお聲をきかせて下さいね。」

とうまいことを云ふと、欺だまられるとは少しも知らず、ほめられて得意得意になつた愚おろかな鴉は、

「カー！」

と一聲高く啼ないた途端たんに、くはへて居た肉の片は、ぼたりと落ちてしまつた。狐は待つて居ましたとばかりに、その肉を拾ひ

「おい鴉さん。うぬぼれものをおだて、世を渡る追従者ついでものが恐ろしいと云ふことがわかりましたかね。それがわかれば肉の一片や二片はやすいものでせう。」
と云つて笑つた。

二〇 蟻と蝨

ある冬のことである。天氣のよい日に蟻ありが貯へておいた穀物こくもつを乾ほして居ると、そこへ瘦やせ衰おとろへた蝨きりぎりすが来て、あはれな聲で、

「まことに恐れ入りますが、何か少しお恵めぐみ下さい。わたくしは餓うえて死しにさうでございます。」
と頼たのんだ。蟻は、

「それはお氣の毒なことです。お前さんは、なせ冬の用意に食物を集めて置かなかつたのですか。」

ときいた。蝨きりぎりすは、

「食物を集めて居るひまがございませんでしたから………」
と答へた。

「暇ひまがない！」

蟻は聞き答こためて、

「お前さんは此の夏何をして居なかつた。」
と詰つた。蝨は、

「夏の間は歌ばかりうたつて居りましたので、外のことをすることが出来なかつたのです。」
と答へた。蝨は笑ひながら云つた。

「夏の間仕事をせず、歌ばかりうたつて暮したといふなら、此の冬はまあ踊でもして居るより
外に仕方がないでせうな。ははは。」

二一 たのみにならぬ友だち

誰にでも如才なくつき合ふ交際上手な兎が、いつも多くの友達のあるのを自慢にして居た。

ある日、澤山の獵犬が押しかけて來るといふ噂をきいて、兎は大に驚き、

「かう云ふ時こそ友だちを多くもつて居るものは幸だ。みんなに頼んで加勢をして貰はう。」
と、先づ馬の所へ來て、

「どうか、後生ですから、犬の來ない中に、私を背負つて逃げて下さい。」

と頼んだ。馬は、

「折角のお頼みだが、主人の用で忙しいから、とてもそんな暇はない。お前さんはお友だちが

澤山あるから、外へ行つてお頼みなさい。」

ときつぱり斷はつてしまった。兎に仕方がないから、牛の所へ來て、

「どうかお願ひですから、あなたの強い角で犬どもを追つ拂つて下さい。」

と頼むと、牛は、

「お氣の毒だが、私は今日少しぬけられない用があるから、山羊の所へ行つて頼んでごらん。」

と云つて聽いてくれない。兎はまた山羊の所へ行つて頼むと、山羊は山羊で、

「君をのせて逃げるのはわけもないが、落して怪我でもさせては悪いから、これはお断はりし
た方が君のおためせう。」

と云ふ。兎はまた羊の所へ行くと、

「氣の毒だがそれはおれにも出来かねるよ。獵犬から見れば羊も兎も別に變りはないからね。」
と云つて肯いてくれない。最後に牘を訪ねると、

「何とかしてあげたいが、親がりの身の上の私が、外の方々の辭退されたあとを引受けるこ

とも出来ない。」

と體よく拒絶した。頼みの綱も切れはて、兎ははじめて友だちをあてにしたことを後悔したが、時既に遅かった。はや獵犬は間近く追ひ迫つて來た。もう仕方がないが、逃げられるだけは逃げようと、足にまかせて、其の場を駆け出した。

二二 百姓と林檎の木

ある百姓の家の庭に、一本の大きな林檎の木があつたが、實は一つも生らず、雀や蠅がその葉かげに來て歌をうたつて居るばかりであつたから、百姓は愛想をつかし、

「こんな木をここに置いても邪魔になるばかりだ。伐り倒して薪にでもしてしまはう。」

と云ひながら、斧をもつて木の下へやつて來た。これを見た雀や蠅は驚いて、

「もし、お百姓さん、あなたが此の林檎の木を伐つておしまひになりますと、わたくしどもは棲家がなくなります。どうか伐り倒さないやうにして下さい。そのかはり、あなたがお庭へ出してお仕事をなさる時に、わたくしどもは歌をうたつてあなたを慰めてあげます。」

と嘆願した。百姓は耳にも入れず、斧をふりあげて、真二つに切つてしまはうとしたが、その時にふと目についたのは、空洞になつて居る木の幹に澤山の蜜蜂が蜜を作つて居ることであつた。

百姓は思ひがけない掘出しものを見つけたので、

「矢はり、此の古い木は大事にしておくねうちがある。」

とつぶやきながら、斧をそこへ放げ出した。

二三 愚かなる男の話

昔ある所に半藏と云ふ男がありました。三年ばかりの間、よその家へ雇はれて行き、給金として五十兩程の大金を貰ひました。半藏は鬼の首でも取つたつもりで、其の金を風呂敷につみ、首つ玉へしばりつけ、ぶらぶらと歸つて來ました。其の道に一つの小さい牧場がありました。其の傍を通りますと、一人の男が牝牛に食物を與へて居りました。半藏はしばらくそれを見て居りますと、牧場の男が、馴しく半藏に話しかけましたので、半藏も自分の身の上を語り、三

年の間よそに奉公をして五十兩の金をもうけ、今歸る所であることまで打明けました。

話をきいて居た牧場の男は、半藏に向つてしきりに牝牛の效能を述べ、牛乳の滋養になることや、高價に賣れることなどを話し、金は持つて居れば盗まれると云ふ危険があるが、牝牛は盗まれる心配もなく、また五十兩位の金は、牛乳を賣れば直にとれることなどを語つたので、半藏はつい其の牝牛が欲しくなり、牧場の男に頼んで、五十兩の金と牝牛とを交換して貰ひました。

半藏は、喜んで其の牝牛を曳いて歸つて來ますと、やがて一人の羊飼に逢ひました。羊飼は半藏と牝牛とを見くらべながら、不思議さうに、其の牝牛をどこで求めたかときゝました。半藏は、五十兩の金と換へたことを得得として答へました。羊飼は、此の半藏が愚かな男であることを悟りましたので、

「お前さんはほんたうに氣の毒な人だ。其の牝牛はもう老ぼれて居て、乳などは出ない。牧場の主人にだまされたのだ。」

と言ひました。半藏は顔色を變へて驚きました。羊飼は、心の中で笑ひながら、牝牛よりも自分のつれて居る羊の美しいことや、羊の毛の需要者の多いことなどを語りました。半藏は、そ

の話をきいて羊がほしくなり、羊飼に頼んで牝牛と交換して貰ひました。羊飼は其の牝牛を曳いて行つてしまひました。

やがて川のほとりへ來ると、一人の男が砥石を出して、せつせと刃物を磨いで居ました。半藏は、しばらくそれを眺めて居ましたが、やがてそれを磨いでどうするのかとたづねました。その男は磨屋を渡世とする者でありました。彼は半藏の愚かな男であるのを見てとりまして、言葉巧みに砥石の效能を並べこれさへあれば、決して一生涯のくらしには差支ないことを話し、「羊は病氣に罹つて死ねば、すつかり損をしてしまはなければならぬが、砥石は死ぬといふことはない。」

と言つてきかせますと、半藏は又その砥石が欲しくなり、とうとう羊と交換して貰ひました。磨屋は羊をつれて行つてしまひました。

半藏は、喜んで其の砥石を風呂敷に包み、首にかけて、段々川堤を上つて來ましたが、何しろ夏の最中ですから、暑くて仕方がありません。汗は額からも背からもだくだくと流れました。

半藏は其の苦しさに堪へかねて、砥石が急に邪魔になり出しました。しばらく歩いてから、川岸に降り、水を飲まうとした途端に、首にかけて居た砥石は、するすると包から滑つて、水底

深く沈んでしまひました。

半歳はそれを見て大に喜び、

「厄介なものがなくなつてよい。自分ほど幸福な者はない。」
とひとりごとを言ひました。

二四 松山鏡

昔越後の國の松山といふ所にあつた話であります。夫婦の間に一人の少女をもつて、睦しく暮して居る家がありました。或る年其の母はふとしたことから重い病にかゝりました。親切なお父さまと、孝行な少女とは、いろいろと介抱をしましたが、其の甲斐もありません。そこで、お母さんは、少女を呼んで、

「これ娘、お母さんはもうとても助かるまいと思ふが、お母さんが死んだ後は、どうかお父さんに孝行をつくしておくれ。それから、此の鏡は、お父さんがいつか京都からお土産に買つて来て下さつたものだが、お前にあげる。若しお母さんに逢ひたいと思つたら、これを出し

てごらん。いつでも私に逢へるから。」

といつて、小さい美しい鏡を出して少女に渡しました。それから間もなく母は此の世を去つてしまひました。残つた父と子は涙を流してかなしみましたが、どうすることも出来ません。泣く泣くお葬式をすませました。

それから二三年たつてからのことでありました。お父さんは、ある人の薦めによつて、二度目のお嫁さんを貰ひました。少女は此の新しいお母さんにも、前のお母さんと同じやうに孝行をしましたが、どうしたものか、此の繼母は少しも少女を可愛がらず、何かとつらくあたりました。少女は、それをかなしく思ひました。さうして、ほんたうのお母さんのことを思ひ出し、もう一度逢ひたいものだと思へましたが、死んでしまつたお母さんの生き返る道理はありません。其の時にふと思ひついたのは、母の形見の鏡のことでありました。

「さうだ。さうだ。あの鏡を見ればお母さんに逢へる。」

と少女は其の鏡を取り出して見ると、若く美しいお母さんの顔がうつりましたので、少女はなつかしさのあまりに嬉し泣きに泣きました。

それからと云ふものは暇さへあれば一間の中へ這入つて、その鏡ばかりを眺めて居りました。

繼母は、不審に思つて、ある日そつと覗いて見ますと、少女が一心に光つたものをみつめて居ますから、鏡だと云ふことは知らず、これはきつと少女が何かまじなひをして、自分を祈り殺すのちにちがひないと、大そう腹を立て、其のことをお父さんに告げ、

「どうか少女を此の家から追ひ出して下さい。それでなければ私にお暇を下さい。」

と言ひました。お父さんは、少女に限つてそんなことはないと思ひましたが、捨て、も置かれぬと、少女の居る室の中へ行つて見ますと、少女は、驚いて鏡を袂の中へかくしました。お父さんは、鋭い聲で、

「お前は今何をして居た。たとへ繼母であつても、祈り殺さうといふやうな心を起してはよくない。かくしたものを見せろ。」

と叱りつけますと、少女は鏡を取り出してお父さんの前に置き、

「私がお母さんを祈り殺すなんつて、とんでもないことを仰しやいます。」

と言ひ、なほ母の形見の鏡を見て、亡き母に逢つて居ることを詳しく語りました。お父さんは、これをきいて、

「お、さうであつたか。鏡には自分の顔がうつるのだ。お前の顔がお母さんによく似て居るか

ら、お母さんがさう言つたのであらう。さうとは知らずに、お前を疑つたのは私が悪かつた。」と言つて謝罪りました。襖の外できいて居た繼母も、はじめて自分の悪かつたことを悟り、室の中へ飛び込んで来て少女にあやまり、それから一家むつまじく暮しました。

二五 正直 正吉

ある村に二人の兄弟が住んで居た。兄を太吉と云ひ、弟を正吉と云つた。兄の太吉夫婦は、非常に貪慾で、父の遺言があつたにも拘はらず、弟の正吉には一文も分けてやらなかつたが、兄とはちがつて、おとなしい正直者の正吉夫婦は、少しも不平を云はず、毎日せい出して働らいた。正吉は、よその仕事を手傳ふときにも、うちの仕事と同じやうに、陰日向なく働らいたので、村の人々から正直正吉と云つてかはいがられて居た。

十二月の末の寒い寒のふる日であつた。野良から歸つて来た正吉夫婦は、圍爐裡に焚火をして暖まりながら、お雑炊を食べて居ると、コツコツと戸を叩く音がした。風の音ではないかと耳を傾けると、

「モシモシ」

と弱々しい人の聲がする。正吉の妻のお才は、食べかけの茶碗と箸を置いて、戸を明けると、そこには、汚い乞食のお爺さんが杖にすがりながら立つて居た。いやな臭ひがブンと鼻を突いた。其のお爺さんは、聲もたえだえに、

「私は旅の者ですが、足を痛めて歩くことが出来ません。庭の隅でも、何處でもよいから、どうか今晚だけ泊めて下さい。太吉さんのお宅でお願いしましたが、断はられました。もう行く所ありませんから、どうぞお願い申します。後生でございます。」

と云ふ。お人よしの正吉夫婦は、

「それはさぞお困りのことでございます。汚い家ですが遠慮なくお上り下さい。」と云つた。お才は、

「お爺さん、あなたはご飯を食べないでせう。炊きたてのお雑炊がありますから、お食べなさい。」

と云ふと、お爺さんは、さも嬉しうに、

「ありがたうございます。實は二日も食べずに居ります。」

と云ふのをきいて、正吉は、

「それは、さぞ餓しいでせう。ちやみんなこれをお食べなさい。」

と云つて、二人の食べる雑炊をみな與へてしまつた。お腹が一ぱいになると、お爺さんは圍爐の側で居眠りを始めた。お才はそれを見て、

「お爺さん。疲れて居るでせうから、もうおやすみなさい。けれど、私の家には、布圍が一枚しかないのです……」

と云ふと、正吉は、

「なに私たちは若い者だから一晩位は藁の上でもよい。お爺さんは、足も痛めて居るから、布圍を借してあげるがよい。」

と云つた。お爺さんはそれをきくと、

「勿體ない。私は板の間でもどこでもよろしうございます。それとも破れた葛籠でもお借し下されば、そんなありがたいことはありません。」

と云つて、いくらすすめても断はるので、正吉夫婦はあり合せの破れた葛籠を貸し與へた。お爺さんは、喜んで其の中へはいつて寝た。翌朝、お才は早く起きてご飯を炊いた。仕度が出来たの

で、夫婦の者は、部屋へやの片隅かたすみの葛籠かたごの中に寝かして置いたお爺さんに聲をかけたが返事がない。どうしたのであらうと、其中をのぞいて見ると驚いた。昨夜寝かしたお爺さんは、藻も拔ぬけの殻からとなつてしまつて、かげも形も見えない。中には、澤山たくさんの小判こはんがまばゆいやうに光つて居た。正吉夫婦は夢ではないかと思つた。

その小判は、どれ位あるだらうと、柵まきを出して計つて見たが、正午おひるになつても中々はかり切れない程あつた。

二六 歸つてくれたか

ある富豪ふうこうに二人の息子むすこがあつた。二番目の息子の二郎は、まだ年もいかないのに、不心得な考へを出し、財産を分けて貰つて、どこかへ行つて勝手に面白く暮したいと思ひ、

「お父さま、これから僕は都みやこに出て立派りっぱな人になりたいと思ひますから、資本もとでにお金をわけて下さい。」

と云つた。父は言葉をつくして止めたが、何と云つてもきゝ入れないから、仕方なく、いくら

かのお金をわけてやると、二郎は直にそれを持つて家を飛び出した。

都についてから、毎日珍しいものや面白いものを見物して居るうちに、悪人に欺あざむかれて、二郎は父に貰つたお金をすつかり取られてしまつた。氣のついた時にはもう遅おそかつた。

一文なしになつた二郎は、食ふことも泊とまることも出来ないで、あちらこちらと、仕事を求めて歩いた末に、漸く或る家に雇やとはれて、穢きたない豚小屋ぶなこやの番人になつた。今まで贅澤ぜいたくに暮して居た二郎には、とても辛抱しんぱうが出来ないので、やがて其の家も飛び出し、乞食こじきになつて故郷へ歸つて來た。日にやけて色は赤黒くなり、髪は蓬そうぼう々として雀の巢の如く、自分ながら淺間せんましい姿に變はりはてた。彼は、やがて自分の家の前まで來たが、みすばらしい自分の姿すがたを恥はぢて中へはいりかね、しばらく門前で躊躇ちゆうちよして居た。

丁度、其の時に窓から外を見て居た父は、此の汚ない乞食の姿を見ると、何と思つたか、直に外に走り出て、

「おい。お前は、二郎じゃないか。」

とたづねた。二郎は大地の上に兩手をついて、

「お父さま、まことに申譯もうしわけもございません。此のやうな態さまになりましたのも、不孝ひくじの報ひくいでござ

います。どうぞお許し下さい。さうして、雇人と一しよでもようございますから、お情けを
もつてお宅に置いて下さい。」

と涙をこぼして願ひ入つた。父は一言も咎めず、

「お、よいとも、よいとも、許してやるから、こちらへお出で。」

と家の中に入れ、湯浴させ、美しい着物を與へ、

「あ、これでやつと安心した。死んだかと思つた息子が歸つてくれて、こんな嬉しいことはな
い。」

と心の底からうれしがつた。

二郎ははじめて親の慈愛をしみじみと感じた。

二七 たゞ一つの願ひ

千年も昔の話である。其の頃は、女でも男でも、六十歳になれば、山の中へ捨てることにな
つて居た。

時の天子さまのお側に仕へて居たけらいの中に、まことに親孝行な男があつた。たつた一人
の父に孝養をつくして、何の不自由もなく暮して居つたが、月日に關守なく、もう來年は、お
父様が六十歳といふことになつた。

其のことを思ふと心配で夜もろくろく眠られない。顔の色は青ざめて、日に日に元氣がなく
なつた。それを見た父は、ある日息子に向つて、

「お前は此の頃大さう顔色が悪いが、どうしたのか？」

とたづねたが、息子は

「時候の加減か少し氣分が悪うございまして……」

と笑ひにまぎらして居たが、父は、

「さうではあるまい。私の身の上を思つて餘計な心配をして居るであらう。」

と云ひ、更に、

「それはありがたいが、國の法律はまげられぬ。私は覺悟して居るから、お前もあきらめて呉れ。
あまり心配して、お前のからだでも悪くしては大變だから……」

と云つた。息子は初めて、

「お父様のお言葉ですが、どうして私にそれがあきらめられませう。いくら國の法律だからと云つて、みすみす親を山へ捨てるかと思ふと、悲しくてなりません。」と涙をこぼした。

その年もくれた。いよいよ老人を山の中へ捨てる日が近づいた。息子は父の部屋に来て、

「お父様、いよいよあなたを山へお連れ申す日が来ましたが、子としてどうしてもそれは出来かねます。法律に背いては天子さまに申しわけがございませんが、世間へは急病で失くなつたやうにして、一時お父様をお隠し申さうと思ひます。」

と云ふと、父は、

「よく云つて呉れた。わしにも考へることがあるから、お前の云ふ通りになりませう。」

と答へた。そこで息子はかねてこしらへて置いた土藏の椽の下かくはの隠家へ父を入れ、翌日から人に知れないやうに御飯ごはんを運んでは、尙ほ前の通りに孝養をつくして居た。

半年ばかり後のことであつた。外の國の王さまからの使が、此の國へ来た。其の使は此の國をあなどり、難題なんだを持ちかけて困らせてやらうと思ひ、いろいろの寶物を献上けんじやうし、王様からの傳言こゝろづけを申し上げた後、錦にしきの袋ふくろの中から、丸く削つた一本の檜かしのの棒を出し、

「謹んで此の國の天子さまに申し上げます。此の檜の棒は、どちらが末でどちらが根でございませうか。お教へ下さらば、ありがたい仕合せに存じます。」

と云つた。天子さまは、其の無禮な言葉ごこはを不快ふかいに思召おぼしめしたが、さあらの體ていで、並んで居るけらいの者に、此の間に答へよと申された。

けれども誰一人それに答へる者はなかつた。

孝行な息子は、それをきいて、大急ぎで家にかへり、そのことを父に話した、父は優やされた學者であつたから、

「それは譯わけもないことだ。水に浮べて見て底そこに傾かたむく方が根だ。」

と教へて呉れたので、息子は大喜びで引き返し、その旨を申上げると、果して其の通りであつたので、彼の國の使者は私ひそかに驚いた。

翌日になると、使者は、また同じやうな蛇へびを二匹持つて来て、どちらが雄おすであり、どちらが雌めすであるかと云ふむづかしい質問しつもんを出した。息子は又直に歸つて父に話すと、

「それは譯もないことだ。梅のすいきを押おしつけて見て、それにからみつく方が雌である。」と教へて呉れたので、其の通りにすると、それに違ちがひなかつたので、使者は益々驚いた。

翌日になると、螺旋型に穴の明いて居る水晶のまるい玉を持つて来て、絲を通して呉れと云つた。

息子はまた其の事を父に話すと、

「それは譯もないことだ。玉の穴の口に砂糖を塗つて置いて、他の一方の穴の口から絲を結んだ蟻を這はせてやれば自然に絲が通る。」

と教へてくれたので、其の通りにすると、果して見事に糸が通つたから、此の國にもかうした知者があるかと、彼の國の使者は驚いて歸つた。

天子さまは、大さうお喜びになつて、

「此の度汝がなかつたならば、此の國は大變な恥をかく所であつた。」

とおほめになり、どんな褒美でも望み次第に取らせるとのことであつた。息子はありがた涙にむせびながら、

「斯程までの思召し、何ともお禮の申しやうも御座いません。私は何の望みもありませんが、たゞ一つのお願ひがあります。」

と此の度の答は、自分の知恵から出たのではなく、みな父に教へられたことを申し上げて、父の

命乞をした。

天子様は、其の孝行を一方ならず御感心あそばされ、息子の願ひをお許しになつたばかりでなく、老人を山へすてるといふ無慈悲な法律を、其の日からお廢止なされたとのことである。

二八夜の雪

むかし江戸淺草のあたりに、西島と云ふ俳諧師があつた。或る冬の夜であつた。朝から降り積つた雪を眺めながら、

「夜の雪景色はまた格別である。此のやうな夜、外へ出て見たらば、定めてよい趣向も浮ぶであらう。」

と考へ、一人の丁稚をつれて出ようとした。

これをきいて、其の妻が

「主人のやうに風流の嗜みあるものならば、いくら寒くても別に苦にもなるまいが、何の興味もない丁稚はまことにあはれである。」

と云つて、即座に

「我が子なら供にはやらじ夜の雪。」
と口ずさんだ。

俳諧師は深く感じて、外出することをやめ、丁稚を休ませた。

二九 守 錢 奴

ある所に、一人の守錢奴があつた。持つて居る品物をみな賣つてしまつてお金にし、その上、貯へて居たお金をも残らず鎔して黄金の塊とし、人に知れぬやうに庭の隅に埋め、毎日それを一人で眺めて、我を忘れて楽しんで居た。

一人の召使がこれに氣づいて、

「主人は毎日庭へ何しに出られるだらう。一つ様子を見てやりませう。」
と、ある日そつと見張つて居た。

さうとは知らぬ主人は、またいつものやうに金の塊を掘り出して見て、にやにやと笑つて

居た。すつかり秘密を發見してしまつた召使は、ある夜こつそりとその黄金の塊を盗み出し、何喰はぬ顔をして居つた。

そんなことには氣づかず、翌日もまた主人は例の庭へ来て見ると、命よりも大切な黄金の塊が紛失して居るので、

「さあ大變だ！」

と大聲をあげて、泣くやら、叫ぶやら。

隣の人たちは、何事かと思つて集つて來た。守錢奴から寶物のなくなつた次第をきいて、一同は同情すると思ひの外、

「何のことだ。土の中へ埋めて一人で見居るなら、黄金も瓦も同じことではないか。お前さんそんなに口惜しがるにも及ぶまい。今日から煉瓦の塊でも入れて眺めておいでなさい。」
と云つて笑つた。

三〇 肥 大 將 軍

獨逸の大軍が激しく白耳義に押しよせて来た時、ベルビースと云ふところに、グロセチー將軍と云ふ其の名の如く、肥大な體格をしたフランスの勇將が守つて居た。

ドイツ軍の攻撃は殆ど、極度に達し、ベルビースの防備も今や將に敗れようとして、將軍の陣は雲の如き砲煙に包まれた。將軍の幕僚は退却の用意をした。けれども將軍は落付いて、

「おい、君たちはもう退却するつもりか。では我輩をどうするのじや、我輩はこんな太つて居るから、君たちと一しよに歩けないよ。かうして立つて居るのも苦しくてならん、誰か腰掛を持つて来てくれ、腰掛を……………」

三二一人の店員

ある呉服屋に、十七八歳になる二人の店員が居た。一日、立派な紳士がその店へ来て、數種の反物を買つて歸つた。紳士が歸ると、直に一人の店員が、

「しまつた！」

と叫んだので、他の店員は怪しんで、

「どうしたのだ。品物でも違へて賣つたのか？」

ときいた。

「ウム、まだ遠くは行かれまい。一寸僕はあとを追つかけて取りかへして来るから頼むよ。」と言ひながら、一目散に外へかけ出して行つた。

暫くすると、其の店員は歸つて来て、紳士から取り返して来た反物をそこへひろげた。反物の中には二寸ほど破れたところがあつた。

「そんな疵物は、到底店へ置いても賣れはしない。客が知らずに買ったのは、思ひもよらぬ儲けものだ。なせ君は捨て、置かない？」

と他の店員も側から口を出した。すると、彼は、

「いゝえ、私はさう思ひませぬ。悪い品物を賣つては、お得意さまに相すまぬことだと思ひます。知らずに買つて行つて、宅へ歸つてからそれを見出されたらば、何と思はれるでせう。まだせめても早く氣づいただけが幸でした。やつと店の信用を傷つけずにすんだことが何よりもうれしかつたのです。」

と云ふと、他の一人は嘲けるやうに、

「通り一ぺんのお客さままだ。どうなつたつてかまうものか。君のやうに馬鹿正直では、とても商賣などは出来ないよ。」

と言つて笑つた。

こんなことがあつてから二十年ほど過ぎた。今日では二人の境遇は著しく變つた。反物を返した店員は、一かどの商人となり、その家は日毎に繁昌して行くが、他の一人の店員は、事毎に失敗し、つい五六年に行衛を晦ましてしまつた。今はどこにどうして居るか、知つて居る者もあまりない。

三三 雪の夜道

ある寒い國の山里に、貧乏な農夫の家がありました。その家には、秋子といふ十一になる少女がありました。心がけのよい孝行な女でありました。

冬の寒い日でありました。雪は深く積つて居りました。その日、お母さんは、町へ草履を賣りに出かけたが、夕方になつても歸つて來ません。お父さんは心配して、

「もう日がくれるのに、まだ歸つて來ないのは、どうしたのだらう。行つて見て來ようか。」
と言はれます。小さい弟や妹と遊んで居た秋子は、これをきいて、

「お父さん、私が行つて参りませう。お父さんがおでかけになると、弟や妹が泣きますから。」
と申しました。お父さんは、

「お前のやうな子どもが一人で、どうして此の雪の中が行かれるものか。」
と言はれます。秋子は、

「いゝえ、大丈夫です。私ももう十一になります。行けないことはありません。」
と言つて聞き入れませんから、お父さんもしかたなく許すことにしました。

秋子が出かけて行つてから、しばらくたつと、お母さんは、一人で歸つて來ましたから、お父さんは、不思議に思つて、

「お前は秋子に遣はなかつたか。お前の歸りが遅いから、心配して迎へに行つたが……」
ときかれますと、お母さんは、

「いゝえ、遣ひませんよ。」

と言つて、心配さうな顔をしました。

日が暮れても秋子が歸つて来ませんから、近所の人々を頼んで、お父さんは、娘の行衛を探しましたが、少しも知れませんが、たづねあぐんだ末に、小さい足跡が橋の上のところになくなつて居るのを見出し、川の中を探すと、あはれにも娘は雪に埋れて凍え死んで居ました。足を踏み外して川の中に落ち込んだらしいのであります。

お父さんもお母さんも其の死骸を抱いて悲しみました。

日ごろ心がけのよい少女のあはれな最後をきいて、涙を流さぬ者は一人もありませんでした。雪がとけて春となり、夏になり、また雪の降る冬となりまして、いく年かの月日はたちました、村の人々は、其の橋を通る度毎に、秋子のことを思ひ出しては悲しみました。

三三 轉ばぬ先の杖

一、軍馬の嘆息

ある軍人が一びきの馬を飼つて居た。戦争の最中には、此の馬に十分の食物を與へ、手あつ

くいたはつて居たので、馬も元氣よく主人の命令に従つて働らいた。

然るに、其の後戦争がすむと、軍人は、今までと打つて變つて、馬を虐待し、食物も碌々與へず、毎日酷使したので、馬はだんだんと衰弱し、昔の面影はすっかりなくなつた。

すると、又もや戦争が始まつたので、軍人は此の馬に鞍を置き、その上に跨つて出陣しようとした。

以前とは異なり、力の抜けてしまつた馬は、背中の重みに堪へかねて、まだ一足も歩かぬ中にばつたりと倒れて了ひました。

さうして、恨しさうに主人を見上げ、

「旦那さま、わたくしは、長い間粗末な食物をいたゞき、ひどい仕事をさせられましたので、もうとてもお役にたゝない驚馬となつてしまひました。急にもとの馬にかへれと仰つてもそれは駄目でございます。どうか此の度の戦争にはお一人で歩いてお出かけ下さい。」と言つた。

二、野猪と狐

一びきの野猪が森の中へはいつて、大木の根もとでせつせと牙を磨いて居ると、狐がそこを通りかゝつて、「まあ、あなたはとうしたと云ふんです。今日は獵夫も見えませんが、さし當つてこれと云ふ危険なこともないのに、何の必要があつて牙などをみがいて居るのです。」

と云ふと、野猪は、

「わしは此の牙を命の危い時に使はなければならぬから、常に磨いて置かねばならぬのだ。いよいよ命の危いやうなことが起つてからは、磨いて居る隙がないからね。」

と言つて笑つた。



三四 小話二篇

一、海を呑み干す方法

埃及王アマアシスは、當時に於て最も學識ある學者の一人であつたが、ある時、隣國のエチオピア王から、一つの難題を申し込まれた。それは、埃及王が海を呑み干せば、多くの領土を與へるが、それが出来なければ、汝の領土を自分の方へ受取りたいと云ふのである。これには埃及王も困つたが、返答せぬのも忌々しいと思つて、希臘の賢人ピアスの許に使者を遣はした。ピアスは使者の口上をきいて、

「そんなことは何でもない。エトオピア王に斯う言へばよい。

今、海を呑み干しますから、それまで世界中の河を堰き止めて居て下さい。打角呑み干さうと思つても、河の水がはいつては仕様がありません。」
と笑つて答へた。

埃及の使者は大に喜んで、王にそれを復命した。

二、ヘツケルの筆蹟

米國の鋼鐵王カーネギーの友人が、獨逸のエナ大學に留學することになったので、其の暇乞に來ると、カーネギーは、

「エナ大學に行つたら、どうか一つヘツケル博士の筆蹟を貰つて送つて呉れるやうに……」と頼んだ。やがて其の筆蹟が届いた。見ると、

一、ツンプト式顯微鏡 一個

右はエナ大學植物學研究室へ御寄贈相成り謹んで感謝の意を表し候也

エルンスト・ヘツケル

アンドリウ・カーネギー様

とあつた。カーネギーは「一杯喰はされたな」と思つて苦笑したが、直に其の顯微鏡を購入するだけの金子をエナ大學に贈つた。

三五 あはれにも勇しき物語

その一

パリーの町のまん中で、ある日多くの職工が新築工事のために働らいて居たが、どうしたはずみにか、高い足場がぐづれた。一ばん上に居た二人の職工は、危く墜落する所を辛うじてそこに突き出て居る横木の端につかまつた。しかし、其の横木は到底二人の重量を支へることが出来なかつた。ぐらぐらとして今にもくづれ落ちさうになつた。それを氣づいた一人の若い男は、他の男を顧みて、

「君よ。僕はこれでお別れをいたします。君はたつしやで居てくれたまへ。君には妻もあり子もある。僕はたゞ一人ぼちだから、死んでもあとになげきをかける者はない。左様なら……」と云ふか言はないのに、其の手を離したので、無慘にも彼は大地の上へまつ逆さまに落ち、身體は微塵になつて碎けたが、それが爲めに他の男はあぶない命をとりとめた。

その二

ドイツの軍人がフランスのある村へ侵入して来た時に隊長は村の者どもを集め、
「決して手向ひをしてはならぬ。若しピストルなどを放した者があつたら、其の分にはすて置
かぬぞ。」

と嚴重に申し渡した。然るに、其の翌日の正午頃けたましい一發の銃聲がひびいた。ドイツ
の士官はおこるまいことか。直に村の者から十二人の人質をとり、犯人を探し出せばよし、か
くし立てをするならば、十二人の者をみな銃殺の刑に處すると言ひ出した。

犯人は出なかつた。十二人の命は、まさに風前のともし火となつた。其の時にあはたしく驅
け込んで、

「ピストルを放つたのは私でございます。どうか私を刑に處して、みなのを助けて下さい。」
と申し出でた男があつた。それは村の學校の先生であつた。

「にくい奴だ。それッ……」
と云ふ合圖と共に、むごたらしい彈丸に胸を貫かれて、彼はその場に倒れた。

その三

村の人々は涙に咽んだ。此の先生は銃聲のひびいたその時刻に、學校で多くの子どもと一し
に、遊んで居られたことを知つて居たから……

七年戦争の時、同じ聯隊につとめて居た兄弟の兵士が、二人とも同時に負傷して、ベッドの
上に横はつた。兄は彈丸の爲めに腹部をえぐられ、命も危いほどの重傷であつた。軍醫が側に
近づくと、彼は苦しい息の下から、

「私よりもあちらに居る弟の方を先にして下さい。」
と云ふ。軍醫はしづかに、

「弟さんの方は一寸腕をやられたとだけだ。君の方が重態だから、先に手當を加へなければなら
ぬ。」
と語ると、彼はそれを制してまた言つた。

「だから、弟の方を先にして下さい。あれはまだ國家のお役にたちます。私は幸になほつた所
で、もうとても一人並の身體にはなれぬ廢物です。」

三六 勳章か金か

歐洲の七年戦争に、頗る勇敢な働らきをした一人の中尉があつた。フリードリッヒ大王は、これを召して謁見を賜はり、大に其の殊勳を賞め、

「こゝに金と勳章とがある。どちらでも好む方を持つて行け。」

と仰せられた。中尉は暫く考へて居たが、やがて金を受取つたので、王はいさゝか不快に思はれ、

「お前は軍人でありながら、名譽よりも金がほしいのか。」と詰られた。中尉は直ちに、

「陛下、私には借金があります。それを返済しないのは、私にとつて最も不名譽であります。私は名譽を保つために此のお金を頂戴したいのです。」

と答へた。王は其の正直な中尉の言葉に満足して、笑ひながら云はれた。

「それは感心だ。それでは勳章もやるから持つて行け。」

三七 好きこそ物の上手なれ

文祿の頃天下に其の名をうたはれた彫刻の名人横谷宗珉の弟子に宗三郎といふ者がありました。八丁堀の大工宗兵衛の子で、十二の歳から宗珉の弟子となつたが、五年たつても六年たつても少しも上達しないから、多くの弟子はみな宗三郎を侮つて居ました。父の宗兵衛は宗三郎のことについて常に心配し、或る日宗珉の家を訪ねて、

「先生さま、忤が一方ならぬ御厄介になつて居りますが、どうでございませう。あれでもものになりませうか。」

と云ひました。宗珉は笑ひながら、

「いや、宗兵衛さん、さう心配しなされるな。私にも見る所がありますから、もうしばらく任せとおきなさい。」

「ありがたうございますが、どうせものにならぬのでしたらば、今の中に何とかした方があれの爲めにもなりますから……」

と話して居る所へ宗三郎が出て來ました。宗兵衛は、

「どうだ、宗三郎、お前は先生さまのおつしやることをきいて精出して居るか。」

「ハイ。」

「ちつとも腕が上らぬさうだが、それでも仕事がいやにはならぬか。」

「いゝえ、誠に面白うございます。」

宗三郎は、ほんたうに嬉しさうな顔をしました。彼が次の部屋へ去るのを待ちかねて宗兵衛は、

「宗兵衛さん、聞きましたか、宗三郎は仕事が面白いと云つて居ります。今にきつと立派なものになりませう。」

宗兵衛は此の言葉に少しは安心をしたらしく、尙ほくれぐれも宗三郎のことを頼んで歸りました。

宗三郎が二十歳の時に、宗兵衛は仕事の中に過つて怪我をしたのがもとで、とうとうなくなりしました。臨終の際にも宗三郎に向つて立派なものになつてくれと、繰り返し繰り返して、息を引きとりました。

一心不乱の力は恐ろしいもので、多くの弟子から輕蔑せられて居た宗三郎も、追々と技術が

上達しました。宗兵衛は此のありさまを見て、深く喜びましたが、まだ一度も宗三郎をほめたことはありませんでした。外の弟子には、一人前になればそれぞれ業の名を與へましたが、宗三郎には何とも云ひませんでした。しかし、宗三郎は、別に不平らしい顔もせず、毎日外の者と一しよに面白さうに働らいて居りました。

宗三郎が二十二歳の春のことでありました。ある日宗兵衛は宗三郎を呼び、

「今日はお前に一つ頼みたいことがある。小柄を一本彫つて貰ひたいのだ。」

と鬱金木綿の小さい風呂敷から出したのは、美しい黄金の小柄でありました。宗三郎は驚いて、「どうして、私に此のやうな立派なものが………」

と云ひますと、宗兵衛は、

「大丈夫だから、やつて見ろ。御大老さまからの頼まれものぢや。目出度く、松に日の出がよからう。それに鴉を一羽あしらつて。」

「畏りました。」

「しつかりやれ。失敗したら命はないと思へ。」

「ハイ」

宗三郎は身體を清めてから、仕事にかゝりました。我を忘れて其の美しい小柄の上にタガネをふるひました。長い時間を経過して、漸く其の小柄が出来上つた時、宗三郎はホッと一息ついて、熟く其の小柄を眺め、

「あつ！しまつた！」

と云つたまゝ、其の場に泣き倒れました。折角彫り上げた鴉の足が三本ありました。しばらくして、宗三郎は顔を上げ、御大老さまの大切な小柄に、此のやうなものを彫つて申わけがない。死ぬより外に思案はないと、色も青ざめて考へ込んで居ると、豊島屋善兵衛といふ質屋の隠居が其處へ這入つて來ました。

「宗三郎さん、何を考へて居なさるのだ。」

「御大老さまの大切な小柄を彫り損ねました。死んでお詫をします。八丁堀に残つて居る母のことが氣にかゝります。私のないあとはどうぞよろしく………」

豊島屋の隠居は、宗三郎の彫つた小柄をとり、じつと噴めて居りましたが、

「大したものだ。宗三郎以上だ。」

と驚いて云ひました。

「よくその鴉の足をごらん下さい。」

「三本足の鴉か。これは結構ぢや。このうたを其の裏へ彫つておきなさい。」

「ありがたや、君の恵に浮き出でし、播磨の國の赤色の鳥。」

宗三郎は、不思議に思つて其のわけをたづねました。

「大昔、白鳳十一年に播磨の國に赤い三本足の鴉が出て來た事がある。それを天子様に献上した。三本足の鴉はお目出度い。」

云はれたまゝに、其の歌を彫りつけて置くと、外から歸つて來た宗三郎がこれを手に取り上げて眺め、

「實に立派なものだ。お前もこれで一人前の男になつた。宗兵衛どのから頼まれて居た私もやつと安心した。」

と賞め、

「それにしても、お前が播磨の鴉の話を知つて居ようとは思はなかつた。」と感じました。宗三郎は豊島屋の隠居からきいた仔細を話しました。此の小柄をお屋敷へ納めると、御大老さまは殊の外のお喜びで、澤山の褒美を下し置かれました。

横谷宗珉のあとを繼いで、後に横谷珉貞と云つたのは此の宗三郎のことです。

三八 一度も戸締をしたことはない

英國のブレアノールと云ふ所の山の中に、一軒の貧しい家がありました。此の家の娘は、たゞ一人の母を残して、九年前に家出をしてしまひました。それからあちらこちらをさまよつて居る中に、だんだんと墮落の底に沈みましたが、ある日スコットランドに於て、ウエバーと云ふ説教者の話を聞き、今までの行を後悔して、母の許に歸つて來ました。

故郷に着いたのは夜中頃でありました。小さい時分に歩き馴れた眞暗な道を辿つて、次第に自分の家に近づいて來ました。途中で雨が降り出した爲めに、彼女はびしょ濡れになりました。やがて家に着き、靜かに戸を叩いて見ましたが、ひっそりとして何の應答もありません。再び戸を叩いて見ましたが、更に應答もありませんから、女はそつとそれを押しました。何のこともなく、戸は靜かにあきました。

家の中には燈火が微かにまたゝいて居ました。みすばらしい寢床の上に横はつて居た母は、

突然の物音に目をさまし、彼女の顔を一目見るや否や、

「お前は娘……歸つて呉れたか……」

と云ひながら、飛び上つて、彼の女を抱きしめました。母のやつれた姿を見るにつけても、女は己れの不孝の程が恐ろしくなり、泣いて詫入るより外にはすべもありませんでした。

母は娘を少しも咎めなかつたのみならず、濡れた着物を着換へさせ、温い食物をこしらへて食べさせ、

「もうこれからは、どこへも行かず、此の山の中の家に居てくれ。」

と恰も幼ない子どもにでも物云ふが如く、ほんたうに嬉しうにしました。其の時、娘はふと思ひ出したやうに、

「お母さん。此のさびしい山の中で、なせ今夜は戸じまりをして置かなかつたのです。」

「今夜ばかりではありません。お前が家出してから九年の間、一度も戸締りをしたことはありません。お前がいつ歸つて來ても差支のないやうに、燈火をつけて鍵をかけずに置きました。」

三九 大統領よりのおくり物

ある田舎の茶店に立派な二人の紳士が腰を下ろした。

「いらつしやいませ。」

「晝食をたべたいが何かありますか。」

「はい。」

茶店のおかみさんは直に支度にとりかゝつたが、十二ばかりの少年がつき纏つて、

「お母さん、ねッー」

と何かしきりにねだりはじめた。

「うるさいよ。」

「だつてねッ、お母さん……………」

「お客様があるから、静かにしないか。」

とすかして見たが、少年は少しも聞入れなかつた。

「いくらお前が欲しがつても、買つて上げるお金がないから駄目ですよ。それよりも近い中にあのえらいワシントン大統領が、町へおいでになるから伴れて行つてあげるよ。」

「お母さん、大統領なんか、僕見たくないんです、それよりも聖書がほしいんです。」

二人のお客さんは、面白がつて、此の母と子の會話をきいて居た。

さうして、食事をすませてから、少年の名前をきいて立ち去つた。

其の翌日、茶店の少年に宛て、立派な聖書が届いた。包紙には差出人の名は書いてなかつたから、誰が送つて呉れたのだらうと表紙をひらいて見ると、「チョージ・ワシントンより」と認めあつた。

これを見て、

「さては、昨日のお客様が大統領であつたか。」

と親子の者は驚ろいた。

四〇 そんなものなら家にもあつた

むかしある所に一人の男がありました。もとはたくさんのお金を持つて居りましたが、だんだんと貧乏になりまして、屋財家財も大方賣りつくし、今はたゞ広い家が一軒残つて居るに過ぎませんでした。

此の男がある時お嫁さんを迎へました。其のお嫁さんは、一枚の小判を持參金として持つて来て、それをお婿さんに渡しました。お婿さんは、うけ取つて袂の中へ納めました。

數日の後、お婿さんは、お嫁さんの里歸りを見送りました。途中に大きな池がありました。池の真中に鴨が一羽浮いて居ました。池の側を通りかゝると、お婿さんは、いきなり袂の中の小判を取つて、鴨を目がけて投げつけましたが、狙ひははずれて、鴨はぱつと飛び立ち、小判は水の中に落ちました。お婿さんは、

「しまつた！」
と叫びました。

「どうなさいました。」

とお嫁さんがたづねました。

「鴨が逃げた。」

「どうして？」

「小判を投げたら……」

小判を投げたときいて、お嫁さんはわつと泣き出しました。お婿さんは、不思議に思つて、其のわけをたづねました。

「あれがなければ、私どもは明日から暮すことが出来ませんし、又あれをなくしては、里のお父さんや、お母さんにも申しわけがありませんから、死ぬより外はありません。」

と言ひます。お婿さんは、これを聞いてふと思ひ出し、

「おい泣くな、あんなものなら、うちにいくらでもある。」

と言ひました。お嫁さんは呆れて、

「小判が、お家に……」
と問ふ。

「うん。たしかにあつたよ。」
とお婿さんは答へる。

二人は引つ返して、納戸の奥の古葛籠を明けて見ますと、其の中からは、目も眩むばかりの小判がざくざくと出て来ました。

四一 あはれな富豪

ある處に大へなお金もちがあつた。立派な家に住み、多くの召使をつかつて居た。お蔵の中には、金や銀や、其の他の寶物が山のやうに積んであつた。

主人は、中々商賣のうまい人で、金は毎日殖えて行くばかりであつた。其の上、今年はまだ運のよいことに、特別に豊作と来て、穀物も野菜も納屋にはいりきれぬほどあつた。番頭が、「旦那さま、隣村から来た年貢はどういたしませう、入れる所がありませんから、軒の下に積んで置きました、鼠や、鶏が来てしかたがありません。」と云ふと、主人は、

「それは困つたことだ。勿體ないから、早速大きな倉庫を建てよう。」
と言つて、番頭が下つたあとで、

「おれは何といふ幸福な人間であらう。これだけあれば、利子だけでも、二・三十年は困るやうなこともない。」

と獨語をいつて居ると、神さまが現はれて、

「おい、お前はお金の勘定は出来るだらうが、これからさき二十年三十年のことが、どうしてわかる。お前の命がいつまで續くと思ふか。たはけた奴だ。今はたつしやでも、今夜にも知れないが人間の命だ。死んでからお前は其のお金をどこへ持つて行くつもりだ。」

と叱られた。お金もちらびつくりして慄へ上つたが、それと同時に息が絶えてしまった。やがて番頭が来た時にはもう冷たいからだになつて居た。

四二 身から出た錆

むかしある所に三四郎といふ孝行息子がいました。お父さんが亡くなられてから、家がだ

んだん貧乏になりましたので、毎日薪を賣つてお母さんを養つて居りました。

ある朝、三四郎がお父さんのお墓へまゐらうと思つて、途中まで来ますと、五六人の子どもが、一羽の美しい小鳥を捕へて、羽根を抜かうとして居ます。三四郎は、かはいさうに思つて、「坊ちゃん、その鳥を呉れないかね、持つて居るだけのお金をみなあげるから。」

と言ひました。子ども等の中には、賣るよりも羽根をぬいて分けた方がよいと云ふ者もありましたが、いろいろさとしまして、其の鳥を買ひ受け、逃がしてやりますと、小鳥はうれしそうに飛んで行きました。

其の夕方でありました。一人の美しいお嬢さんが、三四郎の家の門口に立ちまして、

「どうか一夜の宿をおかし下さい。旅の者でございますが、日がくれて道もわからず、足も疲れて歩けないやうになりましたから……」

と申します。三四郎のお母さんは、

「それは、それは、お困りでございませう。御らんのとほりのむさいところですが、お差支へなくばお泊り下さい。」

と言ひました。

其の夜は明けましたが、翌日になつても、翌々日になつても、お嬢さんは三四郎の家に止まつて、親切に母の世話などをして居りました。

此のことがいつか村中に知れ渡つて、役人の耳にも入りました。意地の悪い役人は、三四郎を呼び出しまして、

「お前のお父さんは、生きて居る頃此の役所の米を千俵あづかつて居た筈だから、明日までにらせ。出せなければ、お前の家に居るお嬢さんはこちらへとりあげる。」

と無理難題を申し出しました。三四郎はびつくりして、家に歸り、此のことを母に話しますと、それを側で聞いて居たお嬢さんが、

「ご心配には及びませぬ。此の袋をもつて行つてお振りなさい。千俵の米は直に出ます。」

と言つて、一つの袋を呉れました。三四郎は翌日役所に行つて、役人の前で其の袋を振りますと、忽ち千俵の米はそれへあらはれました。

物の見事に失敗した役人は、其の翌日又々三四郎を呼び出して、こん度は、

「焼繩千束をもつて来い。出来なければお嬢さんを取り上げる。」

と申しました。三四郎は心配しながら、家に歸つてその話をしますと、お嬢さんは、

「それはお易いことです、此の袋をもつて行つておふりなさい。さうすれば、千束の繩が出来ますから、それに火をおつけなさい。立派な焼繩が出来ます。」

と言ひました。三四郎は翌日役所に出て、その通りにして、難なく千束の焼繩を納めました。

どうかして三四郎を苦しめ、お嬢さんを取り上げようとたくらんだ役人は、又々三四郎を呼び出し、今度は、

「地獄極樂を持つて来い。」

と言ひ出しました。歸つて其の話をしますと、お嬢さんは、

「お易いことです、しばらくお待ち下さい。」

と言つて、出て行きましたが、翌日二つの黒い箱を負うて歸つて来ました。

「これが極樂、これが地獄です。極樂の方から明けて見せておやりなさい。」

と言ひました。三四郎は翌日役所に參つて、言はれた通り先づ極樂の箱を明けて見せてやりますと、役人どもは其の美しいのに感心してしまひました。そして次に、

「地獄が見たい。」

と言ひますので、地獄の蓋をあけるが早いか、役人どもは、残らず其の中へ落ち込みました。

三四郎は、急いで歸つて、其の話をしますと、お嬢さんは、

「それは其の筈です。罪もない人を苦しめたりなどするものは、地獄に落ちるがあたりまへです。」

と言ひ、言葉を改めて、

「突然上りまして、長々御厄介をかけたましたが、只今から私はお暇をいただきます。その代り

此の袋を上げますから、何でも欲しいものがございましたら、これをおふり下さい。」

と前の袋を渡しました。

三四郎もお母さんも、何となく名残惜しく思ひまして、

「どうか今までのやうに、一緒にいらしていただきたい。」

と願ひますと、お嬢さんは、

「私も末長くお世話になりたいのですけれども、畜生の身でありますから、あなたさま方と共にくらすことは出来ません。」

と言ひながら、鳥の姿になつて、雲井遙かに飛んで行きました。

四三 慾張男と嫉妬深い男

慾張男よくはりおとこと嫉妬しつと深い男とが、ある日、偶然ごうぜんにも一しよになつて、神さまの前に出て、

「どうか神様、是非私どもの願ひをおかなへ下さい。」

と頼んだ。神さまは困つた奴等やつらだと思はれたが、さあらぬ體で、

「よし、よし、お前たちの心願しんがんは何でも叶へてやる。その代り二人のうち、一人に當つた運の二倍だけを、外の一人が貰ふことになるぞ。」

と仰しやつたので、これをきいて、慾張男は、心の中で、

「待てよ。これは自分から先に口を出しては損だぞ。自分が先に口を出すと、自分よりも倍の運を、相手の男にとられてしまふ。何でも相手の男に言はしておいて、自分はその倍の運をせしめた方が得だ。」

と考へて、わざと黙つて差控さしひかへて居ると、嫉妬しつと深い男は、直に慾張男よくはりおとこの心を読み、いつもの嫉妬心をむらむらと起し、

「自分が言ひ出して、みすみす倍の運をとられてはいまいません。よし、それではおれにも考へがあるぞ。」

と、大神に向つて、

「神さま、願ひでございますから、どうか此のわたくしを片目かためにして下さい。」

と云ふと、その男は直に生れもつかぬ偏盲かためとなり、相手の慾張男は全く盲となつてしまった。

四四 有馬の薬師

行基菩薩ぎょうきぼさつが多くの病人を助けるために、有馬の温泉へ向ふ途中、武庫山むこざんを通ると、一人の病人が叢くさむらの中に臥ふして、苦しうに呻うめいて居た。行基はそれを見てあはれに思ひ、其の側に寄つて、

「お前はなせ此のやうな山の中に寝て居るのだ。」

とたづねると、病人は、

「私は有馬の温泉へ參るつもりで、此所こまで來ましたが、身體がつかれて、もう一足も歩けず、おまけに食べるものもなく、此の上は死をまつばかりです。どうかお助け下さい。」

と云ふ。行基は不憫に思つて、親切に介抱してやり、自分の持つて居る食物を分けてやると、病人は、

「私は新しい魚でなければ喉へ通りませんから、魚を買つて来て食はせて下さい。」

と我儘を云ひ出した。行基は早速長洲の濱まで出かけ、新しい魚を買つて来て、それを煮て食はせた。

それから暫くたつと、病人はまた、

「上人さま、私の病氣はとても温泉ではなほりますまい。痛んでしかたがありません。あなたの口で皮膚の痛む所をなめて下さい。いくらか痛みがなほりませう。」

と云ひながら、着物を脱いで、ブンと悪臭を放つ爛れた身體をそこへまくつて出した。

行基は少しも厭はず、そのたゞれた皮膚をなめて居ると、今までの乞食は、いつの間にか薬師如來の姿とかはり、

「予は、此の温泉の行者であるが、お前の慈悲心を試さうと思つて、假に姿を變へて居つたのだ。」

と云つて、忽ち消え失せてしまつた。

四五 不幸な囚人の話

ロシアでは、重罪人をシベリヤへ送ることになつて居りました。ある年にシベリヤへ送られた重罪人の中に、イバンといふ男がありました。イバンは決して悪い人ではありません、一寸したまぢがひから、無實の罪に陥つたのです。

ある夏のことでありました。イバンは、商用のために都へのぼる道すがら、ラザレといふ男と道づれになり、同じ宿に泊り、隣の部屋で床に就きました。

ところが其の夜の中にラザレは何者にか殺されました。さうして、イバンの荷物の中に血のついた短刀がはいつて居りましたので、直にイバンは警察へつれて行かれました。少しもおぼえのないことではありますが、證據の一品が荷物の中から出たために、云ひわけをすることが出来ず、裁判の結果、重罪犯人として、さびしいシベリヤへ送られたのであります。

イバンは、なつかしい妻や子に別れて、シベリヤへ着きました。はじめの中には、時々思ひ出して涙にくれましたが、しまひには、自分の不運とあきらめ、典獄や看守の命をよく守り、仕事の際には、聖人のことを書いた本などを讀んで、心をなぐさめて居ました。典獄や看守もみなイバンを可愛がり、外の囚人も尊敬しました。

其の中に、二十六年の月日が夢のやうにくれました。腰はかゞみ髪は雪のやうに白くなり、昔のイバンとは思はれぬほどに變はりました。此の長い月日の間、イバンの家からは、少しもたよりがなかつたので、妻子の生死さへも知ることが出来ませんでした。

ところが、ある日のこと、此の獄屋へまた數人の囚人が送られて來ました。其の中の一人にセンといふ男がありました。センはイバンと同じブラヂミヤの者でありました。イバンはセンに向つて、

「お前さんは、ブラヂミヤの人なら、あそこにイバンといふ者があつたが、ご存じでせう。」
ときいて見ました。センはまさか此のお爺さんが昔のイバンであらうとは思ひませんから、知つて居ますとも、あの人は無實の罪で、此のシベリヤへ流されたが、今頃はどうして居ますかな。

と言ひながら、イバンの家族は、今でもまだブラヂミヤで商賣をして居ることを話しました。イバンは、思ひがけない話をきいて、二十六年前に商用で出かけた時の妻や子どもの姿を思ひ浮べ、ひとり涙に咽びました。

しばらく一緒に居る中に、センも漸く彼が同じ村のイバンの成れのはてであることを悟りました。ある夜、センは自分の部屋から抜けて、イバンの許に來り、

「おれは柵の下に穴を掘つて此處を逃げ出さうかと思つて居る。お前も一緒に逃げないか。」

と言ふ。イバンは、

「私はそのやうな悪いことはしませぬ。神々も私のこゝろを照覽あれ。」
と申しました。

「それではすゝめない。しかし今のことを人に話したらそのままにして置かんとぞ。」
と嚇しつけて、センは自分の部屋へ歸つて行きました。

悪い事は出来ないものであります。センがまだ逃出さない前に、看守は柵の下の穴を見つけました。當時、シベリヤの監獄では、脱獄者に對して嚴重な制裁を加へることになつて居まし

たから、獄長は誰が穴を掘つたかを一々厳しくしらべましたがわかりません。獄長はふと考へ直し、これは正直なイバンにきけばわかると思つて、イバンをよび出し、

「イバン、これは誰の仕業か、ほんたうのことを云つてくれ。」

と云ひました。傍で此の様子を見て居たセンは、氣が氣でありません。自分の秘密を知つて居るのはイバンだけだ。イバンの答へ一つによつて自分の運命が定まる。イバンが何と答へるかときいて居りますと、イバンは、

「獄長さま、私はそれを申し上げることが出来ません。どうか私を罰して下さい。」

と申しました。それをきいたセンはほつと安堵の胸を撫でおろすと共に、はじめてイバンの清き心に深く感じ、今まで眠つて居た良心をよび起しました。センは、イバンの前に膝まづいて、

「イバンさん、どうぞ許して下さい。私は何といふ大悪人でせう。あなたの一生涯を苦しめたのは私です。二十六年前に商人を殺して、短刀をあなたの袋の中に入れ、あなたを無實の罪に落したのは私です。私がかことの罪人です。あなたは無罪放免になつて國へ歸つて下さい。」と心の底から悔悟のさまを見せました。センの自白をきいて、獄長も看守も、あまりのことにあきれてしまひました。

「センさん、よく悔悟してくれました。それで神さまもお前を許して下さいませう。」とイバンは喜びましたが、

「私はもう二十六年もここに居る。家へ歸つたところで、妻も子供も私を知つては居るまい。私はどこへも行く所はない。」

と打ち沈んで、はらはらと涙を流しました。それから數日の後、イバンは無罪放免になりましたが、その知らせの來た時には、かなしいかな、彼はもう此の世の人ではありませんでした。

四六 義心に富める醫師

明和安永の頃、攝津の國の片田舎に、名を義齋と云ふ老醫が住んで居た。天性義心に富み、常に貧しい者を訪ねて病人を治療してやるのみならず、食物などを惜げもなく與へたので、近郷の者は、深くその徳に感じて居た。領主は彼の人となりを愛し、俸祿を與へて、侍醫に抱へようとしたが、義齋は、

「醫は仁術である。それを以て己れの安佚を欲するは道でない。俸祿に束縛せられて、貧者に

接することが出来なかつたらば、醫術を學んだ甲斐がない。」

と言つて、それを辭し、相變はらず貧民に接するを唯一の樂しみとして居た。

義齋は所持品を悉く困窮する者に分け與へてしまつたので、家はいつの間にか赤貧となり、多くの負債を生ずるに至つたが、彼は更に意に介する所もなかつた。

ある時、其の近在の六右衛門と云ふ豪農の主人が大病に犯された。さまざまに手を盡して見たが、少しも效驗がない。四五人の名醫にも見離されてから、到頭義齋の許へ頼みに來た。義齋は六右衛門の病床に行き、細かに診察した後、

「此の病はむつかしい。恐らく駄目であらう。けれども、まだ全く絶望するにも及ばない。」と言つた。六右衛門は苦しい息の下から、

「どうか癒して下さい。本復すればお禮はいくらでも差上げます。」

と約束した。それから二十日ばかりたつと、それほどの重病もすつかり全快してしまつた。

六右衛門は、大に喜んで、下僕の者に金一兩を持たせて、義齋の許へお禮にやつた。義齋はこれを見て叱りつけ、

「金一兩で命が買はれると思ふか、左様に安い命があるなら、少し買つて置きたいから持つて

來い。」

と言つた。六右衛門はこれをきいて、

「なるほどもつともな話だ。」

と思ひ、自ら義齋の許へやつて來て、

「此の度、先生のお蔭で一命が助かりました。此のご恩報じには、どのやうなことでもいたしません。如何いたしてよろしうございませうか。仰つて下さい。」

と云つた。義齋は、

「それではお言葉に従つて、願ひ申す。わが家の負債を残らず拂つて貰ひたい。」

と答へた。六右衛門は心の中で、義齋は仁者と聞えて居るのに、ひどい醫者だと思つたが、命の恩人ではあり、且つ約束したことでもあるから、あちらこちらの米屋や八百屋などの負債を残らず拂つた。其の金額は五六十兩にも及んだ。義齋をたづねて、此の由を告げると、

「お身はまことによいことをなされた。お拂ひ下された借金はみな貧しい者に施した爲めに生じたものでござる。さればお身は數十人の貧者をお助けなされたも同然ぢや。餘徳はやがて報い來るであらう。」

と云つて、義齋は大に喜んだ。六右衛門もはじめ、此の老醫の高潔な精神に感じたと云ふことである。

四七 盡せぬ縁

筑紫の太守加藤左衛門重氏は、つくづくと世の中の無常を感じ、住み馴れた我が家をあとに、諸國修行に出てしまつた。あとに残つた妻や子は、あけくれ父の身の上を案じわすらひ、年久しく待つて居たが、更に一片のおとづれもなかつた。

月日は慌しく過ぎ去つた。重氏の忘れかたみの石童丸も、もはや今年は十歳あまりになつた。其の頃、重氏が高野山に居ることを告げた者があつた。重氏の妻は、幼き石童丸を伴ひ、夫をたづねて遙々と、筑紫のはてから熊野に向つて旅立つた。

日敷を重ねて母、と子は、漸く高野山の麓についたが、女人禁制の山であるから、母は、そこに止まり、石童丸のみがたゞ一人、さびしい山路にわけ入つた。あなたの峯の薬師寺や、こなたの谷の瀧不動をふしおがみつゝたづねて見たが、父のありかは更にわからない。日がくると、

寺の軒や木の蔭に假寝をして、更けゆく夜半の鐘の音をきながら、たづねる父を思ひ、麓に残した母を思つては、幼な心にもかなしい思ひにかきくれた。

その中に三日ばかり過ぎた。

石童丸は、今日も亦たゞひとり、山を別けて上つて行くと、坂の上から珠數と花とを手に持つて降りて来る一人の僧があつた。石童丸は、その姿を見るより早く、

「もし、私は、此の山に尋ねる者があつて参りました。どうか教へて下さいませ。お願いでございます。」

と聲をかけた。僧は子どもの顔をみつめつゝ、

「此のお山で尋ねる人を探し出すはむづかしい。名を書いて札所に立て、置くがよい。さうすれば、いつかは逢ふことも出来るであらう。」

と親切に教へたが、幼ない此の子どもが、途方にくれて居るのをあはれに思つて、自分の住居につれて歸り、

「そなたは、一體どちらから來られたか。國はいづこで名は何と申される。」
とたづねたとき、石童丸は涙を拭ひ、

「私の國は、筑紫の松浦灣、たづねる親の俗名は、加藤左衛門重氏、私は其の子の石童丸でございます。」

と聞いて苺萱は、

「それではこれが我が子であつたのか。」

と胸もせまつて、はらはらと落涙した。此のありさまを眺めた石童丸は、覺えずその膝にすがり、

「あなたがお父さまではおはしませぬか。どうかお明かし下さい。」

と涙ながらに、母と共に筑紫からたづねて來たこと、母は麓の宿に待つて居ることを言葉短かく語つた。苺萱は、

「おゝなつかしい我が子よ。」

と云はうとしたが、思ひ返して、

「いゝえお前のたづねる其の道心は、去年の秋病氣のためになくなられた。」

と云つた。石童丸は其の場に泣き沈んだ。

「そなたは早く此の山を降り、母にそのことを語つて、ねんごろに回向をしたがよいであらう。」

と情けをこめた言葉に、石童丸はわかれを告げて、泣く泣く麓に降りて來た。

されど、哀れにも、石童丸の母は、旅の疲れに病を得て、石童丸の下山せぬ前に、麓の宿で草葉の露と消え失せた。石童丸のかなしみは、外の見る目もあはれであつた。

父もなく母もなき孤兒は、もはや此の世に便りとするたつた一人の姉に、詳しい話をしたいと思つて、故郷へ歸つて見ると、姉ももはや此の世の人でなかつた。

廣い天地にたゞ一人取り殘された石童丸は、ふと高野の山で逢つた親切な僧を思ひ出し、再び其の庵をたづね、仔細を語つて、お弟子にして下さいと願つた。

苺萱は、是非なくそれを許した。

二人は、間もなく山を出て國々をめぐり、信濃に來た時、苺萱は重い病の床について、遂にあへなくなつた。死ぬまで石童丸には親子であることを漏らさなかつた。

信濃の善光寺には、此の親子をまつれる親子地藏といふのが、今日でもまだ残つて居るといふことである。

四八ベニスの商人

伊太利のベニスに、シャイロツクと云ふ金貸の爺さんが住んで居た。血も涙もない剛愎非道な男であつた。

同じベニスの町に、アントニオと云ふ年の若い貿易商があつたが、これはまたシャイロツクと全く反對の情深い親切な人物であつた。

ある日のこと、アントニオの所へ、バツサニオと云ふ仲のよい友だちが訪ねて來た。バツサニオは、近中にボルジャ姫と結婚する費用として、三千圓ばかりアントニオに貸してくれなしかと相談をかけたが、アントニオの手許には生憎其の金の持合せがなかつた。航海中の船が歸れば、一萬圓や二萬圓やの都合の出來ないアントニオではなかつたが、それまで待つて居ることは出來ない。

いろいろ考へたが、妙案も浮ばず、とうとうシャイロツクに借りて當座の用を辨ずることにした。シャイロツクは、いつもアントニオが金を與へて貧乏人を救ひ、自分の商賣の邪魔をす

るのが憎くてならず、折があつたら困らせてやらうと思つて居た所であるから、

「アントニオさま、あなたは、いつも此のシャイロツクを鬼か狼のやうに云はれるが、やはりお金の入用な時もあると見えますね。」

と冷かな笑を浮べつゝ、

「よろしい、あなたが借用人になるなら、借しませう。そして利子はもらひますまい。其のかはり若し三月の終になつてお返しにならなければ、あなたのからだの肉一斤をいたゞきたいと思ひますが………」

と云ふ。アントニオは何氣なく、

「大丈夫、僕の船は三月たてば歸つて來る。期日になつて返さない時には、胸の肉一斤をやらう。」

と約束をして證文を取交し、三千圓をシャイロツクから借り、其の金をバツサニオに渡した。ところが困つたことが出來た。シャイロツクにお金を返す日が來ても、どうしたものか、アントニオの船は一隻も歸つて來ない。さあ大變、無慈悲なシャイロツクは、情け容赦もなくアントニオの肉一斤を切り取りたいと裁判所へ訴へ出た。そこで、ベニス公爵邸に於て、此の奇

妙な裁判が開かれることになった。判事のペラリオ博士は、裁判の時間が来ても、まだ姿を見せなかつた。ベニス公爵は、シャイロックに向つて、

「人は親切と思ひやりが大切だ。アントニオも此の頃不幸ばかりつゞいて氣の毒だ。許してやるがよいぞ。」

とさとされても、シャイロックはきかない。

「公爵さま、私は肉一斤をとつたとて、何にも役には立ちませんが、たゞ法律を重んじて訴へ出でたのでございます。それがならぬとおつしやれば、ベニスの法律はないも同様です。」

公爵は再び、

「シャイロック、人には恵を施すものぢやぞ。お前も亦天の恵を受けたいだらうが………」

と言はれても、シャイロックは心を離へさない。

「身に疚しい所がなければ、神様もおそろしくはございませぬ。」

其の時ペラリオ博士の使が手紙を持つて來た。其の手紙には「自分は病氣のため出ることが出来ないから、代理として一人の若い博士を送る。此の博士は自分よりも法律に明るいものである。」と書いてあつた。

此の博士と云ふのは誰であらう。ボルジャの姫が男装して法廷に現はれたのであつたが、一人としてそれを知つて居る者はなかつた。

若い博士は、凜とした態度で審問をはじめた。

「其の方はシャイロックと申すか。」

「はい。左様で。」

「其の方はアントニオと申すか。」

「はい。」

「アントニオ、其の方は、此の證文を存じ居るか。」

「如何にも承知いたして居りまする。」

「シャイロック、其の方はアントニオを許すことは出来ぬか。」

「許すと云ふ性質のものではないと存じます。」

「アントニオが金を三倍にして返したらどうぢや。」

「恐れながら、私は三倍の金よりも肉一斤を取りたいのでございます。」

「それならばよろしい。シャイロック、アントニオの肉一斤切りとれッ。」

これをきいてシャイロツクはおどり上り、

「天晴名判官、ダニエル様の再來ぢや。」
と喜んだ。

「其の方は肉を量る秤を持つて来たか。」

「此の通り持つて居ります。」

「ベニスの法律によつて肉一斤を切り取ることを許すぞ。但し、肉一斤の外は、何物をもとつてならぬぞ。一滴の血を流しても、ベニスの法律によつて、厳しい刑を申し附けるぞ。」

これを聞くとパツサニオは喜んだ。

「やあ、何と云ふ公平なお判決だ。これこそダニエル様の再來ぢや。」

シャイロツクは驚ろいた。

「それがベニスの法律でございまするか、それならば、アントニオの云ふ通りにして、三倍の金を戴いて許してやります。」

「黙れ。もはや判決はすんだ。早く肉を切れ。」

「それでは元金だけをいたゞきます。」

「そんなことは證文にない。」

「何……それもなりませぬとな。」

「ならぬ。」

「それではこのまゝ歸ります。」

「待て、剛愎非道な人非人、ベニスの法律により、人命を危くしようとした者は、其の財産の半分をお上に取り上げ、其の半分は危害を加へられようとした者に與へねばならぬぞ。」

四九 裸體行列

昔ある國に美しい衣服を喜ぶ王様があつた。それをきいて、どこからか、二人の男が都へ来た。さうして、多くの人々に、

「私どもは機械の名人でありますが、私どもの織り出すのは、愚かな者には見えない不思議な衣服です。」

と言ひふらした。此のことが都中の評判になり、いつしかそれが王さまの耳にも入つた。着道

樂の王様は、早速彼等を招いて澤山の金を與へ、直に一着の衣服を新調せよと申しわたされた。二人は、ありがたくお受けをして御前を退いた。

此の二人は、機織の名人でも何でもなかつた。實は大詐欺師であつた。うまく王様を欺いた彼等は、機織道具を据付け、毎日機を織る真似をして居た。

王様は、其の織物が早く見たくてならなかつたので、いろいろ思案の末、様子を見せに一人の大臣をお遣しになつた。大臣は、王様の命令を受けて、二人の家へ来て見ると驚ろいた。道具が動いて居るばかりで、織物は少し見えない。しかし、見えないと云へば愚かな者だと嘲けられ、王様の機嫌を損じるにきまつて居る。しかたがないから歸つて、

「誠にけつかうな織物でございます。」

と答へた。王様は大層お喜びになつた。數日たつてからまた外の大臣をおつかはしになつた。

其の大臣も亦目には何一つ見えなかつたが、愚者と云はれるのを恐れ、前の大臣と同じやうに偽りを申し上げた。王様は一段のお喜びであつた。

そこで、今度は、王様が前の大臣二人をお供につれてお出かけになつた。大臣どもは口々に「陛下、何と美しいでは御座いませんか。さぞ御満足であらせられませう。」

と誠しやかに申し上げたが、王様には少しも織物が見えなかつた。しかし、こゝで汗濶なことは云へないと思つて、

「おゝ、すばらしい出来ぢや。」

と仰せになつて、織工には、莫大の賞金を與へられた。

いよいよ其の衣服が出来上つた。明日は王さまが其の衣服を着て、市中へお出かけになるといふので、あちらでもこちらでも大評判である。

其の當日になると、織工どもは前後から王様の衣服をぬがせ、お追従を云ひながら、新しい衣服を着せる真似をした。

王様の行列が市中へ出ると、多くの者は、不思議な衣服を見ようと思つて、黒山の如く集まつた。行列が近づいたので、一同は頭を上げて王さまの姿を仰ぐと、これはしたり、王様は丸裸である。しかし見えないと云つては、自分の愚かな事を笑はれると思つて、一同は口々に、

「まあ綺麗な………」

「何と見事なお召物ではないか……」

などと語り合つて居つた。其の時に一人の子どもが突然、

「王様は裸體だやい。」
 と大きな聲で叫んだ。此の無邪氣な子どもの一言によつて、集まつて居た人も、お供のけらいも、はつと思つた。王様自身も、はじめて、
 「それでは矢張り予は裸體であつたのか。」
 とびつくりすると共に、織工のために欺かれたことを後悔なされた。

五〇鹿のなく音

秋も夜寒になつた頃、町の者が五六人、辨當の用意などをして、とまりがけで鹿の音をき、に出かけた。
 心やすい山寺の和尚をたづねて、一同は客殿をかり受け、酒宴をはじめ、鹿のなく音を待ちわびて居た。歌をよむ者もあり、詩をつくるものもあり、世間話に興じて居る者もあつた。
 待てども待てども、鹿は一向になかず、そろそろ眠氣を催して來た。歌も詩もいやになり、うき世話もとぎれ、みな默然として居ると、其の中の五十ばかりの男が、

「さて今晚はみなさまのおかげで、宵からゆるりとお物語りをいたし、よい楽しみをいたしました。私がかやうに楽しんで居る間にも、定めし家内のものは心配をいたして居るだらうと思ふと、酒もおいしくのめません。」
 と云ふ。座中の人々が、「それはどうしたわけでござりますか。」と云ふと、
 「お聞き下さりませ。ご存じの通り、私には、當年二十二歳になる一人の忤がござりますが、こまつた奴で、私が家に居れば澁々店の手傳もしますが、私のかげが見えぬと、尻に帆かけて遊びに出かけ、何と意見をいたしましたも、馬の耳に風同様、あのやうな者に身代をまかせねばならぬかと思ふと、心細うござります。」
 と吐息をついて咄すと、傍から四十五六の男が、
 「いやいや、あなたのは御子息に金をつかはれるまでのことですが、私などはどうでせう。鼻たれの時分から世話をして、どうやらこうやら少しばかり用に立つやうになつた店の者につかはれるので、腹が立つやら何やら……」
 と云ふと、又一人が、
 「店の者につかはれる位ならまだしもちや。手前どもは、近ごろ得意が片端から減るので、途

方ほうにくれて居りまする。」

と云ふ。向ふの席にすはつて居た老人はまた、

「何れもさまのご愁嘆しゅうたん。ご尤もつともでござれど、親類縁者しんるいゑんじやから金の無心むしんを言はれたり、印形いんぎやうをしてくれと言はれたり、家内づれのかゝり人を世話するも、辛いものでござりまする。」

と半分まで言はさず、隣の人が、

「まだまだ皆さまのは榮耀えいようじや。私のつらいことをおきなされて下さりませ。どうした事やら、私は家内の者と母との仲が悪くござつて、日がな一日、牛の角つき合、うち中がくすばります故、いつそ里さとへ歸さうと思へば、子どもが二人もあり、挨拶あいさつすれば、女房のひいきをする、母の機嫌きげんをそこね、女房を叱しかれば、他人じやと思ふてつらうさつしやると恨うらまれる。中へはいつた者のつらさ苦しさ、お察し下さりませ。」

とそれぞれ身上の泣き話をして居る中、其の中の一人は、氣がついて、

「ほうたうにもう鹿も鳴きさうなものじや。あまり話に身が入つて聞きはづしたのではないだらうか。」

と椽えんの障子しよじを開けて見ると、大きな鹿が庭にわさきに默然もくねんとして居る。

「これはどうぢや。そこに居るならなせなかぬのだ。」
と云ふと、鹿はぬからぬ貌かほで答へた。
「わしは鳴きに來たのではない。おまへさん方のなくのを聞きに來たのだ。」

五 苔しもの弓

千世鶴丸ちよつるまるは、幼ない時から、加賀國八院べつとうの別當べつとうの房ぼうに入つて學問をして居つたが、父母のこゝとを思ひ出し、そつと寺をぬけ出して、鴨原からはらの里さとに歸つて來た。千世鶴丸はその時に十三歳であつた。

母は、千世鶴丸の歸つたのを喜んで、留守中るすぢゆうのことなどを何かと話して居ると、そこへ獵かりから戻つて來た父は、大に腹を立て、

「お前は何しに歸つて來たのだ。お前を寺にやつて置くのは、學問をさせて立派な人にしたいと思ふからだ。これからは決して親があるなどと思ふな。」

と叱しかり、持つて居た弓ゆみで打擲うちなげした。弓は三つに折れた。

千世鶴丸は、餘儀なく又家を立ち出で、都の方へとぼとぼと歩いた。越前の荒知山まで來ると、時雨は雪と變はり、身を切るやうな寒さに、もう一足も進むことが出來なくなつたので、道の傍にぼんやりと立つて居た。

たまたま其處を通りかゝつた平泉寺の花王坊註記と云ふ人が、千世鶴丸を見て事の次第をたづねた。千世鶴丸はありのまゝに答へた。註記はこれを聞いて、

「學問がしたいと思ふなら、私と一しよにお出でなさい。」

と親切にも千世鶴丸を伴ひ、山上の房に住ませた。

月日のたつのは早いもので、それから五十何年かを過ぎた。千世鶴丸の學問は次第に上達して、六十七歳の時には天台の座主に昇つた。比叡山延曆寺の延昌僧正と云ふのが、此の千世鶴丸のことである。

其の頃加賀の父は、既に八十歳あまりになつて居たが、日頃自分の子のことを戀しく思つて居ると、ある夜の夢に、我が子が三千の大衆に尊敬せられる身分の高い法師となつて居ると見た。さては其のやうなものになつてくれたのかと、父はうれしさのあまり、はじめて寺入りをさせた八院の別當の房を訪ねると、

「其の人は里へ歸つたまゝ、再びこちらへは來られないから、當方では何もわかりません。」

と云ふのである。父は失望して泣く泣く其の寺を去らうとすると、院の別當は深く同情してこれを呼び止め、仔細をたづねた。父はかつて我が子を折檻した昔の事から、夢の次第まで詳しく話した。別當はしばらく考へた後、

「夢に三千の大衆とあつたからには、比叡山の座主になつて居られるのかも知れない。」と言つた。

これをきいた父は喜んで一旦家にかへり、かつて我が子を打つた弓の折れを首にかけ、住み馴れた故郷をあとに遙々と比叡山をさして出發した。

比叡山について、座主の御房をたづね、

「私は加賀の者でございますが、少々おたづねいたしたいことがあつて参りました。」

と言ふと、中から出て來た一人の男は、乞食のやうな汚い此の老人を見て、彼の云ふことには耳も傾けず、無情にも追ひ返さうとした。これを簾越しに見て居られた座主は、思はずも心の中に、

「ハテ加賀と言へばなつかしい我が生國であるが、我が父は如何になされたであらう。今でも

まだ存命して居られるのか知ら。」
と人知れず涙に咽びながら、じつと眺めて居られると、ふと目についたのは、老人の首にかけて居た弓の折れであつた。

「さてはあれが父上であつたのか。」

と其の老人を上席に招じて名乗り合つた。不思議な再會に親子二人はしばしうれし涙にかきく
れた。

五二 安宅の關

時しも頃は如月の、風まだ寒き北國路を、いたはしや義經は、兄頼朝の疑を受け、山伏姿に
身を窶し、奥州さして落ちてゆく。主従わづかに十二人、日數積りて加賀の國、安宅の關にさ
しかれば、關の役人富樫左衛門、聲も高らかに、

富「やあやあ山伏、名をなれのれ。」

と呼はりける。先達の武藏坊辨慶、こは由々しき大事なりと、心の中に思へども、言葉しづかに、

辨「承つて候。これは奈良東大寺建立のために、北陸道を通すこと叶はじ。」

と答ふ。

富「それは殊勝のことなれど、山伏なるからは、此の關を通すこと叶はじ。」

辨「して、其のいはれは。」

富「さればなり。義經殿山伏と姿をかへて、奥州へ落ち行かるゝとの噂あれば、山伏は一人も

通すなと、頼朝公の内命なり。」

辨「賈山伏はさもあらん。まことの山伏を止め給ふには及ぶまじ。」

富「されば、まこと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈、それを此の場に讀み上げ

られよ。」

辨「何と、勸進帳を讀めとや、心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中より取り出したるは、有り合せの巻物一つ、勸進帳と
名づけつゝ、即座に文を綴り、まことしやかに讀上げける。富樫つくづく聞きすまし、

富「もはや疑晴れて候。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候。」

通らんとする折柄、後に従ふ強力を、富樫は目早く見咎めて、

富「いや暫く、止まれ、それなる強力は通しがたし。」

と叫ぶ。すは一期の浮沈と思ひたれども、辨慶は空とぼけ、

辨「何故にお止め候ぞ」

と詰る。

富「その強力の姿義経殿に似たればなり。」

辨「奇怪千萬なる仰せかな。これなる強力は今日雇ひ入れたる者にて候。義経殿に似たりとの

疑ひをかけらるゝは腹立たしや。おのがわづかの笈の重げに負ひて、人々に後るればこ

そ。よしなき疑をも蒙るなれ。憎さも憎し、いでこらしくれん。」

金剛杖を取つてさんざんに打擲す。これはと驚く人々を目にて制し、辨慶はなほも激しく打

据ゑたれば、富樫はやうやく心とけ、

富「これは我等があやまりなり、構ひなしお通りあれ。」

と云ふ。一同はつと一息、「さらばさらば」と立ち上り、關路をあとにしづしづと奥州さして

下りけり。

五三 有難與一兵衛

天明寛政の頃、備前の田舎に油屋與一兵衛と云ふ農夫があつた。與一兵衛は、岡山の藩士松島省内について心學を學び、多くの人々にもすゝめてこれを聞かせたのみならず、村に不行跡の者があると、懇々と説諭をして善道に導くのを樂しみとして居たので、藩主もその行をほめて三度までも褒美を下さつた。

與一兵衛には一つの癖があつた。それは何を見ても、直に、

「ハツアありがたい。」

と云ふのである。そこで、近所の人は、彼のことを、有難與一兵衛と呼んで居た。朝起きて母の顔を見ても、妻の顔を見ても、

「ハツアありがたい。」

と云ひ、人に逢つても、

「ハツアありがたい。」

と云ふ。

「何が其のやうにありがたいのか。」

ときくと、

「今日も亦恙つがない家族かぞくや友人の顔を見る、有難いことではないか。」

と答へる。

與一兵衛は、或る日外から歸つて來る途中とちゆうで、突然とつぜん雨に逢あひ、走つて我が家へ戻もどつて來たが、あまり急いだので、戸口の所で轉ころんで怪我けがをした。それでも例れいの如く、

「ハツアありがたい。」

と云ふ。下僕しもべは、主人を助け起しながら、

「此のやうにお怪我をなさつて、なんでありがたいことがございませう。」

とつぶやくと、

「自分の疏忽そつごなれば不具者ふかたものになつても仕方がないのに、わづかなかすり疵きずですんだのは、ありがたいことではないか。」

と答へた。

或る時、近村うぶすなまつりの産神祭うぶすなまつりに詣もうで、ふと往來で人に突き當つて頭を打ち合せた。與一兵衛は、何とも云はず、

「ハツアありがたい。」

と云つて通り過ぎ去らうとした。すると、先方りつぷの人は立腹りつぷして、

「人に突き當りながら、詫言わびもしないで、ありがたいとは何のことだ。人を嘲弄ちやうろうするにも程がある。」

と大聲をあげて責めた。與一兵衛は驚いて、

「決して人さまを嘲弄ちやうろうしたわけではありません。どうか只今の無禮は御勘辨ごかんべんを願ひます。私は隣村となりむらの與一兵衛と申す者でござります。」

と言ふと、其の人は笑つて、

「それではお前さんが、あの有難與一兵衛どのでしたか。」

と直すに心もとけ、事なくすんだ。與一兵衛はその人と別れる時、

「ハツアありがたい。」

と云つて過ぎ去つた。

五四神のたまもの

或る日、フレデリック大王は、近習の者を召すために、呼鈴を鳴らしたが、誰も出て来ない不審に思つて、次の室の戸を明けて見ると、近習は椅子の上うたゝ寝をして居たから、ふと見ると、其の男のポケットから何か書いたものが下つて居るので、大王は好奇心を起し、そつと曳き出して見ると、それは母から来た手紙であつた。

其の文面には、

「お前が働らいて呉れるから、母も大へんに喜んで居る。どうか眞面目に御奉公をして呉れ。」と云ふ意味のことが細かに書いてあつた。王は近習の母を思ふ心がけに深く感じ、一包の金貨を其の手紙と一しよに、ポケットの中に入れ、居間へ歸つて再びベルを鳴らした。

けたゝましい其の響に、近習の者は眼を覺まして、恐る恐る王の居間に伺候した。王は近習の様子を眺めつゝ、

「お前は眠つて居たね。」

と問はれた。少年は口ごもりつゝ手をポケットに入れると、ザクと觸れたのは、一包の金貨であつた。少年は、それを取り出して見て眞蒼になつた。

「どうしたのか。」

と王はそ知らぬ顔で尋ねた。

「陛下……」

と少年はぶるぶるしながら、

「誰か私を陥れようとした者がございます。」

と言つて、其の金貨を王に示した。王は笑ひながら言つた。

「それはお前の眠つて居る中に、神からたまはつたのだ。好運と云ふものは、人が眠つて居る時に来るものだ。それをお母さんに送つてあげるがよい。さうして、今日からは、お前とお前のお母さんの二人を世話してあげるから、そのこともついでに傳へたがよい。」

五五 公明正大

西暦紀元千八百六十年のことである。米國では、大統領を選挙する準備の會議を開いた。候補者が十五六名ほどあつたが、其の中から、リンコーンとシユワルトの二人が選出され、此の二人の中の一人が選挙によつて、大統領となることになつた。

其の時、リンコーンは、家に居たが、彼の友人から、此のことを電報で知らせて來た。さうして其、の終りに、

「君に注意したいことがある。何某及び何某といふ人を二名ばかり、君が大統領になつたら、一ばん上の官途に使つてやつてくれ給へ。さういふことを明かにしてくれたら、彼の二人がきつと一生懸命に骨を折るから、必ず君が當選する。」と添へてあつた。

リンコーンは、これを読んで嚇と怒り、

「御親切はありがたいが、仰せに従ふことは出來ない。米國の國民が自分を適當と認めたらば

とに角、さうでなければ大統領になりたいとは思はない。卑劣なことをして當選しようとは思つて居ない。」

と返電をうつた。

選挙の結果、はリンコーンの方がきつと多數の點數を以て大統領に上つた。

五六 アシシのフランス

イタリーのアシシと云ふ所に、フランスと云ふ聖人がありました。

ある日のこと、聖人の留守に泥棒がはいりました。弟子の者がこれを見付け、棒をふりかざして追つ拂ひました。丁度そこへ歸られたフランスは、此のことをきかれ、

「それは氣の毒なことをした。大方食べものがなくて困つたから來たのだらう。まだ遠くは行くまい。お前は走つてその泥棒をよんで來てくれ。私はこゝに澤山お土産を貰つて歸つて來たから、これを分けてやる。」

と言はれました。

弟子は、直に走つて其の泥棒をよび返して來ました。泥棒は、何事であるかと、聖人の前に來ました。情深い聖人の言葉をきいて、心から悔悟し、

「私は今日まで悪いことばかりいたしましたがお情け深いお心によつて、はじめて此の身の罪の深いことを悟りました。今日から心を改めますから、お弟子にしてください。」と頼みました。

此の泥棒は、聖人のお弟子になつて、しまひには立派な人になりました。

五七 カーライルの忍耐

イギリスの文學者カーライルの著書に、「フランス革命史」といふものがあります。今日までも多くの人々に讀まれて居る有名な本であります。

カーライルが此の本を書き上げるまでには二十年かかりました。それを書き上げてしまつた時、一人の友だちがたづねて來たので、カーライルはそれを見せました。何しろカーライルの如き大文豪が二十年もかゝつて書いた本でありますから、非常によく出來て居ます。其の友人

は少し讀んで見てすつかり感心して仕舞ひ、印刷する前に一寸其の原稿を貸して貰ひたいと申しました。

友人のことでありますから、カーライルは喜んで貸しました。

その晩、友人はおそくまで讀んだが、寝る時にそれを大切に棚の上にあげて置きました。

然るに、翌朝起きて見ますと、其の原稿がありません。驚いて女中をよんできいて見ました。すると、女中は、

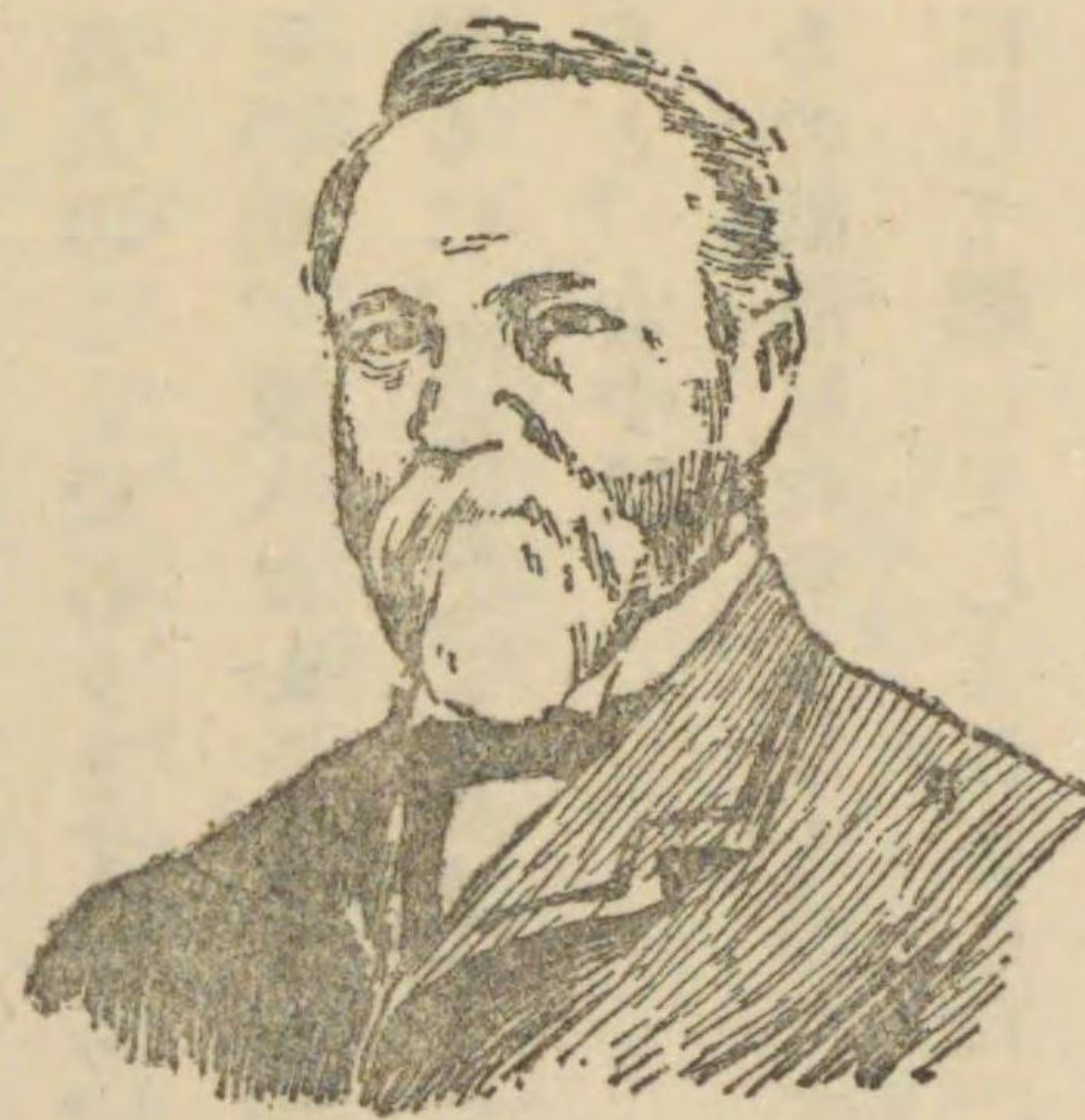
「あの紙屑見たやうなものですか。あんなものは此處にあつても見つともないから、たきつけにして燃してしまひました。」

と平氣な顔をして居ます。友人はあまりの驚きと悲みに、一時は氣が狂ふばかりでありました。が、燃したものは、何としても戻つて來るわけがありません。カーライルの許に來て、詳しく譯を述べて謝罪しました。カーライルもこれをきいて、失望の餘り其の場に氣絶してしまひました。

しばらくは呆然として日をくらして居ましたが、何日かたつと、再び勇氣を振ひ起して、またフランス革命史の原稿を書き始めました。友だちの不注意をも咎めず、運命とあきらめて、全力を傾け、遂に再びこれを書き上げました。

不朽の名著は、かくの如くして、世に出ました。さうして、後世までも多くの人々を感奮せしむるに至りました。

五八カーネギー



鋼鐵王として聞えた米國の大富豪アンドリュー・カーネギーは、英國スコットランドの一都市ダンファムラインの町に生れた。機業に失敗して職を失つた父は、家族を引きつれて、萬里の波濤を越え、米國にわたり、ピッツバーグ市に足を留めた。

父の貧しい境遇を見かねたカーネギーは、十二歳の時に、自ら進んで木綿工場の糸巻小僧となつた。一週間の給料は一弗二十仙であつた。一週の終りにそれを受け取つて懐に入れて歸つた時のうれしさは、後年幾億の富を得た時よりも嬉しかつた。

一年ばかり居つて、カーネギーは、電信局の少年配達夫に轉じた。職務に忠實な此の少年は、

電信の配達の敏速を要することを思ひ、採用されると直に市街を巡回して、市内の町名番地を盡く諳記した。親切にして機敏な此の少年は、忽ちにして局長の信用を得、技手に拔擢せられて、月俸二十五弗を受けた。

十五歳の時、病の爲めに父は世を去つた。カーネギーは、慨き悲しんだが、其の甲斐もなかつた。父の死後は、父に代つて一家の世話をせねばならなかつたから、彼の責任はまことに重かつた。

カーネギーが電信技手をつとめて居ると、ペンシルヴァニア鐵道會社の監督スコットといふ人が、一日用事のために來り、カーネギーの仕事ぶりの親切機敏なのを見て深く感じ、月俸三十五弗を以て、會社の電信技師に招聘し、兼ねて自己の秘書役たらしめた。

スコットの股肱となつて、會社のために盡して居る中に、有名な南北戦争が起つて、スコットは、陸軍次官に擧げられたので、カーネギーも亦出陣して交通任務に従事したが、敵彈のために負傷した。

カーネギーの地位は、次第に進んで、ピッツバーグ區の監督部長となつた。外に二三の會社にも關係して多額の配當を受けた。

其の頃、彼は、線路中の木橋を鐵橋に改設して、非常な好成績を得てから、將來鐵橋の有望なることを知り、鐵道會社を辭して獨立の事業に着手した。

カーネギーの事業は、着々として成功し、彼の名聲は、米國の實業界に鳴りひびいた。彼は多くの鑛山を買収して採掘を始め、莫大の利益を得た。彼の事業は愈々擴張し、採掘した鑛石を運搬するために、獨力を以て百八十餘哩の鐵道を敷設し、遂に世界の大富豪と稱せらるゝに至つた。

大富豪となつたカーネギーは、其の財産の殆ど全部を公共事業のために費やした。彼が公共事業に投じた金額は、三億五千弗(約七億圓)以上に上つた。晩年に於ける彼の私財は、殘る所幾干もなかつた。世界に大富豪の數は多いが、カーネギーの如く貧賤なる地位から起つて大企業家となり、數億の富を得て、而かも、此の富を盡く社會事業に費し、子孫の爲めに美田を買はず、富豪の間に大きな教訓を示した者はない。富豪の模範として、彼の名は、世界の人々に長く記憶せられるであらう。

五九 ミリエル僧正

秋風のうすら寒く吹く十月のある夕方、ダインの町へみすばらしい身なりをした一人の男があらはれた。此の男は、數日前にツーロンの獄から出たジャンボルジャンであつた。ジャンは巴里から程遠からぬ田舎の樵夫の子と生れたが、幼少の時兩親に別れて姉の家へ引き取られた。然るに、此の姉の夫は、不幸にも八歳を頭に七人の子を残して夭折した。毎日烈しい勞働をして姉の家計を助けて居たジャンは、幼い子どももの飢餓を見るに堪へず、二十七歳の冬の一日、あの店から一片のパンを盗み取つた爲めに、五年の懲役に處せられた。入獄後も多病な姉を思ひ、可憐な兒女を思ふにつけ、長き刑期を忍ぶことを得ず、度々破獄を企てたので、其の度毎に刑期を増され、遂に十九年の獄中生活を續けることになつたのである。

刑期も漸く満ちて出獄したが、ジャンを大悪人の如くに思つて居る多くの人々は、彼に安らかな寢床をも、腹をみたすべき食物をも與へなかつた。どこの宿屋でも門前拂を食はせた。一日歩き續けた彼は、疲勞と空腹との爲めに、とある教會堂の廣場の石の上に倒れて居た。偶々

其處を通りかゝつた親切な人が、ジャンから事情をきいて深く同情し、教會堂の裏手になつて居る牧師の家を訪ねて見るやうにすゝめてくれた。ジャンは勇を鼓して教へられた方へ行く、そこにはむさくるしい一軒の家があつた。玄關に立つて聲をかけると、中から「おはいりなさい」と云ふ穏かな聲が漏れて、扉がひとりでに開いた。ジャンは其の中にはいつた。此の家の主人は誰であらう。當時其の名を謳はれたミリエル僧正である。僧正は既に七十五歳の高齢であつた。早く妻を亡ひ、年下の妹と老婢とを相手にさびしく暮して居られた。政府から貰ふ俸給の一萬五千元の中、一萬四千元は慈善事業に寄附し、其の残りで極めて質素な生活をして居られた。今晚餐の食卓に着き、食事をはじめようとする時に、此の怪しげな男のはいつて來たのを見て、二人の女は驚ろいたが、僧正は靜かにジャンの顔を眺めて居られた。ジャンは姓名を告げて事情を語り、一夜の宿の無心を申し込むと、僧正は快く承諾し、

「さあゆつくりおあたりなさい。私も今食事前ですから御一緒に食べませう。」

と言ひながら、老婢に命じて、銀の燭臺一對と銀の皿六枚を出して、明るいともし灯の下で親切のこもつた晚餐をすゝめた。

食事がすむと、僧正は、新しい白布をかけて寢臺の用意をさせ、ジャンを案内して其處に

臥せしめた。連日の勞れにジャンは直に熟睡したが、夜中ごろにふと眼がさめた。寢臺の上に起き上つてあたりをうかゞへば、ひつそりとして聲もなかつた。此の時にふとジャンの頭腦に浮んだのは、夕食の時に見た銀の皿である。

いくら捨賣にしても二百法の價はあると思つた。悪心はむらむらと起つた。ジャンは、私かに寢臺から下りた。そつと隣室をうかゞふと、僧正はすやすやと眠つて居られる。窓からきす薄明りに僧正の寢顔を見ると、雪のやうな白髪が額をかくし、顔面には一ばいの喜びが満ちて居た。其の神々しい姿にジャンは心も臆したが、やがて意を決し、戸棚の中から銀の皿を盗み出し、それをもつて窓を飛び下り、いづこともなく逃走した。

翌朝いつもの如く僧正が庭を散歩して居られると、三人の憲兵が一人の大男を捕へて來て恭しく、

「閣下よ。」

と呼びかけて、

「昨夜警戒中此の男を捕縛して調べて見ると、閣下のお宅の品物と思はれるものを持つて居ります。大方閣下の許へ忍び込んだ盗賊かと思つて、連れて參りました。」

と報告した。其の男は疑ひもないジャンであつた。ジャンは憲兵等が閣下と呼んだのをきいて、それでは、此の牧師はたゞの人ではなかつたのかと初めて感じた。僧正は、ジャンの傍に行き、

「お、お前さんはよい所へ歸つて来てくれた。」
と嬉しげに聲をかけ、

「私は昨夜燭臺もお前にやつたのに、なせあれを残して皿ばかり持つて行つたのだ。」
と言ひながら、憲兵に向つて、昨夜此の男に宿を貸した時に、其の品を與へたのであると辯護したので、憲兵は僧正の旨を奉じて、ジャンをゆるした。僧正はジャンに向ひ、

「もう歸るのなら、あれも持つて行くがよい。」

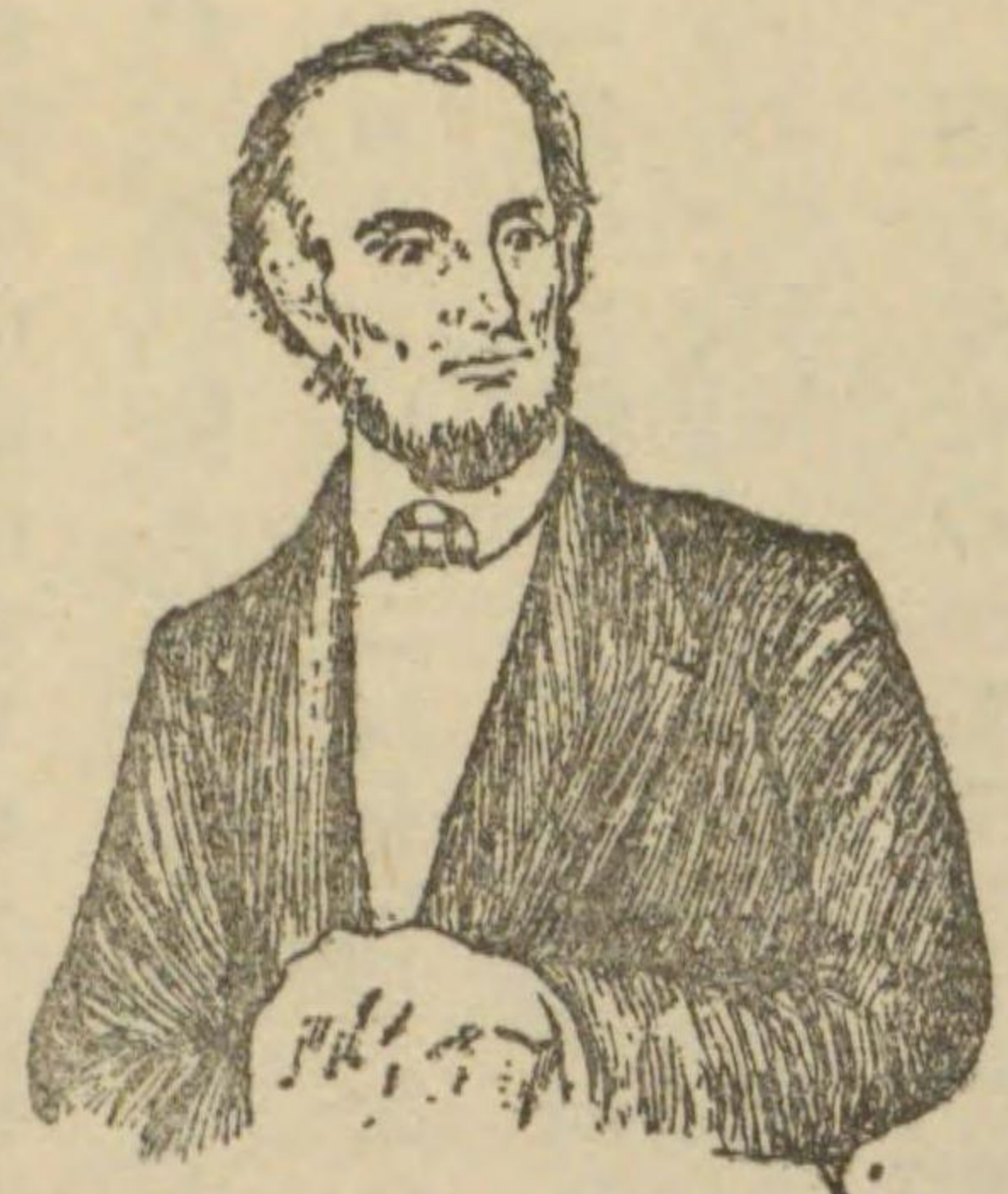
と言ひながら、隣室から一對の銀の燭臺を取り出し、

「此の燭臺と皿とを資本としてきつと善人になつてくれ。」

と言はれた。ジャンの眼からは、悔悟の涙が溢れた。

ミリエル僧正の慈悲心に感じたジャンは、これから全く新らしき生活に入り、社會のために驚くべき偉大な事業をなした。

六〇 リンコーン



米國の大統領として世界に其の名を謳はれたアブラハム・リンコーンは、今から約百餘年前に、米國エンジアナ州の寒村に移住して來た最も貧しい家に生れた。彼の住居は牕に戸も障子もない藁小屋に過ぎなかつた。室内には、破れた敷物の上に、一つの寢臺と二三脚の卓が備へてあるのみであつた。父は毎日家族を引きつれて材木を伐り、又は野獸を獵し、漸く細々と其の日の煙を立て、居た。父は正直一遍の好人物であつたが、母は伶俐な婦人であつて、子女の教育に最もよく注意した。

リンコーンが十歳の時に、母は病のために此の世を去つた。

父は間もなく後妻を娶つた。後妻は三人の兒をもつ寡婦であつたが、性質の極めて善良な女で、リンコーンを實子と同じやうに愛育した。リンコーンが立派な人物となつたのは、此の繼母の教育に負ふ所が少なくないと云ふことである。

リンコーンは幼時から讀書を好んだ。しかし、貧しい父は、彼に書物を買つて讀ませることを得なかつた。其の村の富める一人の老翁が憐れんで、彼に自分の藏書を貸し與へた。ある日、彼は此の老翁からワシントンの傳記を借り、喜んで歸つて農事の暇にこれを繙いた。ある夜、俄に大雨が降り出した。朝起きて見ると、棚の上に置いた書物は、雨漏のために濡れて居た。リンコーンは、これを見て大に驚ろき悲しんだが、やがて老翁の許に來り、包まず事情を語り、「私の怠慢から大切な書物を此のやうに汚して、何とも申しわけはありません。これを買ひ求めて辨償したいと存じますが、貧しい家のことで金銭としては御座いません。その代りに三日間あなたのお宅で私を勞働させていたゞきたい。」と懇願した。老人はリンコーンの正直な申し立に感じ、却つて其の書物をリンコーンに與へた。何事にも正直であつたから、村の人は、彼を「正直アブ」と呼んで可愛がつた。リンコーンが二十歳の時、父は一家を率ゐてイリノイス州のサンガモン河邊に移住した。此の頃リンコーンは、ある一商店に傭はれたが、熱心で正直な彼は、傭主から深く信用せられた。

ある日、一人の婦人が買物をして歸つた。あとで精算して見ると、三ペンスほど多く受取つたことに気がついた。リンコーンは、大に後悔して、直に其の婦人のあとを追ひかけ、一里ほど走つて漸く追ひついた。婦人は様子を残らずきいて、此の店員の正直な行に感心し、厚く禮を述べて別れた。

他人の家に傭はれて居る間も、修學の志を少しもすてなかつた。ある時によい文法書が到着したときいて、三里あまり離れた町の書店まで買ひに出かけ、晝夜耽讀したこともあつた。又薄給で燈火の費用も十分に得られなかつたので、蠟燭を買ふかはりに、木片を焚いてそのあかりで勉強したこともあつた。

リンコーンが二十三歳の時であつた。近傍の土人が侵入して來た時に、彼はイリノイス州から義勇兵となつて出で、選ばれて其の一團長となつた。此の戦争によつて彼は機敏な才幹を發揮したので、三箇月の後、戦争が終ると共に、州會議員の候補者に擧げられた。其の年の選舉には失敗したが、次の選舉には衆望を擔うて當選した。

リンコーンは一日ある事件の公判を傍聴し、辯護士の雄辯をきき、法律の研究に興味を起し、二十八歳の時に試験を受けて辯護士となつた。友人と共に聯合して法律事務所を開いたが、はじめは下宿する金もなく、事務所の一室に起臥して僅に衣食を辨じた。然るに其の事務に巧みなことと、正直なことによつて、忽ち名聲を博し、訴訟の依頼者も頗る多くなつた。

ある日一人の婦人が彼の事務所を訪れて、一つの訴訟事件を依頼し、謝禮として二百五十弗の手形を渡した。リンコーンは、必要書類を預つて置いて、篤と調査した上で、返事をすると言つた。翌日婦人は再び事務所を訪れた。リンコーンは、書類調査の結果、勝訴の見込がないから、訴訟を見合せた方が得策だと告げた。婦人は満足して立ち上つた。其の時に、リンコーンは、「一寸待つて下さい。お返しするものがある。」

と言つて前日婦人から受取つた手形を返した。婦人は調査の勞に報ゆるために、彼に與へようとしたが、リンコーンは何と言つても承知しなかつた。

リンコーンほど敏腕にして正直な辯護士はないと言つて、多くの人々は深く彼を信頼するに至つた。

○

リンコーンの徳望は日毎に加はり、千八百四十六年には下院議員に選舉せられ、千八百六十年には大統領に進んだ。

大統領となつてからも、リンコーンは、かつてイリノイス州の一貧兒であつた時の心を忘れず、極めて平民的な生活を續け、舊友や知人に對して親切の限りをつくした。彼は舊友から大統領と呼ばれることを厭ひ、常に、「余を大統領などと云はず、昔の如くリンコーンと呼んで呉れるやうに」と人々に語つた。ホワイト・ハウスに彼を訪ねる舊友には、いつも喜んで會見し、懇ろにこれをもてなした。友人に親切なるが如くに、一般の國民にも亦温い心を以て接した。請願の筋ある者には、時間の許す限り、應接して懇々と其の事情を聞いた。彼は情に厚いのみでなく、意志も強く、理智も鋭かつた。請願の理由を聽いて、諾すべきものは諾し、拒絶すべきものは拒絶した。大統領としての彼の逸話は、枚舉に遑なきほど多く傳へられて居る。

偶々奴隸解放の問題が起り、此の大偉人は遂に兇漢の毒手にかゝり、俄然として大木の倒れるが如くに斃れたが、彼はそれがために却つて全世界の人々にながく忘れ難い印象を止めた。

六一 奴隷解放

リンコーンがはじめて下院議員となつた頃から、アメリカに於ける奴隷の問題は、領る紛擾を極めて來た。奴隷と云ふのは土人の傭人のことである。當時アメリカでは、これ等の土人を人間として取扱はず、牛馬の如く自由に賣買して居つた。斯かる制度は、正義人道に反するものであるから、一日も早く廢止せねばならぬと言つて、北部諸州の者は、奴隷制度の撤廢を叫び、南部の諸州の者は、奴隷制度の利益ある所以を述べて、廢止説に反對した。國會に於ては、南北二派が對抗して、いつも激しい議論をした。

慈愛の心深きリンコーンは、常にあはれな奴隷の身の上に同情の涙を注いで居た。かつて彼の法律事務所に一人の年老いた女の黒人が來て、

「私の子は汽船の水夫となつて居りましたが、ミスシツピー河を下るとき、何氣なくニューオルレアンに上陸しますと、其の地の法律に觸れて獄に投せられました。罰金を出せばよいが、それが出來なければ、また奴隷に賣られませう。さうなると、もう親子は二度と此の世で逢

ふことも出來ませぬ。

と涙ながらに話した。リンコーンは、これをきいて太く心を動かされ、州の知事に頼み、金を出して其の黒人を取り返し、あはれな老母の手に戻してやつたが、此の時から奴隷制度を廢止し、アメリカの天地に一人の奴隷もないやうにしたいと望んだ。リンコーンの血潮に漲れる此の大きな望みは、世にも尊いものであつた。

かくて、リンコーンは、奴隷解放のために、ある時には民論の喚起に力め、ある時には反對派の辯士を誘説し、東奔西走殆ど席の暖まる隙もなかつた。

千八百六十年、彼は大統領に當選した。奴隷廢止論者の多い北部の人々は、雙手を舉げて萬歳を叫んだが、南部の諸州は、これを快しとせず、遂に合同して北部に對して開戦を宣言し、茲に有名な南北戦争が起つた。戦争は未だいづれとも勝敗の決せざる千八百六十三年の一月一日、リンコーンは一大決心を以て奴隷解放令を發布した。此の時から四百萬の奴隷は悉く自由の民となり、仁慈に富める此の大統領の厚恩を感謝した。

正義に敵するものはない。戦争は遂に北軍の勝利に歸した。南軍が降服してから五日目のことであつた。リンコーンは半日の慰樂を得るために、フォル

ド劇場に赴いた。然るに。此の時南軍に好意を有する一暴漢が、突然後に現はれて彼の頭腦を狙撃した。

人類の大恩人アブラハム・リンコーンは、かくして千八百六十五年四月十五日、五十六歳を一期として、非業の最後を遂げた。

飛報四方に傳はるや、哀悼の聲は天地に充ちた。

奴隸解放令の一節

北米合衆國の大統領は、合衆國の主治權、或は政府に對する武裝的叛逆の時には、これを鎮定するために、適當にして必要なる戰争的方策として、合衆國の陸海軍總指揮官なる權力あり。此の權力により、今、余、北米合衆國の大統領アブラハム・リンコーンは今日即ち紀元千八百六十三年一月一日に於て(中略)次のことを命令し、又公告すべし。即ち前記各州及び州の一部の中に奴隸として保持せられ居る人々は、すべて自由民にして又將來も自由民たるべし。而して、北米合衆國の政府(陸海軍の主治權をも含みて)はこれ等の人々の自由を認めてこれを支持すべし。

六二 お前の生きて居る間は

子煩悩のフレデリック大王が、或る日、書きものをして居られると、一ばん年長の甥の王子の弄んで居た毬が、あやまつて王の卓上に落ちた。王は黙つてそれを床の上にころがして、書きものをつづけて居られた。

すると間もなく、また其の毬が卓上に落ちた。王は一寸王子の方を眺めた。王子は、

「今度は氣をつけます。」

と詫びだ。王は直にそれを投げてやり、また書きものを續けて居られた。

然るにどうしたはづみにか、また毬が卓上に落ちた。王は不愉快な顔をして、其の毬をポケットの中に入れてしまはれた。王子が何と言つても、更に聞き入れられる様子もなかつた。すると、王子は王の前に進み出で、

「伯父さま、あなたは其の毬を返して下さいますか、下さいませんか。」

と凜とした聲で詰問した。王は笑つて、

「ほう、きつい奴だ。お前が生きて居る間は、シレージャが奪ひ返へされる心配はない。」
と言ひながら、快よく其の毬を出して興へられた。

六三 僕はナポレオンより偉い

英國の片田舎の農夫が、ある日、野原を駆け廻つて居る一組の遊獵者を認めて、其の少年に向ひ、

「おい、お前早く行つて畑の入口の戸をしめて番をしろ。芽を出したばかりの麥を踏み荒されてしまふから……」

と言ひけた。少年は、走つて行つて、其の戸をしめた。

間もなく遊獵者の一行はやつて来て、立番をして居る少年に、

「戸をあけてくれ、早く、早く、」

と言つたが、少年は主人の命令だから明けられないと言ひ張つた。其の中の一人は、一掴の金貨を出して、

「これを遣るから通して呉れ。おれはウエリントンだ。」

と言つた。ウエリントンとは、ウオーターローの大戦で、ナポレオンを敗つた名將で、當時英國では、其の名を知らぬものさへなかつた。少年は恭しく帽子をとつて敬禮し、

「私は公爵閣下に最大の敬意を表します。しかし、主人の命令に背くことは出来ません。」

と言つた。従者は、此の少年の無禮に腹を立てたが、公爵は静かにそれを制し、

「お前は誠に感心な少年だ。私の軍隊がお前のやうな兵士のみであつたら、世界中に恐れるものはない。」

と言つて、其の少年に一個の金貨を與へ、もと来た道へ轡を返した。

これを見送つた少年は、飛ぶが如く家に歸つて、

「僕はナポレオンよりも偉い。ウエリントン公を撃退した。」

と笑ひながら、其の金貨を主人に見せた。

六四小話 五篇

その一

七年戦争の時に、獨逸の一士官が一隊の兵士を引きつけて馬糧の徴發に出かけ、或る淋しい山間の村へ來た。そこには、たゞ一軒の水車小屋があるのみで、外に家といふものはなかつた。

士官は、馬から降りて戸をたたくと、中から髪の毛のまつ白な老人が出て來た。士官は馴々しく、「爺さん、此の近所に大麥畑はないかね、あるなら教へておくれよ。」と言つて、軍隊から馬糧徴發に派遣せられたことを話した。

「よろしい。」

と老人は直に快諾したのみならず、自分から其の畑まで案内すると申出た。

士官は、大に喜んで、老人のあとからついて行つた。十五分も歩くと、廣い麥畑の傍へ出た。

麥は美しい穂を垂れて居る。士官は、馬上から聲をかけて、

「爺さん。どうもありがとう。」

と云ふと、老人は首をふつて、

「もう少し辛抱して下さい。」

といつて、すすん先へ進んでゆく。士官も外の兵士も其のあとからついてゆくと、やがてまた外の麥畑についた。

「さあ、どうぞ自由に蒔りつつして下さい。」

と老人は其の麥畑の前に立ち止まつて言ふ。

士官は、兵卒に命じて、其の麥を蒔りとらせ、馬に積んでから、

「爺さん。お前さんは、なせ僕等に茲までむだ足を運ばせたのだ。さつきの麥畑の方がよかつたではないか。」

と詰ると、老人は答へた。

「ご尤もでございます。しかし、あの麥畑は、私のものではございませんぬ。」

その二

宋の國に樂喜といふ人があつた。司城となつて居た時に、玉を献上した者があつたが、喜はこれを受けなかつた。其の者は重ねて、

「どうか是非受取つて下さい。此の玉は世にも珍らしい寶です。」

と云ふと、喜は答へた。

「お前は玉を以て寶だと云ふが、おれは物を食らぬことを以て寶だと思つて居る。お前の寶は、人に與へてしまへばなくなつてしまふが、おれの寶は、中々なくならない。」

その三

元の許衡といふ人が、多くの人々と共に、暑い時に河南といふ所を通つた。道の傍の大きな梨の樹に、枝も撓む程實が澤山について居た。渴して居た人たちは、争つてこれを食べたが、衡はたゞ一人樹の下に腰かけて、手も觸れなかつた。他の者がこれを怪しんで、

「君はなぜ食べないのか。」



と問ふと、衡は、

「自分のものでない物を取ることは出来ない。」
と言つた。

「だつて君それには持主がないのだ。今は世の中が亂れて、人はみなあちらこちらへ散つてしまつたから……」

と他の者が再び云ふと、衡は、

「梨には持主がなくとも、我が心には主がある。」
と答へた。

衡は常に金でも食物でもあれば、みなこれを食する者に分けて與へたので、いつも貧しく暮して居た。

その四

紀の夏井が讚岐守となつて、其の地に渡つた時に、よく民を愛はれんで善政を施したので、多くの者はみな夏井の徳になつた。

其の中に任期が満ちて歸らうとすると、多くの百姓が役所へ押しかけて来て止めたので、ふりすてゝ去るにも忍びず、また二年ばかりも其の地に止まつて居た。其の間に民はみな富み、貧しい者は一人もなくなつた。

いつまでも留まることは出来ないから、夏井はいよいよ別れを告げて任地を去ることにした。名残を惜んだ吏民は、夏井に種々の贈物をしたが、夏井は一つもそれを受けずに、もとのまゝで都へ歸つて來た。

その五

あはれな貧しいメンラートが、山羊の番をして居ると、森の中から一人の盗人が出て来て、「お前はほんとに氣の毒なものだ。此の寒いのに跣足で居るとはさぞ辛いことだらう。おれの所へ來て仕事の手傳ひをしてくれないか。給金も澤山やるし、新しい靴も買つてやるが」と言葉巧みに誘惑した。メンラートは頭をふつて言つた。

「お志はありがたいが、私は貧しい暮しをして居ても、心にやましいことのない方がよろしうございますから、どうぞおかまひ下さいますな。」

六五 二宮尊徳

二宮尊徳先生は、幼名を金次郎と言つた。天明七年相模國足柄郡栢山に生れた。幼時酒匂川の大洪水のために、田畑は大方積となつてしまつて、一家は貧苦の底に陥つた。剩へ十四歳の時には父を失ひ、十六歳の時には母に別れ、幼き二人の弟と共に、あはれな孤兒として、此の世に取りのこされ、一家は遂に歿落してしまつた。此の悲境にあつて、あくまでも堅忍不拔の志を持ち、遂に後世に其の名を謳はれる程の仕事を成し遂げた先生の生涯は、まことに美しい立志傳であり、且つ涙の物語である。

金次郎は小さい時から記憶力の強い子どもであつた。まだ母の生きて居られる十四歳の時に、回國僧が觀音經を讀んで居るのをきき、二百文を布施してこれを反復せしめ、悉くこれを記憶したことがある。日夜忙しい家業の傍ら、専ら讀書に耽り。薪を負うて山へ往復する間にも、大聲をあげて讀書しながら歩いたので、多くの村人は彼を奇人とし、遂には狂人とし、キ印の金と呼んだ。

母の死後三人の兄弟は別々に親類の家へあづけられることになった。金次郎は伯父の萬兵衛に引きとられた。萬兵衛は慾の深い男であつた。金次郎は、伯父からいつも酷薄な待遇を受けしたが、少しも苦痛には思はなかつた。萬兵衛は金次郎が毎夜書を読むのを厭ひ、

「百姓の子が本を読んで何にするのだ。本をよめば油がいるからやめよ。」

と言つた。金次郎は、其の意に従つてしばらく中止して居たが、學問を好む心はむらむらと燃えあがつた。そこで、彼は村の川堤の空地に油菜を植ゑ、其の實を油に代へて再び讀書を



はげんだ。萬兵衛はまた、
「たとへ油を自分から求めて來たからとて、書を読むために夜業を思ふのは不都合だ。」

と小言を云つたので、金次郎は毎夜おそくまで繩を縛ひ蕪を織り、夜深けてから、行燈に衣物を掩ひ、曉に至るまで讀書した。その時に金次郎は十七歳であつた。

金次郎は萬兵衛の家にある時、洪水の爲めに荒れ果てた土地を開墾し、人の捨てた苗を拾つて植ゑて置いたが、秋になつて一俵餘の收穫があつたので、年々それを増殖し、遂に九畝あまりの田地を買ひ戻し、二十歳の時に歿した家を再興し、弟を引き取つて親切にその世話をした。三男の富次郎は三四年の後に病氣で死んだ。

若年の金次郎が悲境の中にあつて、家を再興したことを、多くの人は感心して、それからそれへと語り傳へたので、金次郎の評判は近村にまでも聞えた。時に、小田原の家老服部家に於ては、負債のために一家がまさに滅亡の淵に沈まうとして居たので、金次郎を擧げて、家産の整理を託した。金次郎は、まだこれから大に一家を興隆させやうと企て、居た時であるから、再三辭したけれども、服部家の方から強ひて懇望したので、遂にこれを承諾した。時に、金次郎は、二十四歳であつた。

金次郎は、服部家に着いて、家中の事情を細かに調査し、五年を期して、家運を挽回しやうとした。彼は先づ一箇年の豫定を立て、入るを計つて出づる制する方針を以て、主人から婢僕に至るまで、すべて儉約を實行せしめた。ある時には、若黨の代りをして主人の伴をし、ある

時には、自ら洒掃薪水の監督までもした。朝は早く起き、夜はおそく寝ね、我れを忘れて家産の恢復に力を盡したので、豫期よりも早く成功し、四年の後には、千三百兩の負債を悉く濟し、外に三百兩を餘すに至つた。服部家では喜んで、其の中の百兩を謝禮として、金次郎に與へようとしたけれども、彼は一物をも受けず、飄然として栢山村の自宅へ歸つて來た。

栢山村へ歸つた金次郎は、其の日から鋤を取つて田畑の耕作をはじめた。それから、一日も怠らず家業を勵んだが、其の間にも、彼は、學問と慈善とを忘れなかつた。時々村の青年などを集めては道を講じた。又あはれな者があると、常にこれを慰めたり助けたりした。家産は次第に増加して、十年の間に二十倍になり、九畝あまりの田畑は、一町八段歩ほどになつた。金次郎の徳望は日毎に高くなつた。

文政五年、三十五歳の時、小田原侯の懇望によつて、野州櫻町の興復に着手することになつた。これは金次郎の一代に於ける必死の大事業であつた。金次郎は、一と先づ櫻町の實地視察をしてから、其の興復策を立てた。愈々着手する前に、金次郎は妻を呼び、

「今度君命によりて此の大事業に一身を捧げることになつたが、お前は自分と共に此の艱難に

堪へ得るならばよし、さもなければ今日から我が家を去つて貰ひたい。」

と申し渡した。妻は如何なる艱難をも共にすることを誓つたので、金次郎は、田地を賣り拂ひ、一家を擧げて櫻町に移住した。

櫻町の住民には、遊惰に流れて、勞働を嫌ふ無頼の徒が多かつた。

金次郎は、情けを以て彼等を導き、自ら精出して働らくやうに仕向けたいと思つて、様々に心を碎いたが、容易に風儀を改めることは出来なかつた。役人の中にも金次郎を嫉んで、彼の命令を一々罵倒嘲笑し、無頼の徒を煽動して、彼に反抗せしむる者もあつた。それが爲めに、金次郎は、非常なる苦境に陥り、時には生命の危険を感じることもあつた。然し、彼は少しも屈することなく、あくまでも一身を其の事業に捧げた。その至誠が天に通じたのであらう。十年の歲月を経る間に、無頼の徒は、盡く金次郎の感化によつて、眞面目な良民となり、金次郎の仕事が妨害した役人も改悟して、忠實な彼の弟子となつた。かくて荒れはてた櫻町には、再び花咲く春がめぐつて來た。

櫻町の復興に成功してから、二宮の名は益々世間に聞え、各地方の藩主や領主から依頼を受

け、疲弊した土地を恢復せしめ、其の領民を救済したことは、殆ど枚擧に遑もない程多かつた。又個人の中にも、彼の感化によつて、善良な人間となつた者が尠なくなつた。その門に集まつて教を受ける者は、年々に増加した。天保十一年、五十四歳の時には、塾生のみでも百人を下らぬやうになつた。

五十六歳の時には、水野越前守から沙汰があつて、幕府に登庸せられた。嘉永六年には、幕府の命によつて、日光神領野州八十九箇村の仕法に着手し、大谷川の水を引いて大小の溝渠を通じ、水田をつくり、荒地を開き、民の利をはかると共に、民を教化した。此の頃から病を得て、遂に安政三年七十歳を以て永眠した。生前の功德に依り、明治二十四年に従四位を贈賜せられ、更に明治三十年には、同志の者が謀つて報徳二宮神社を建てた。その教へは報徳教と言つて、今日でも尙ほ多くの人々に尊崇せられて居る。

二宮尊徳の歌

天つ日の恵み積みおく無盡藏 鋤で掘り出せ鎌でかりとれ
飯と汁木綿着物は身を助く その餘はわれを攻むるなりけり

くよくよと重いつゞらの中よりも とんだお化の出るはおそろし
まきうえて時に耕しくさきりて 實のりまつ身ぞたのしかりける
丹誠は誰れ知らねどもおのづから 秋の實のりまさる數々

六六 法を犯して法を教ふ

彦根の藩士木俣氏が、ある時、主命を受けて、儉約の令を衆に示し、今後衣服はすべて木綿に定め、絹物は一切これを禁ずる旨申し渡し、且つこれを着用する者は、假令晴れの場でも剝ぐと云ふことを傳へた。然るに、其の後、重陽の節會に、木俣氏は綸子の服を着て登城した。係の人々は、互に囁き合つて、木俣氏に向ひ、

「絹物着用の御禁示は如何めされた。直におぬぎ替へ下さい。」
と申した。木俣氏は大に驚いた様子を見せて言つた。

「これは粗忽なことをいたしました、全く忘却して居て、何とも申しわけはない、御法通り直に此の場で剝ぎ取つて貰ひたい。」

六七 面白い知慧くらべ

遠江國頭陀寺の城主松下嘉兵衛の召使に、一人を猿と云ひ、一人を丑と云ふ、二人の少年があつた。どちらも劣らぬ伶俐者であつた。主人の嘉兵衛は、或る日、二人を呼んで、笑ひながら、「お前たちは、二人とも大さう伶俐だが、武士の持つて居る刀の小柄を、うまく取つて來ることが出来るか。」

と尋ねた。刀は武士が最も大切にして居るものである。其の刀の鞘と鑢との間にさしてある小柄を取つて來るとは容易でないが、猿と丑とは即座に、

「よろしうございます。」

「承知いたしました。」

と引受けた。嘉兵衛は、

「それでは、二日間の猶豫を與へるから、猿は大須賀彈正を取つて來い。丑は山本太左衛門を取つて來い。」

と命じた。大須賀彈正は早業の名人であり、山本太左衛門は十人力を持つて居る豪傑であつた。丑は心の中で、

「猿の猿智慧などに負けるものか。此の勝負はおれの勝にきまつて居る。」

と考へた。夕方になると、丑は、

「お殿様、今日はこれでお暇をいただきます。小柄のとり方を考へなければなりませんから……」
といつともより早く歸つた。嘉兵衛はあとに残つた猿に、

「お前も早く歸つて用意してはどうだ。」

と云ふと、猿は

「い、え、お勤をかゝしては御奉公がつとまりません。」

と答へて、いつもやうに、十時頃までまめまめしく働らいて居た。其の夜は、雨がしとしとと降つて居た。翌朝早く嘉兵衛が起きて見ると、猿はいつものやうに御殿へ出て居た。

「お殿さまお早うございます。小柄はたしかに戴いて參りました。」

と懐から取出したのを見ると、それは彈正の物に相違なかつた。所へ丑も出て來て、

「お殿さまお早うございます。小柄はたしかに取つて參りました。」

と云つて出したのを見ると、それには山本の定紋がちやんとついて居た。嘉兵衛は、
 「さてさてお前たちは伶俐者である。どうしてそんなに早く小柄を手に入れたか、話して見よ。」

と云ふと、丑は得意になつて、

「お殿様、私は昨日山本さまのお邸へ上りまして、旦那さまにお目にかゝり、今晚旦那さまの大切な品を取つてお目にかけますと申しますと、お前は面白いことを云ふ。うまくとつたら褒美をやらうと仰つしやいました。」

「それからどうした。」

「一度部屋へ歸りまして、十二時頃笠をかぶり、山本さまのお屋敷に出かけ、椽側の方へ廻り、戸の隙から中をのぞいて見ますと、山本さまは床の中で眼をあいて、雨がばらばらと私の笠にあたるのを、じつときいてゐらつしやる御様子でした。そこで、私は笠をぬいで、側の木にかけいつまでも雨がばらばらと笠の上に當つて居るやうにしておきますと、山本さまは安心して、うとうとおやすみになりましたから、そつと忍び込んで此の小柄をぬいて來ました。」
 「うまく考へたな。お前は中々の知慧者だ。猿はどうして取つたか。」

と嘉兵衛がたづねると、猿は、

「私には盗む知慧はございませんから、昨日彈正さまにお目にかゝつて仔細を話し、小柄を一本頂戴して參りました。」

と答へた。嘉兵衛は、猿の答へをきいて、

「それは感心だ。二人とも武士の小柄を取つて來たのはえらいが、此の智慧くらべは猿の方が勝たと云つたので、丑は不平らしく、

「貰つて來たのがなせ勝ですか。貰ふなら智慧も何もいらぬではありませんか。」

と云ふと、嘉兵衛は、靜に、

「いやさうでない。其の誰にでも出来る所に氣のつくのがえらいのだ。いつもの通りにおそくまで勤め、嘘もつかず、盗賊の真似もせず、小柄を手に入れるのが知慧のすぐれた所だ。」
 と云つてきかせた。この猿が後の關白豊臣秀吉で、丑が後の盜賊石川五右衛門である。

六八 吉田松陰

「身はたとひ武藏の野べに朽ちぬとも、止めおかまし大和魂。」
 の一首を辭世として、小塚が原の露と消えた勤王の士吉田松陰には、一人の兄と三人の妹があつたが、松陰は骨肉に對する情愛が最も深く、常に兄を思ひ妹をいたはつた。

安政元年、幕府のために囚へられて、長門の野山の獄に下された時に、獄中から兄の許に、
 「朝日さす軒端の雪も消えにけり、わがふる郷の梅やさくらむ。」

と云ふ歌をよせ、年頭の賀詞に添へて、幼時のことなどを述べ、妹には、よく夫に敬事し、舅姑に孝養を致すべきことを諭した。

兄や妹も亦常に松陰を愛し、囚はれの身となつて居る間にも、心をつくして種々のさし入れものなどをした。松陰はかつて妹に書をおくつて、

「そもじや父上さまや兄さまのおかげにて、着物もあたゝかに、たべ物もゆたかに、あまつさへ筆紙書物まで何一つ不足これなく、寒さにもまけ申さず候間、ご安心なさるべく云々」

と述べてその親切を謝した。

六九 或る夜の藤綱

北條時頼の臣青砥藤綱は、常に儉約を重んじ、質素な生活をして居た。外へ出る時にも、外の武士のやうに澤山の供を連れず、多くは一人の召使に木刀をもたせて歩いた。

ある夜のことであつた。藤綱は外から歸つて来る途中、滑川の橋の上から、どうしたはずみにか、十錢ばかりの金をあやまつて水の中に落した。藤綱は直に従者に命じて、五十錢の炬を買はせ、それに火を點じて水を照らし、落した錢を拾はせた。幸にして錢は見つかった。藤綱はよろこんで家に歸つた。ある人がそれをきいて、藤綱に、

「君は何といふものすきな男だ。十錢の錢を落して、五十錢の炬を買つては、落した金を探し出して拾つたところで、まだ損をして居るではないか。」

と云つて嘲けると、藤綱は云つた。

「十錢と云ふ金は少ないけれども、これを失つてしまへば、それだけ天下の寶を損すること

になる。炬を買った五十銭の金は、自分が損をしても、人が益をして居る。五十銭を費して十銭を拾つても、世の中のためには少なからぬ利益だ。國を治める身分の者は、己れのことばかり考へないで、弘く世間のことを思はねばならぬ。」

藤綱の云ふことをきいて、多くの人はみな感心した。
ある時に地所の争ひを起した者があつた。其の相手の者が北條氏に關係して居たので、多くの者は、時頼を憚つて、道理になつて居たが、訴へて出た者を敗に歸せしめた。藤綱は、これをきいて、直に其の事情を調査し、正しい裁判をして、前の判決を取消した。訴訟を起した者は、大に喜び、錢三百貫を謝禮として藤綱の許に持つて來た。藤綱は大に怒つてこれを返した。藤綱の公明正大な行によつて、悪い役人は次第にあとを潜め、一時天下の風俗が大に改まった。北條時頼の善政を思ふ者には、いつも藤綱の名が思ひ起される。

七〇 ワットの苦心

蒸氣機關を發明した文明の大恩人ジェームス・ワットは、今から百七十餘年前に、英國の小都會に生れた。家は極めて貧しかつた。生活の道を立てるため、十八歳の時、ロンドンに來て、ある時計屋に奉公し、其の技術を研究してから、グラスゴーで時計製造を開業したが、當時



の利益は甚だ尠なく、一週間に得る所が僅に二ポンドに過ぎなかつた。

ワットが蒸氣機關の發明に志したのは其の頃である。ワットは、生れながらに發明の才を備へて居た。六歳の頃から既に機械に興味を抱き、十五歳の時には電、氣機械を作つて人々を驚かしたことがあつた。彼は幼少の時に鐵瓶の蓋が湯氣の力で吹き上げられるのを見て、蒸氣機關の發明に志を抱いたが、生活の道を立てる爲めに、東西に奔走して居たので、今まではそれに着手することが出来なかつた。ワットが此の大事業に着手した時にも、蒸氣機關に類する

ものはあつたが、其の構造が甚だ不完全であつた。

ワットは、蒸氣機關の研究に寢食を忘れた。其の雛形をつくるために、一つの古い鍛冶工場を借り、一人の助手を雇つて、孜孜として製作に従事した。かくして出来上つた機關は、まだ不完全な所が多く、蒸氣が漏れて實用上の役には立たなかつた。

彼はもと貧しい時計屋である。多くの資金を有する者ではなかつた。此の失敗と共に、山の如き負債を生じ、再び此の事業を繼續することも出来なかつた。彼は、日々各地の富豪を説き勸めて歩いたが、最初の失敗に懲りて、彼を援助する者もなかつた。ワットは、此の事業のため、殆ど家産を傾け盡したので、時計屋も廢業せねばならぬこととなり、今は一錢の収入もなく、家族の衣食にも窮するに至つた。さすがのワットも、此の時には、「世に發明家ほど愚かな者はない。」と云つて嘆息した。

されど天はまだ此の大發明家を見捨てなかつた。幸に一人の義侠心ある資本家が現はれた。ワットは、再び元氣を恢復して、前の研究を繼續した。六箇月の後出来上つたものを試験して見ると、また蒸氣が漏れて用をなさなかつた。もう此の上は施す術もつきはてた。されど、ワットはまだ其の志をすてなかつた。しばらく測量所に職を求めて一家を支へ、徐ろに時機の到来

するのを待つて居た。斯かる失意の中に彼の愛妻は、幼兒をのこして世を去つた。

恰も此の時にバーミンガム市の時計商ポルトンと云へる人が、ワットの志に感じ、彼を援助して、其の事業を大成せしめようとした。ワットは、三たびまた蒸氣機關の研究に没頭し、ポルトンの大工場で製造を開始した。然るに、今回は前に比して頗る良好な成績を得た。ワットの喜びは如何ばかりであつたらう。彼は勇氣百倍して奮勵し、遂に完全なる蒸氣機關を作り出した。ワット式蒸氣機關の名が、國の内外に傳播すると共に、人々は舉つて彼を賞讃した。露國の政府は、年俸一千ポンドを以て彼を招聘せんとしたが、ポルトンの恩義を感じた彼は、斷然それを辭し、専心天職のためにつくした。

七一曲亭馬琴

徳川時代に四百餘種の物語を書いた有名な曲亭馬琴といふ小説家は、今から百五十年前に江戸で生れた。父は武士であつたが、零落して貧しい暮しをして居た。九歳の時父を亡つてから、母は、馬琴の外に、一人の兄と二人の妹とを抱いて残つた。貧乏は益々甚だしくなつた。

母は多くの子どもを養ふことが出来ないで、馬琴をある人の家へ奉公に出した。けれども、間もなく逃げて歸つて來た。母は叱つたり訓へたりして、再び他の家にやつたが、其處もまた逃げ出した。



その頃から馬琴はいろいろな書物を讀んだ、記憶力が頗る強く、讀んだ書物はみなよく讀記して居た。馬琴は、人の家に奉公をして居ても、將來の見込がないから、醫者になりたいと考へて、そのことを母に告げると、母は喜んで、小川町のさる御殿醫のもとへ塾生にやつた。

馬琴は醫者の書生になつて、藥のことなどを學んで居たが、どうも面白くない。いつそのこと僧侶にならうかと思つて、擅那寺の和尚にそのことを相談したが、和尚から懇々と誠められて思ひ止り、又俳諧師にならうと思つて、醫書を讀む暇に俳書をしきりに讀んだ。醫者はたびたび忠告したが、馬琴は中々きかない。遂に醫者の家をも出てしまつた。

それから伯母の家や兄の家に居たが、二十四歳の時に、初めて「壬生狂言」と云ふ小説を書

いて、京橋銀座の京傳を訪ねてこれを見せた。京傳は、當時小説家として名高い人であつた。京傳は、馬琴の處女作たる「壬生狂言」を見て、つくづく感心し、「これはよく出來て居る。もう二三十年たつたら、とても京傳はお前さんに及ぶまい。」と云つた。

馬琴は京傳の紹介で、芝の和泉屋といふ本屋からそれを出版したが、世間からは少しも認められず、僅かに四百冊位しか賣れなかつたので、一時はすっかり失望してしまひ、もう小説を書くことを止めようかと思つたが、また思ひ返して、せい出して書いた。

馬琴は、二十七歳の時に結婚した。それから三人の兒が續いて生れるやら、妻の母がなくなるやら、不幸なことが相次いで起つたが、生計の苦しさをよく辛抱して、毎年五六種の本を書いた。けれども、あまり評判のよい作もなかつた。外の小説家は何れも若い中から名高くなつたが、馬琴はいつまでも世間から認められなかつた。

四十歳になつてから、弓張月といふ大作を出した。此の作が出てから、世間でははじめて馬琴の才に驚ろいた。多くの小説家は、世間から忘れられることも早かつたが、馬琴は、年毎に其の實力を發揮し、遂には、八犬傳と云ふ我が文學史上に不朽の盛名を垂れた大作を遺し

た。馬琴が此の物語を書き初めてから、これを完成するまでには、二十八年もかゝつた。其の間の苦心は、一と通りでなかつた。あまり一心に書いたので、晩年には盲になつてしまつた。それで、死んだ息子の嫁に代筆をさせ、自分の云ふ通りに書かせたが、その女は、文字をよく知らないために、一方ならぬ勞力を費やしたといふことである。

馬琴が眼病にかゝつてから、八犬傳を綴るに、どれだけ苦んだかと云ふことは、彼の日記によくあらはれて居る。

馬琴の日記 (其の一節)

天保八年三月十五日 去冬十一月轉宅以來お路殊に立ち働らき、實に寸暇なし。彼無くばあるべからず、

二郎は動あり、あれどもなきが如し。

天保九年五月五日 晝後 お路に月代をそらせ、其の後諸神家廟等拜禮し畢。

天保九年九月晦日 予滯食且つ時候あたりにて、水瀉兩三度且つしぶり且つ腹痛す。黒丸子服用、今夜四時就枕、

お路は九時過迄夜なべ縫刺いたし、九半時就枕、八時半予圃へゆく、お路出て燈をこる。

七二 はるばるご母を慕ひて

「藤太郎や。」

ある日、お祖父さまは、庭に遊んでゐる少年を呼んで、

「お前のお母さまから手紙が來た。讀んであげるから聞いてお出で。」
と言ひながら、一通の手紙を讀み上げた。

「おひおひ寒さに相向ひ候ところ、皆さまには、ご機嫌美はしくゐらせられ候や、お伺ひ申し上げまゐらせ候。おかげさまにて藤太郎も、學問武藝日に増し上達のことと、陰ながら樂しみ居り候。若しご教訓に従ひ申さずば、きびしき御折檻お加へ下され度、學ならずして、藤太郎が中途にて歸り來るやうのこと有之候ても、母は決して逢ひ申さず候へば、その儀藤太郎へよくお傳への上、女々しき振舞ありて、武士の名を汚すことのなきやう、一重にお願ひ申し上げまゐらせ候。藤太郎の父亡くなりてより、さびしきわび住ひに、たゞたゞ案ずるは藤太郎の行末にて、父祖に恥かしからぬやう、名をあげ、身を立てるやう、ひたすら祈りあげ

まゐらせ候。下つて、私こと何ごともなく日を暮し居り候へば、ご安心下され度、たゞ寒さに向ひ候こととて、馴れぬ水仕事に、先頃より輝とか申すもの、手にも足にも出来て、霜の朝、風の夕にはいたく身にしみ候。されど……」

疊に両手をついて聞いて居た藤太郎は、涙をはらはらと流して、

「お祖父さま、どうか私をかへして下さい。お母さまのお手傳がいたしたうございますから……と願つたが、お祖父さまは、嚴かに、

「お前はなせ其のやうに女々しいことを云ふ。お前が立身するまでは決して歸つて來るでない」と、お母さまの手紙にもあつたではないか。」

と言つて懇々と諭された。

けれども、藤太郎は、母に逢ひたくてたまらなかつた。下男や下女にきいて見ると、新谷といふところの中田長閑齋といふ人が、輝の妙藥を持つて居られるとのこと、ある日、彼は大洲から新谷まで六里の道を歩いて、中田長閑齋の邸をたづねた。長閑齋は切支丹宗門の信者で、丁度その時にお上から嚴しい證議を受け、邸の外を多くの武士に圍まれて居たが、都合よく面會する事が出来た。仔細をきいて、長閑齋は、孝子の心を深くあはれみ、秘藏の妙藥を與へた。藤

太郎は喜んでその場を立ち去つた。

藥を手に入れた藤太郎は、あぐれ母に逢ひたいとのみ思つて居たが、お祖父さまは、どうしても許してくれないから、遂に覺悟をきめて、ある夜、ひそかに家を抜け出でた。母の住み給へるは、江州の高島郡小川村、藤太郎は母を思ふ一念から、はるばると馴れぬ旅路に出た。

もとより携へる金もないので、夜になつて泊る所もない、疲れた足をとぼとぼと歩みつゞけた。路傍の石に腰かけて居睡つて居るのを、情け深い人に助けられたこともあつた。

松山から今治の港に出で、そこから船に乗つて兵庫につき、日數を重ねて、なつかしき小川村についた時に、夜はほのぼのと明け離れて居た。わが家の門をくゞれば、井戸端に水を汲む音が聞える。見ればそれは母上である。藤太郎は我を忘れて駆け寄り、

「お母さま、藤太郎が歸つて参りました。」

と言つて、あとは涙にむせんだ。母はびつくりして、

「お前は今ごろ何のために歸つて來たのです。」

と藤太郎の姿をじつと見る。

「お母さまが輝で難儀をして居らつしやると承はりましたから、藥をもつて來ました。」

ときいて、母の胸は熱い涙で一ぱいになつたが、わざと心をしづめ、

「學問の途中で歸つても、お母様は決して逢つてあげないと言つたことをもう忘れませんでしたか。」と厳しく言ひ、

「おぢいさまには何と申し上げて歸つて來ましたか。」と問ふ。

「黙つて歸つて來ました。」

と藤太郎はつゝ、まず打ち明けた。

「あれほど言つて置いたのに、何と云ふ意氣地のないことです。直に大洲へおかへりなさい。」

「ハイ……」

と藤太郎はすゝりなきして、

「お言葉に従つて、私はかへりませんが、これだけはとつて下さい。」

と長閑齋から貰ひ受けた輝の妙藥を出した。母はこれを受けとつて、家の中に入り、いくらかの金を藤太郎に渡し、

「これを旅費にして直にお歸り！」

と云ふ。藤太郎はこれをおし頂いて、母に別れを告げた。うしろ姿を見送つて、母ははふり落つる涙を拂つた。

七三 一人の武士に二百石

藤堂和泉守高虎は、よく其の臣を愛した名將である。若し暇を乞ふ者があれば、これを一室の中に招いて、茶をすゝめたり、佩刀を與へたりして、いとも懇ろに、

「若し往く先で思はしからぬことが生じたら、又わが許に戻つて來るがよからう。」

と言つたので、臣下の者はみな主人の情けに感じ、一度其の家を去つても、また戻つて來て、舊に倍する忠勤をばげむ者が多かつた。

或る時に、高虎は、渡邊勘兵衛と云ふ武士を、二萬石の高祿で召し抱へた。これを聞いて加藤左馬助嘉明が、

「和泉は愚かなことをする男だ。一人に二萬石を與へるなら、二百石とる侍を百人抱へた方がよい。勘兵衛が如何に豪の者とは言へ、百人の侍には敵することは出來まい。」

と言つた。これを高虎があとで聞いて、
 「さてさて左馬にも似合はぬことを云ふ。平士の二百や三百で堅めた所は、踏み破つても通
 られるが、渡邊勘兵衛一人が控へて居れば、それだけでも敵は肝をつぶして仕舞ふ。」
 と人に語つた。

七四 張良と韓信

漢の英傑と呼ばれた張良が、まだ若い時のことである。一日、橋の上に遊んで居ると、一人
 の老人が其處を通りかゝつたが、張良の居る前まで来ると、履をわざと橋の下に落し、
 「おい小僧、履を取つて来てくれ、」
 と横柄に言ひかけた。良はむつとして、
 「何っ！」

と言ひながら、手をあげて打たうとしたが、老人であるからと思つて忍び、橋の下に降り、履を
 拾つて来て跪いて、これを老人にすゝめると、彼は足でこれを受け取つて、笑ひながら其の場

を去つたが、少し行つてから、歸つて来て、良をかへりみ、

「お前に教へてやることがあるから、今日から數へて五日目の朝、此處へ来て待つて居れ。」
 と言つた。良は怪しみながら承諾した。

五日目の朝、約束の通りに橋の所まで来て見ると、老人はもう先に來て居た。良を見ると怒
 つて、

「老人と約束しておきながら、おくれて來るとは何事だ。今日は教へてやることは出來ない、
 もう五日過ぎてから來い。」

と言つた。良はまた五日目の朝、今度は前よりも少し早く起きて出かけたが、老人はもう先に
 來て居て、良を見ると又大に怒り、次の五日目に來いと云ひながら立ち去つた。

また五日ほど過ぎた。どうかして老人より早く出てやらうと決心し、夜中ごろから起きて出
 かけた。果して今度は老人より先であつた。しばらくして其の老人は來た。良を見ると、大に
 喜んで、

「今まではお前の心を試して見たのだ。今日こそはお前に傳授すべきものがある。」
 と言ひながら、一卷の書を出し、

「これを熱心に讀むがよい。さうすれば、お前は、他日必ず王者の師となるであらう。」
と言つて、其のまゝ立ち去つた。

良は老人から受取つた書を披見すると、それは容易に得難い兵法の書であつた。これを毎日
讀んで、良は遂に漢の名將となつた。

張良と並び稱せられた韓信は、淮陰の人であつた。少年の頃大きな刀を帯びて、淮陰の市中
を歩くと、多くの子どもが集まつて彼を嘲り、

「お前は大きな身體をして、刀などを持つて居るが、きつと憶病者に相違ない。お前に勇氣が
あるなら、其の刀を抜いて斬つて見ろ、斬ることが出来なければ、おれたちの股をくゞれ。」
と言ふ。信は、黙つて子ども等の顔をじつと眺めて居たが、やがて腹匈になつてその子どもの股
をくゞつた。

子どもはみな信の憶病を笑つた。

七五 人知れぬ苦心

その一

丸山應舉が、ある時馬の草を喰うて居る繪をかいた。すると、それを見た老人が、
「此の馬は盲だ。」

と言つた。應舉がそのわけをたづねると、

「馬が草を食ふ時には、兩眼を閉ぢるのが常である。眼を明いて居ると、草で眼を傷けること
があるのを怖れるからだ。然るに、此の馬は鼻づらを草むらの中へ入れながら、眼を明いて
居る所を見れば、明盲に相違ない。」

と言つたので、應舉は、なるほどと思つて、直に其の繪を書き直した。

その二

享保の頃、能狂言の名人として聞えた観世太夫が、ある時に「木賊刈」を舞った。満場は湧くがごとくに喝采し、流石に一代の名人だと言つて、彼の妙技を賞めた。然るに、此の時片隅の方で見物して居た十人ばかりの田舎ものらしい男が、ひそひそと囁いて笑つて居た。観世太夫は、早くもこれを見咎め、木戸番に頼んで彼等の歸りを止め、

「最前、拙者の舞についてお笑ひなされたが、何かお氣づきのことでもございますか。」と鄭重にたづねて見た。その男たちは、

「私どもは信州の百姓であります、今日の舞の中の木賊を刈る時の手ぶりが、おかしいと思つて、仲間の者と話したのです。」

と臆する所もなく申し述べた。観世太夫は、更に、

「どう云ふ所がおかしいのですか。」とたづねた。

「鎌の持ちやうが違つて居ります。又今日の舞では、同じ所を前の方へ二刀で刈られたが、向ふへ一刀切に刈らねば、木賊は刈れるものではありません。」

と言つた。観世太夫は、これをきいて、



「さてさてよいことをお聞かせ下された。」と厚く禮を述べて、其の百姓を歸した。

七六 新井白石

徳川時代に博學多才を以て聞えた新井白石は、明暦三年江戸に生れた。父も母もしつかりした人であつたが、家が貧乏で、十七歳の時まで、學問をすることも出来なかつた。十七歳になつてから、漸く學問に志したが、先生について學ぶことは出来なかつた。讀みたいと思ふ本は人に借り、大切なところは寫しておいて、人が一度やることは十度やり、人が十度やることは百度やるといふやうにした。冬の寒い夜などは、縁側に水を汲んでおいて、眠くなれば、それを頭からかぶつて勉強した。其の苦學のさまは想像以上であつた。

白石は斯かる不運な身の上であつたが、熱心に勉強したので、學問は次第に進んだ。いつも

赤貧洗ふが如き中にあつて、彼は少しも志を曲げなかつた。ある時、醫者になると金儲けになるから、是非醫者になれと奨めた人があつたが、白石は、

「本當に人を救ふのは醫者でない。」
と言つて辭した。

又江戸に河村瑞軒と云ふ大富豪があつた。白石は其の息子と親しく交つて居た。そんな關係から、瑞軒は、白石の人物と學才とを知り、自分の娘を白石に娶はせようとしたが、白石は、
「金持の娘を妻にするのは、男子として面白くないことだ。」
と言つて、それも潔く斷はつてしまつた。

三十歳の時に、白石は友人の紹介で、其の頃名高い學者であつた木下順庵先生の弟子となつたが、多くの弟子の中でも、彼の右に出る者は一人もなかつた。

その後、白石は弟子を集めて教へたが、來り學ぶ人が極めて多く、其の中には高貴の人もあつた。或る時、谷某といふ人が來て、

「あなたは愚かな人だ。今、日本で一番評判のよいのは林大學頭です。林先生の門から出なければ、とても立身出世は覺束ない。先生をお變へなさつては如何です。」

と言つた。白石は憤然として、

「私は名聞利達を求めするために學問するものではありません。名利の爲めに師弟の約を破るやうな恥知らずの眞似は出来ません。」

と言つたので、谷某は赤面して歸つてしまつた。其の事をきいた順庵先生は、白石の心に深く感じ、どうかして白石を貧乏から救ひ出さうと考へて居られたが、恰かも、其の時に、かつて順庵先生の仕へて居られた加賀侯の許から、儒者の必要なことを申して來たので、直に白石を推薦した。所が其の時、順庵先生のお弟子の中に、加賀の人で岡島忠四郎といふ者があつて、白石の許に來り、

「あなたは、此の度加賀侯へ御奉仕の由、まことにあつかましいお願いでございますが、其の役を私にお譲り下さるわけには参りませうまいか。私は國許に老母が待つて居りますから、早く歸つて安心させてやりたいと思ひます。」

と頼み入つたので、情誼に厚い白石は、潔く承諾し、その趣を順庵先生の許へ申し出た。順庵先生は友人の爲めに、その地位さへも顧みない白石の心に益々感じ、

「今にはじめぬそのお心がけ、昔の聖人を目の前に見る心地がする。」

と涙を流して喜ばれた。

三十六歳の時、白石は始めて甲府の徳川綱豊つなとよに仕へ、天晴天下あつぱれの大學者として、錚々たる名聲を後世に傳へることになつた。

七七周防が通る

京都の所司代板倉周防守重宗しよしだいいたくらあきらむねむねが、ある日、町を通りかゝると、七つ八つの子どもが、うしろ姿を見て、

「周防が通る。周防が通る。」

と言つた。聰明な重宗は、馬上にあつて、ふと此の言葉をきゝ、咎め、心の中で思ふやう、

「われは此の地の所司代である。將軍の御名代として民を裁く役目である。所司代と云へば、人の恐るゝ地位であるのに、幼い子どもが周防周防と呼び捨てにするとは不審ふしんの至りだ。子どもばかりの言葉ではよもあるまい。その子どもこどもの親たちが平素呼びすてにして居るのを、子どもが聞きおぼえて居るのであらう。これには何かの仔細しさいがなくてはならぬ。」

と、重宗は、直に家來の者に命じて、子どもこどもの親の名をきかせ、屋敷やしきに歸つて、其の者ものを呼び出し、

「其の方は訴訟そしやうをしたことがあらう。眞直まっすぐに申せ。」

と尋問じんもんした。子どもこどもの親は、なせ所司代から、かやうなことを尋問せられるのかわからなかつたが、問はるゝまゝに、

「ございます。」

と答へた。重宗は再びたづねた。

「其の時に敗訴はいそになつたであらうな。」

其の男は驚いた。

「如何にも仰せの通りにございます。ある人のために財産を横領せられましたから、訴へて出ましたが、申し分が立たず、残念ながら………」

と答へた。

「さうであらう。さうであらう。」

と重宗は、一と先づ其の男を歸宅きたくさせ、直に係の役人かへりに命じて、正確せいかくに取調とりしらべさせた。果して其の男の云つた通りであつた。

「それではわれを呼びすてにするのも道理である。」
と云つて、重宗は、再び前の男を呼び出し、

「其の方は、前年訴に負けたが、今度新に調べた結果、其の方の言ひ分の道理あることがわかつた。しかし、もはやよほど年月を経たことであるから、今更どうすることも出来ない。これは拙者の落度であるから、謝罪のしるしとして、横領されただけの金を重宗が其の方に與へる。」

と言つて、私財を抛ち、辨償せられたので、其の男は、はじめて公明正大な所司代の義心に感じ入つた。

七八 苧納餅の献上

米澤の藩主上杉治憲は、世に鷹山公と稱せられて居る名君である。深く民を愛はれみ、民状を知るために、時々たゞひとり野外に出て、民家に休んで民と語り、又親しく農夫の耕作する所を見たりしては、それを参考として善政を施した。

ある時、お城の北の門に、一人のみすばらしい身なりをした老嫗が来て、

「お約束の苧納餅を、お殿さまに献上するために参りましたから、お台所へ通していただきなさい。」

と云ふ。番人は、怪しみながら、台所へつれて行くと、老嫗は重箱へ入れた餅に、大豆粉一包を添へて出した。此の苧納餅と云ふのは、農家で稻を苧つてしまつたのを、祝ふために搗く餅である。下僕の者は、此の老嫗の云ふことがわからぬので、兎も角も其の由を主君に言上すると、

「それはまことに殊勝なことである。」

と云つて取り上げ、老嫗には金子などを與へ、厚くもてなして歸らせられた。

お側の者が其のわけをたづねると、鷹山公は笑つて、

「いつか野遊びの歸りに、一人の老嫗が忙しく稻の取入れをして居るのを見たから、家中の者の風をして手傳つてやつた時に、此のやうに手傳つてやつたら、苧納餅は呉れるであらうと戯れに云つたことがあつた。予の身の上を感じて、斯かることをいたしたに相違ない。正直者である。」

と言はれた。

又ある時、一人の農民の妻が、
 「私が男子ならば、人並に君のご恩に酬^{むく}ふ奉ることも出来ませんが、女の身にて如何ともし難い。
 せめてお城の雑巾^{ぞうきん}にでもお用ひ下さるやうに………」
 と云つて、布を献上した。鷹山公は其の志を喜び、それを自分の着服に用ひられた。

七九 武士の情

その一

上杉謙信^{けんしん}と武田信玄^{たけだ しんげん}とが、互に戦争^{せんそう}をしてゐた時のことである。武田信玄の居る甲斐の國は、
 山國であるから、常にお隣の駿河^{とまり}や相模^{さがみ}から、鹽^{しほ}を買ひ入れて居た。然るに、ある時、今川北
 條二氏は、武田信玄に對し、快^{こころよ}からず思ふことがあつたので、相謀^{あいはか}つて鹽を送ることを止め
 たから、甲斐の人々は、大變^{たいへん}に困^{こま}つた。それを聞いた上杉謙信は、
 「聞けば此の頃君の方の人々は、鹽がなくて困つて居るさうだが、まことに氣の毒なことだ。
 君と僕とは戰場に於てこそ敵同志だが、僕は食物の爲めに、君の領内の良民が苦しむのを見

るに忍びない。僕の方から北越の鹽を送るから使^{つか}つてくれ。」
 と云ふ手紙をやり、領内の商賣人^{しょうばいじん}に命令し、暴利^{ぼうり}を貪^{むさば}つて罪のない人民を苦しめぬやうに、な
 るべく鹽の價を安くして送らしめた。

それが爲めに甲斐の人民は、大に謙信の義に感じた。

その二

今から千年も前のことである。ローマにシーザーと云ふ英雄^{えいゆう}があつた。ポムペイと云ふこれ
 も同じく英雄と屢々戦争をした。

シーザーは、大軍^{たいぐん}を率ゐてアレキサンドリアに入り、ポムペイを撃たうとしたが、恰かも其
 の時にポムペイは何者かのために暗殺^{あんころ}せられた。

其の知らせがシーザーの陣に傳はつた。シーザーはさぞ喜ぶであらうと思ひの外、敵將のあ
 はれな最後^{さいご}をきいて、多くの將卒の見て居る前で、ハラハラと落涙^{らくるい}した。

それから、しばらくの後、ポムペイの將士が捉^{とら}へられてシーザーの前にひき出された。將士
 は、何れも既に命はないものと覺悟^{かくご}して居た。然るに、シーザーは彼等を一と目見るや、懇ろ